
まるでいくしょん ぶれすれっと

犬飼ことり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まるでいくしょん ぶれすれつと

【Nコード】

N3948P

【作者名】

犬飼ことり

【あらすじ】

（あらすじ1）

ローズマリー・ウィザーは綺麗な苗字の人との結婚に燃える女の子だ。ある日、平和な村に魔物が現れた。頼りにしていた守護連盟から来た男はとんでもないやつで……？ 呪われた腕輪と、気に入らない名前と、相性最悪の恋愛（になるのか？）の魔法ふぁんたじー。

（あらすじ2）

ローズマリーは苗字に難ありで結婚に憧れている。だが、ラピとは

口喧嘩ばかりで、アイヴィーとの恋愛は上手くいかない。呪われた腕輪と相性最悪の恋愛と魔法ファンタジー。（魔法バトルに暴力要素あり）

登場人物紹介（前書き）

キャラクターの詳細を書いています。よろしければ、参考にしてください^^

登場人物紹介

ローズマリー・ウィザー（21歳）女

長い黒い髪を一つにくくっている。

黒真珠のような優しい綺麗な瞳。

笑うと可愛い。

民族衣装を着ている。

自分の名前が気に入らないので、

綺麗な苗字の人と結婚するのが夢。

フルネームで呼ばれると怒る。

正義感が強く、勝気。気が強い。

ラピ（20歳くらい）男

金髪の短い髪をワックスで散らしている。

碧眼の釣り目が特徴だが、物凄く美形。

ラフな普段着に防具をつけたような格好。

何も喋らなければ美形だが、

その実態は意地悪で、嘘つき。

ローズマリーの下着に非常に高い関心を持っている（笑）

ローズマリーと相性が悪く、すぐに言い合いになる。

アイヴィー（20歳くらい）男

優しそうな緑の目。

そして短い銀髪。

とても頭が良さそう。

フロウの秘書。

きちんとした服装をしており、服にもアイロンが効いている。優しいが、嫉妬すると怖い（？）冷たいところがあるらしい。

フロウ 男

髪の色が黒くて長い綺麗なまつすぐの髪。

見た目二十五すぎの男。

切れ長の黒目に筋の通った鼻という美しい容姿だが、威厳のある顔立ちだ。

異国の皇帝のような格好をしている。

自分の名前を呼び間違えると怒る。

守護連盟の創立者。竜神さま。

エメラルド（20歳くらい）男

茶色の肩までの髪を一つに後ろでまとめている。

緑の目。

ラフな普段着に防具をつけたような格好。

自分大好き人間。

そして短気で怒りやすい。

ラピをライバル視している。

プライドがすごく高い。

ジュリア（25歳くらい）女

アイヴィーの彼女？長い茶髪のウェーブヘア。

青い瞳。大人の美女。

第一話 ダークマインドと守護連盟

雲が流れ、太陽が翳って、空が静かに唸っている。そんな夏の朝――。

ここは、リトリア国のバウワウ村だ。そこに一人の若い女がいる。田舎臭いことを除けば、いたって普通の娘だ。年のころは、二十一。笑えば可愛いだろうが、今は、顔に疲労が目立って、その笑みを見せる余裕もない。

唸るような風の耳障りな音が、女に付きまとっている。女は家の間に隠れながら空を睨んだ。通常の白い入道雲の中にひととき黒い雲の塊がぶら下がっている。女はそれを見て顔をしかめた。女が見つめるその黒雲には大きな血走った目らしきものが付いている。そして雲の割れ目には避けた口――。もはや、雲ではない。化け物だ。突風が吹いて、その化け物は猛烈な速さで女めがけて降りてきた。「ひっ!」

女は、顔面にボールを受けたときのようにとっさに目を閉じて、うずくまる。心臓が張り裂けそうな音で鳴っている。風の響動とよもす音が耳を激しく打って行く。だが、その化け物は低空飛行して女の横をあっさりと通り過ぎた。どうやら見つかつてはいないらしい。女は溜めていた息をどっと漏らし、気抜けしてその場にへたりこんだ。そして、女は這いながらそばにあった建物に隠れ様子を窺う。

その黒雲の化け物――ダークマインドは、まだいる。それは、時々ま思い出したように地上に降りて低空飛行しながら濁った空気をまき散らしていた。この化け物が来た時から、奇病が村中に流行った。この化け物のせいだと気づいた時には、もう遅かった。バウワウ村で元気なのは女一人だけになっていた。

「守護連盟はまだ来ないの!？」

女は小声でイライラと呟いた。守護連盟とは、いつも村人の助けになってくれる団体である。水不足になれば水を届け、災害になれ

ば、人々を救助、といった具合に生活を手助けしてくれている。

バウワウ村の住民はいつも、守護連盟を頼っている。

今回のように、ダークマインドがいきなり予告もなく現れたときも守護連盟が助けてくれる、そのはずだった。

「守護連盟に伝書鳩で助けを求めて、もう一週間にもなるのに！」

女は村の出口を見たが、閑散としており誰かが来るような気配はない。伝書鳩は一日あれば守護連盟に着くはずだ。非常訓練で一度試したことがあるのだ。

「助けに来るのには三日あれば十分なはずよ。それに、伝書鳩がダークマインドに倒されるということはめったにないって聞くし」

この伝書鳩は緊急用であり、外部との通信を取るため厳しく訓練されているからだ。それに、何故か、鳥にはダークマインドの邪悪な気が効かない。だから、外部との連絡を取るには伝書鳩が最適なのだ。女はいつまでも連絡が来ないことに諦めを感じていた。低空飛行しているダークマインドを親の仇のように睨んだ。

「もう、守護連盟なんて、あてにならないわ！ こうなったら、私がダークマインドをこの村から追い出すしかない！」

そして、隣町まで行って医者呼んでこよう。既に、医者呼んでいたが、怖がってきてくれなかったのだ。だが、ダークマインドがどこかに去ったとなれば話が別だろう。

「みんな、限界に近づいているみたい。早くしないと、みんな死んでしまうかもしれないわ。唯一、元気な私も時間の問題よ」

畑の傍に女の握りこぶしほどの硬そうな石ころが転がっていた。

それを数個、腕に抱える。そして、女はそれをダークマインドに向かって全力投球した。だが、ダークマインドの身体を、石が通り抜けて、向こう側にあっさりと落ちてしまった。だが、ダークマインドは女に気付いた。それどころか、激怒しているようだ。ダークマインドは、怒り狂って叫ぶ。女は決意した。うまく誘導して、村から追い出すのだと。

「こっちよー！」

女は時折振り向いて石を投げながら、村の出口に向かって走り始めた。すると、ダークマインドはすぐに追いかけてくる。女は足は速いほうではない。だが、今日なら、村中の人と競っても一番になれる自信がある。それくらい命がけで早く疾走した。村の出口にある雑木林が目映った。

「もう少しだわ！」

そのとき、風を切る音が、シュツと耳元をかすめ追い越して行った。

「！？」

隣を見ると、自分の長い黒髪が数本落ちていく。スローモーションのように、ゆっくり髪の毛が地面に到達したのが脳みそに焼きついた。女はぞつとして、何かが通ったあとを素早く目で追う。それは黒い矢だったらしく、木を貫いていた。木は恐ろしい勢いで枯れてしまった。女は振り返った。また、ダークマインドの黒い雲の中から矢が複数放たれた。それは、女の横を通って木に勢いよく突き刺さる。再度、木々は恐ろしい勢いでしおれた。

当たりはしなかった。だが、女は腰を抜かして座り込んでしまった。肌が泡立つような恐怖が募っていく。

ダークマインドが獲物を前にした獣のように女に近づく。

「こ、来ないで！」

ダークマインドは然も嬉しそうに空気を吸って舌なめずりした。

ダークマインドは女を絶望に陥れて、その感情を食べているのだろうか。

『ローズマリー、ダークマインドの身体は良くない感情を吸って大きくなるのよ。泣いたり怒ったり憎んだりしては駄目よ』

ふと、母に注意されたことが脳裏をよぎった。

『知ってるわ、ダークマインドが巨大になったら、最後には闇が広がって、人々は闇に飲まれてしまうのよね』

ローズマリーは、暢気に笑顔で答えたことを思い出す。

あの時は、ダークマインドは童話の世界の産物だと思っていたの

に……。

『ローズマリー、争ってはならない、仲良くしなければならいと教えたことを忘れるな』

父が口をすっぱくして話していたことを、また、思い出した。

だが、絶望のふちにいるのに笑えるわけがない。

「怒ってはならない。悲しんではならない。憎んではならない……そんなの無理よ！」

つい、声を荒げてしまう。また、矢が数本、恐ろしい勢いでローズマリーの横を通り抜けていく。ローズマリーは冷やりとしながら身を屈めた。呼吸が苦しくなつて、涙が湧き出た。

「私って何てついてないの！ これも、それも、私の名前のせいよ！ ローズマリー・ウィザーなんて気に入らない名前だから！」

ローズマリーは、罵るように言葉を吐き捨てた。<ローズマリー>これは、両親が付けた名前である。母がローズマリーというハーブが好きなので、子供の名前までそれをつけたらしい。

友人からは、

『ウィザー（枯れた）ローズマリーって残念な名前だね』

などと、ことあるごとにからかわれるし、残念なことがあると、二十一年間、全て名前のせいにしてきた。

ローズマリーだけなら良い。<海のしずく>という意味もあるので気に入っている。

だが、苗字と名前が続くと宜しくない。<ウィザー（枯れた）ローズマリー>なんと、残念な名前になつてしまうのだろうか。

『絶つて対、綺麗な苗字の人と結婚して素敵な名前になってやるんだから！』

数日前まで宣言していた事だ。

——だが。

『そうよ、ローズマリー……貴方だけは生き残って、結婚して幸せになるのよ……早く村から逃げて……』

姉が病床で話した言葉が胸に突き刺さった。

あのローズマリーの宣言は姉に聞かれていたのだ。

「確かに生き残ると言ったわ！　だけど、家族を見捨ててまで生き残ろうとは思わないわよ！」

恐怖と悲しさが一緒にたになり、ローズマリーは涙を零した。

今までは、死ぬことは怖くないと考えていた。だが、死に直面した今、必然的に怖いと思ってしまう。あの矢に当たれば、自分は確実に死ぬ。それなのに、ローズマリーは手足を動かして後ずさりすることしかできない。赤ん坊に戻った時のように、何も出来ない無力さを痛感していた。

また、ダークマインドは矢を数本放った。それは、ピストルの弾のような速さで飛んできて、ローズマリーの足元すれすれに刺さる。慌てて、這いずって逃げようとする。怖くて、気が変になりそうだ。心臓が破裂しそうなほど音を立てている。また黒い矢が飛んで来た。「痛っ！」

ローズマリーは思わず声を上げた。だが、矢が刺さったわけではない。突然、退路に壁が出来て、ローズマリーはそれに頭を打ちつけてしまったのだ。ローズマリーが見上げるとそれは壁ではなく男だった。高い身長の方が突っ立っているのだ。

「大丈夫ですか？」

場違いな、のきな声と笑顔が振ってきた。

「……ええ、なんとか！」

間延びした声に胃がムカついたが、敵ではなさそうだ。思わぬ援軍にローズマリーは少し緊張を解く。男は剣でダークマインドの矢を払った。その隙に、ローズマリーは震える足でなんとか立ち上がる。そして、すばやく走り枯れた木の後ろに隠れた。男もローズマリーにくっついて来る。ローズマリーはほっと息を吐いた。

男は短い金髪に青い瞳を持っていた。ローズマリーより少し若い印象を受ける。整った顔立ちだが、少々釣り目である。それにしても見かけない顔だ。

「貴方は？」

彼はにつこりと笑って、きつぱりと名乗った。

「守護連盟のラピです！ 助けに来ました！」

ローズマリーは怒りで震えた。

「守護連盟ですって！？ 手紙を出してからもう一週間にもなるのよ！？ 今まで何をしていたのよ！」

ラピは一転してムツと顔をしかめた。

「助けに来て文句を言われる筋合いはないだろ！ こっちだって、仕事如山積みなんだからな！」

確かに、向こうにも事情があるのだろう。どちらにせよ、争っている場合ではないことは明らかだ。ローズマリーは短気な自分を奥に押し込めた。

「ご、ごめんなさい。とにかく、早く助けてください！」

だが、ラピは「ハッ」と馬鹿馬鹿しそうに笑い捨てた。

「さて、どうしよーかなー？ あー、貴方の言葉を聞いたら、やる気がうせたなー」

ラピのふざけた、あくび交じりの声を聞いて、ローズマリーは激怒しそうになった。だが、短気はだめだと自分を抑えた。ふと、ダークマインドの攻撃がやんだ。ダークマインドが嬉しそうに目を細めた。ローズマリーの怒りを食べているのか。ラピは、剣を出したまま、枯れた木の陰から様子を見ている。この男は本当に守護連盟から来た男なのだろうか。ローズマリーの脳裏に次々と疑問が湧く。「ラピさん、その剣は特別な剣ですか？」

「普通の鉄の剣ですよ？」

「あの、ダークマインドに剣は効かないと思っただけ……」
石を投げて通り抜けてしまったのだ。普通の剣が果たして効くのだろうか。

「ああ、剣は効きませんね！」

また、ローズマリーの脳裏に疑問が湧く。

「じゃあ、魔法を使うんですか？」

魔法。普通の人間は使えないが、守護連盟の魔法使いなら使える

と噂で聞いたことがあった。

だが、ラピは首を振る。

「いやですね。魔法は使いません!」

魔法「は」使わない、と言うのなら、ラピは魔法が使えるのだからう。

ローズマリーは困惑してしまった。

「でも、魔法でないと、ダークマインドは倒せないと思うんですが

……」

「ああ、そうですね。ダークマインドは魔法でないと倒せませんね」

「……」

「……」

ラピは役に立たないというのに、剣を出したままだ。一向に魔法を使ってくれる気配はない。

ローズマリーは、痺れを切らして口を開いた。

「あ、あの、どうして、魔法を使ってくれないんですか?」

「あなたが、あまりに活躍されていらつしやるので、いきなり、私が出て行って美味しいところを持っていくのはどうかと。例えば、貴方が逃げるか倒されるかしないと、私は出て行きづらいんですよ」

ラピが何を言ったのか理解するのに数秒を要した。

「は、はああああ!? それって、私がダークマインドに倒されてしまえってこと!?!?」

「そういうことですね!」

ラピは楽しそうに声を弾ませて、笑った。

第二話 腕輪に認められた者

ローズマリーの短気を押しとどめておくには、ローズマリーの心の堤防はやけに脆かった。ラピの無責任な言葉のせいでそれは限界に達した。

一週間も待つて、やっと守護連盟の使者が来て、これではあんまりではないかと思う。

「ふっざけんな！ この見掛け倒しが！ 私がどんな思いで待つてたと思つてんのよ！ こーんな役立たずが守護連盟の役人なら私も勤まるわよ！」

ローズマリーに指を突きつけられて、ラピは我慢ならなくなつたらしい。彼は吐き捨てるように笑つて見せた。

「おーおー！ 言つてくれるじゃないですか！ じゃあ、あなたが魔法を使つて倒せばどうですか！ 私はここで傍観してますから、どうぞ、ご立派に敵を倒してみてくださいよ！」

売り言葉には買い言葉。最初はラピの容姿にときめいていたローズマリーはすっかり、ラピの言動に失望してしまった。それどころか、怒りで我慢ならなくなっている。ふと顔を上げると、ダークマインドが甘いデザートを食べた後のような幸せそうな顔をしていた。ダークマインドが攻撃をしないところを見ると、ラピとローズマリーの怒気に満足したのか。ダークマインドは怒りを吸い込んで少し膨れたような気がする。だが、そんなことでローズマリーの怒りは収まらない。

「魔法なんて使えるわけないでしょ！ 使えるんならとっくに倒してるわよ！」

ラピはにやりと意地悪く笑つた。懐から道具入れ用の小さな袋を取り出す。

「使えますよ、このブレスレットを腕にはめればですけど！ でも、果たしてあんたに使いこなせるかどうか？」

明らかにラピはローズマリーを馬鹿にしている。

ローズマリーは暴走した闘牛のように怒り狂った。

「やるわよ！ よこしなさいよ！」

ラピは小さな麻布の袋を、ローズマリーに軽く投げた。ローズマリーはそれを器用に受け取る。金属のぶつかる音が手の中で響いた。小腹を立てたまま、小さな袋を開けて中身を取り出す。

中にはさまざまな腕輪が五つ入っている。金の腕輪、銀の腕輪、胴の腕輪、プラチナの腕輪。そして、幅広で装飾された陶器の腕輪。

「やってやろうじゃない！」

ローズマリーは、陶器の腕輪を、手に取り右腕につけた。

「！？」

その瞬間、ローズマリーは、体の力が抜けるような不思議な感覚に襲われた。そして、キンと耳鳴りが鳴る。そんなことをしているうちに、ラピが剣を持って木の陰から前に進み出していた。

「どうしました？ 何もいわないって事は、腕輪をはめることが出来ないんでしょう。それは、腕輪に拒絶されているってことですよ。魔法は修行した者しか使えませんからね。偉そうに言っていないで、あなたはさっさと逃げていればどうですか」

ラピがローズマリーに背を向けたままローズマリーに話しかけているが、それどころではない。ローズマリーは違和感をもてあましていた。自分の他に誰かの気配を感じるのだ。それは、ラピやダークマインドのことではない。自分の内側に感じるのだ。

「何、これ」

耳鳴りが、にわか雨のように突然止み、キンと何かをはじく金属のような音がベルの音のように耳に入ってきた。ローズマリーが振り返ると、ラピが一人で戦っていた。ダークマインドの放つ黒い矢を鉄の剣で曲芸みたいに器用にはじいている。

「ラピ！ これどうやって使うの！？」

ローズマリーが声を張り上げると、ラピが煩わしそうに振り向いた。そして、ローズマリーの右腕に、しっかり、はまった腕輪を見

て、ラピは「げっ」と、呻いたあと絶句した。ローズマリーはそんな彼にイラついた。

「さっさと答えてよ！　どうやって使うの！？」

その疑問は、ローズマリーの内側から自然と答えが返ってきた。

ローズマリーはいつのまにか答えを理解していたのだ。ローズマリーは声を張り上げる。

「ローズマリー・ウィザーが命じる！　腕輪よ呼応せよ！」

両手を勢いよく開くと、木々が大地が息を吹き返したように光り輝いた。何もかも当たり一面真っ白に明滅する。

「シギヤアアアアアアア！」

ダークマインドが悲鳴を上げる。そして、それは真っ白な光に浄化されて消滅した。光が消えても、まだ光の粒が空気中をキラキラと舞っていた。先ほどの先ほどのしなびた木々は水を取り込んだかのように生き生きとし青々と若葉を伸ばした。濁った空気は朝の瑞々しい湿気を孕^{はら}んで爽やかに吹き抜ける。木々の葉がそよ風に揺られている。普通のことなのにそれが気持ちよかった。

「嘘だろ……？」

ラピは呆然として初めて見た土地に足を下ろしたように周りを見渡す。ローズマリーは胸を張って、どんなもんだと言ってやりたかった。だが、ローズマリーの意識はそこで途切れてしまったのである。

まだ黄金色の麦穂が太陽の光に煌いて、そよ風に従うように頭を垂れて揺られている。どこからか蝉が飛んできて、木に留まる。そして、せわしなく鳴き始める。村に段々と音が戻っていく。

その風景を前に、ラピとローズマリーは、理解できない問題を目

にしたときのように、立ちすくんでいた。ラピは戸惑ったままどう反応してよいのか分らない。ローズマリーを凝視したまま動けなかった。ローズマリーは、ぼうつと夢見るように宙を見ている。それは数秒だったが、ラピには長く感じた。

「お、おい……？」

ラピが声をかけると、ローズマリーは、にっこりと笑った。それはそれは、嫌味のない綺麗な笑顔でラピは驚いた。先ほどから、怒ってばかりいた女とは別人のようだ。ラピはもしかして、と気付いた。ローズマリーではなく、本当に別人なのではないかと。

「……チュリチュカなのか？」

ラピが恐る恐る尋ねると、ローズマリーではない者が頷いた。

「やっと会えたね、ベベルディロ」

そして、ローズマリーの目はフツと閉じて、彼女の体は糸の切れたマリオネットのようにその場に崩れ落ちた。

「お、おい！」

ラピは驚いてローズマリーに駆け寄り、慌てて抱き起こした。呼吸と脈を確かめる。そして、異常がない事を確認して、疲れて安堵の息を吐いた。ローズマリーは眠っているだけだ。

「マジ？ まさか、このマルディクション・ブレスレットが、こいつに合うだなんて」

ラピは、じっとローズマリーを見ていたが、思い出してプツと吹き出した。

「ウィザー（枯れた）ローズマリーか、変な名前だな！」

ローズマリーの寝顔に向かって呟くと、ローズマリーは眠ったまま「うう、ざけんな」と顔をしかめた。本気でうなされているようだ。それは、チュリチュカではなく、ローズマリーそのもの。そして、ラピは「ハハハ！」と心から笑ったのだった。

第三話 最悪の相性

ローズマリーは外から聞こえる気だるげな蝉の声に導かれるようにすうつと眠りから覚めた。瞬きを繰り返し、そして、のっそりと体を起こした。はらりと田舎臭い花柄のタオルケットがめくれると、自分の細い足くびが現れた。ローズマリーはそれをうつそりと確認する。そして、半分瞼が下りた目で辺りを気だるげに見回した。なんてことはない、そこは自分の家の古びたベッドと鏡台とクローゼットが一つがあるだけのこじんまりとした部屋であった。

「ふあー……」

あくびに口を任せ、手を天井の方に突き出してうんと伸びをした。部屋はオレンジ色の夕焼けに染まっている。窓は開け放たれていた。夏の夕暮れ時の寂しげな風が吹き込んでくる。

「あれ？ 私どうしたんだっけ？」

ローズマリーははつきりしない思考のままベッドから降りて、鏡台の前に座った。髪をとかそうとブラシを頭皮に当てる。すると、腕輪のはまっている手首が鏡に映った。それをきっかけに段々と記憶が戻ってくる。

確かローズマリーは家族や村の人たちを助けるためにダークマインドを追い出そうとしていたはずだ。守護連盟から来た見掛け倒しのラピが、魔法を使ってくれずに結局、ローズマリーが魔法を使っただが――。

「あーっ！」

ローズマリーはしまったとばかりに大声を出して、頭を抱えた。それ以上の記憶がない。魔法を使ったあと、記憶がぶつとりと途切れてしまっている。家族や村人はどうなったのだろう。ローズマリーは真っ青になった。悠長に髪をとかしている場合ではない。慌てて、ドアに駆け寄った。

そして、廊下を走って、庭に出る。すると、そこは別世界のように

に人々の楽しげなざわめきで満たされていた。そこには村人が全員集合している。それに、元気なローズマリーの家族の姿もある。みんなは楽しそうにパーティをしていた。ローズマリーは、夢ではないのかと、一歩そこに足を踏み入れた。寝間着のままのローズマリーに人々はすぐに気付いて、色めき立った。それは波のように大きくなり、すぐさま、ローズマリーの家族の知れるところとなった。

「気がついたんだね！　ローズマリー！」

「お母さん！」

ローズマリーの母が、嬉しそうにローズマリーを抱きしめた。それから、姉と父も駆け寄ってくる。

「良くやった、ローズマリー！」

父はここまでやって来て、ローズマリーの背中を嬉しそうにばしばしと叩いた。

「え？　え？」

ローズマリーは戸惑った。何故褒められるのかが分からない。目を白黒させて、周りを見渡した。部屋中央には大きなテーブルが置かれてある。客用のめったに出てこない折りたたみ式のテーブルだ。その上に美味しそうな料理がこれでもかと並べられていた。そしてワインも沢山置かれてある。

「話は全てラピさまから聞いたわよ」と、姉。

「ラピ！」

ローズマリーは悲鳴のように叫んで、ラピの姿を探した。すると、村長の横にちゃっかり立ってワインを美味しそうに飲んでいるではないか。村の人たちは気持ちよく酔っているらしい。顔を赤くしてラピにワインを勧めている。ラピは遠慮なくそのワインを笑顔で受け取っていた。

ローズマリーがラピを無言で見つめていると、ラピがローズマリーに気付いて意地悪そうに、にやりと笑った。ローズマリーは気色ばんでラピをにらむ。村長が徐に声を張り上げる。

「ローズマリー、貴方がラピさまを手伝ったお陰で村人は全員助か

った！ 私が代表してお礼を言おう！ 本当にありがとう！ みんな、二人に拍手！」

みんなの拍手を聞いてローズマリーは嬉しくなった。みんなが無事で本当に良かったと、心から思う。

「いえ、こんなの朝飯前です」

だが、ラピが嬉しそうにみんなからの声援を受けている。それが、我慢ならなくなった。

「ちょっと待ってください！ この男が拍手されるいわれはないわよ！ ラピは何もしなかったのよ！」

ローズマリーはラピを指差して怒鳴った。ラピは目を丸くしている。村人達は戸惑って、隣の人と会話している。

「ラピさまに何てことを言うんだ、ローズマリー！ 守護連盟さまだぞ！」

慌てた父がすぐにローズマリーを叱咤する。

「でも、ピンチなのにラピは魔法を使ってくれなかった！ 私に先に倒されるとまで言ったのよ！」

村人達や家族はシーンと気まずそうに静まり返った。ラピは、じと目でローズマリーを黙視している。

「そ、そうなんですか？」

村長が、隣にいるラピに尋ねる。ラピは笑い飛ばした。

「そんなこと言うはずないじゃありませんか！」

ラピは平然として、のたまった。村人達はほっとした様子で、安心したように笑いあう。

「言っただじゃないの！ この嘘つき！」

ローズマリーは大声で怒鳴った。ダークマインドが居れば喜ぶことと請け合いである。だが、ダークマインドが消滅した今、ローズマリーはお構いなしだ。家族も村の人も今日はローズマリーが怒鳴ることを黙認している。ラピはそんなローズマリーに疲れたのか、ふう、とため息をついた。

「でも、ローズマリーさん？ 貴方は魔法を使ったあと、ぶっ倒れ

ましたよね？ 貴方をここまで運んできたのは私ですよ。それから、村の人たちに薬を飲ませたのも私だ」

「そ、それは……ごめんなさい」

ローズマリーは言いよどんで、それから反省した。知らなかったとはいえ、自分は少々言い過ぎてしまったかもしれない。謝罪の言葉をお口にしようとした。

だが、ラピはまだ言い続ける。

「でも、貴方は、重かったな！ あんなに重い運んだの久しぶりだった！ あー、肩こった！」

ラピは大げさに肩を叩いている。それを聞いたローズマリーはまた腹を立てた。

「重くないわよ！ 失礼ね！」

村人やローズマリーの家族は、呆気にとられて見ている。ラピはまだしつこく続ける。

「それから、貴方が手にはめている腕輪！ それは、守護連盟の大事な腕輪です！」

そういえば、腕輪を手につけたままだった。ローズマリーは右手にはまった腕輪を忌々しげに左手で掴んで引つ張った。

「返すわよ！ あれ？ 抜けない！？ 何で！？」

よく見ると、腕輪は肌に吸い付くようにぴったりだ。隙間すらない。どうやって外せばいいのかわからない。腕輪を外す留め金も何もない。ローズマリーが焦っていると、ラピは失笑した。

「でしょうね！ ですから、腕輪が抜けるまで守護連盟で働いてもらいます！」

「ええっ！？ なんでよ！？ 聞いてないわよ！」

「でしたら、腕輪を返してください」

「手から抜けないのよ！」

どうやっても右手から腕輪が外れない。ローズマリーが一人で格闘していると、村長が愉快そうに笑った。

「まあ、良いではないですか。この村から守護連盟で働くという出

世頭が出たのですから」

「がんばれよ、ローズマリー！」

「ローズマリー、応援しているわよ！」

父や村人達が口々に声援を送る。

「そ、そんな！？」

ローズマリーは愕然とした。誰一人として反対しているものは居ない。

「それに、ローズマリーとラピさま、相性が良いみたいよね」

「何言ってるのよ、お母さん！ 相性なんて最悪よ！」

「そんなことないわよ。ついでだから、お嫁に貰ってもらえば？」

「はあ！？ お姉ちゃんまで何を言い出すのよ！」

「ほら、ローズマリーって、苗字が気に入らないから、素敵な苗字の人と結婚するんだって言うってたじゃない」

母と姉は「ねー？」と、声をそろえる。はやし立てる声や口笛が響く。ラピは可笑しそうに笑っている。ローズマリーはそれをさえぎるように怒鳴った。

「こんな奴、死んでもお断りよ！」

「私にも断る権利がありますからね、ウィザー・ローズマリーさん」
ラピはすぐに言い返す。しかも、からかい半分で苗字と名前を逆に呼んでいる。ローズマリーは涙目になった。

「あーっ！ このひと、私の名前を馬鹿にした！」

「馬鹿になんてしてませんよ、ウィザー・ローズマリーさん」

ラピは意地悪な表情で笑っている。ローズマリーは地団駄を踏んだ。

「きいいいいいい！ 馬鹿にしているじゃないの！ 何で苗字と名前を逆に呼ぶのよ！」

「個人の自由です」

いつの間にか、村人達はローズマリーやラピを気にせずにパーティを盛り上げている。ローズマリーとラピはそれから数十分も言い合いを続けたのだった。

第四話 コックローチとアイヴィー

田舎の朝というものは、賑やかである。トラクターの音が嫌でも聞こえてくる。それでも、ローズマリーは眠りたかった。朝日が今まさに昇ってくるという神聖な時間の中で、ローズマリーは浅い眠りの中で一人苦しんでいた。自分に何が起きているのかまったく分からない。それはまさに金縛りのようで、不自由で息苦しく、なんとも居心地が悪くて敵わない。いつまでこの苦しさが続くのかと不安に思っていると、突然、後ろから押されたときみたいに意識がはつきりして、目が覚めた。寝苦しかったらしく、脂汗をびっしょりと、かいている。部屋の中は、まだ薄暗いが見えなくはない。その中で、目と目があった。ローズマリーはぎくりとした。ラピがローズマリーの横に突っ立って幽霊のようにローズマリーを見下ろしているのである。

「おはよう、ローズマリーさん」

ラピは、不気味にニヤリと笑った。

「なっ!？」

ローズマリーは貞操の危機を感じてすぐさま起き上ろうとする。だが、何かが乗っかっているようで動けない。勿論、ラピは枕元に立っているのが彼が乗っかっているわけではない。先ほどの息苦しさはこれだったのかと気付いた。

「なに、金縛り!？ 動けない!？」

「しょうがないな」

ローズマリーが、風呂の残り湯に落ちた虫けらのように、手足をばたつかせてもがいていると、ラピが何かをローズマリーの身体から除けた。途端に、すうっと、体が軽くなり、ローズマリーはほと息を吐いた。苦しさから開放された瞬間であった。ようやくと、ローズマリーが上体を起こすと、ラピがつまらない芝居を見た後のように嘆息した。

「ようやく起きましたね。本部から連絡があつて、すぐに来るよう
に要請がありました。ローズマリーさんの荷物は、ローズマリーさ
んのお母さまがまとめてトランクに入れてくださったのがここにあ
りますので、これを持って、とつと早く外に出やがってください
ね」

目覚めは最悪だ。もやもやとした頭の中、イライラとローズマリ
ーは返事した。

「分かったわよ。着替えるから先に行つて」

ラピはまた、疲れたように嘆息して、部屋の外に出て行つた。ド
アがバタンと閉まる。ローズマリーはイライラと力任せに頭を掻き
むしつた。眠いし、酷い目覚めだ。寝ぼけ眼で自分の荷物が入つた
トランクを見る。

「ちよつと待つて？」

よく考えれば、このトランクは目覚める前、どこにあつたのだろ
う。やけに寝苦しかったのはどうしてだろう。そこまで考えると、
答えは自ずと返つて来た。ラピは眠っているローズマリーの体の上
に馬鹿に重いトランクを乗せていたのだ。

「なんて起こし方をするのよ！」

ローズマリーはどこまでもふざけているラピに文句を言つてやる
うと思ひ、大急ぎで着替えた。急いでトランクを引きずつて部屋
の外に出た。トランクにはローラーが底についており、がらがらと音
を立てた。怒りに任せて家の外に出る。ラピは涼しい顔をしてロ
ーズマリーが来るのを待つている。

「ラピ！ このっ」

ローズマリーはラピに駆け寄つて、襟首を引っつかもうとした。
だが、その前にローズマリーの父と母、そして姉が立ちふさがつた。
ローズマリーの家族が朝早いにもかかわらず、嬉々として見送り
に家の中から出て来ていたのである。

「ローズマリー、向こうで頑張るんだぞ！」

父がローズマリーの背中をばしばしと叩く。ローズマリーは反動

で何度も瞬きをした。母と姉がローズマリーの手を大切なものに触れるようにそつと握る。

「出世したら手紙頂戴ね！」と母。

「それよりも結婚の方が早いんじゃない？」

姉は茶化してラピのほうを見て意味深に笑った。ローズマリーは先ほどから苛々していたが、もつと苛々が募った。

「何言ってるのよ！」

ラピに再び視線をやると、ラピは手にはめている腕輪を口元に持ってきて一人で喋っていた。

「あー、本部、本部！ 用意が出来ました！ 今からテレポーター ションします！」

そして、ラピはローズマリーへと顔を上げた。

「ローズマリーさん、お別れの挨拶を早くして！」

「あ、行つてきます！」

ローズマリーは慌てて、自分の家族の方を向いて挨拶した。すると、瞬間、身体がパパツと伸び縮みするような感覚が襲う。そして、シユンと体が掻き消えた。

瞬時に景色が素朴なカントリーハウスに変わる。古風な味のある茶色の木目調の壁には神々の絵が彫られている。この国の建物は普通は石で作られているが、この建物は、全て、細やかな木の彫刻で出来ているようであった。ものめずらしそうにローズマリーは辺りを見回した。この木で出来た建物は上品で風情のあるたたずまいだ。高い天井。そして、彫刻で細工された木の柱。そのどれもに神々の神聖な気が漂っている気がした。

「ここは……？」

「守護連盟の本部だよ。これから、コックローチさまに会って貰います」

長い壁画の廊下を通りながらラピはいう。

（こつ、コックローチさま？）

変な名前だとローズマリーは思った。害虫のゴキブリのような響きだ。ローズマリーはハツと言いついて忘れたことを思い出した。

「こら、変態！ もつとまともに起こしなさいよね！」

ローズマリーが今朝のこと思い出して発散するように言うと、ラピは「チッ」と舌打した。なんなのだ、そのふざけた態度は。

「それに、もつと家族にちゃんとお別れを言いたかったのに、あんなときたら！」

「しょーがないですよね？ 早くしろって急かされたんだから。それとも、ローズマリーさんは、まだ家族に甘えたいトシゴロなんですか？」

ラピは馬鹿にした風で、面白そうに笑う。ローズマリーの苛々がどんどん募っていく。謝るところは謝ってほしいのに、ラピは頭を下げることもしない。

「はあ！？ 何言ってるのよ！ 家族は大事でしょ！ 寝言ほざいていると卸すわよ！」

ラピは目を丸くして「あはは」と、笑った。

「怖いなあ、ウィザー・ローズマリーさんは！」

「あーら、性悪の鬼畜には言われたくないですう！」

『ラピ！ さつきから何を言い合っているのですか！ さつきと連れてきなさい！ 転送しますよ！』

どこから聞いたことのない声が割り込んだ。ローズマリーが声の主を探していると、また、グニヤリと身体が瞬間的に歪み、元に戻った。すると、ローズマリーはまた見知らぬ部屋の中に居た。この部屋も茶色の木目調の品のある部屋であった。だが、この部屋は書類で溢れていた。机の上も床にも書類が散乱している。

「いらっしやい」

朗らかな声がして、ローズマリーが振り返ると、初対面の二人が愛想笑いを浮かべて立っていた。

「君が、チュリチュカの腕輪が合った者か」

この男の言葉は威厳のある響きを持っていた。黒くて長い髪をし

ているのが印象的だった。ローズマリーの髪と瞳は青味がかった黒だが、この男の髪と瞳は本当に真っ黒で美しい。その人は、異国の皇帝のような格好をしている。

「彼女がそうです」とラピが代わりに答えた。

「貴方は名前はなんと仰るんですか？」

そうローズマリーに尋ねた男は、とても優しく紳士的な空気を持った、ラピと同じ年くらいの男だった。きちんとした服装をしており、服にもアイロンが効いている。銀色の短い髪と緑の目が美しい。ローズマリーは自分の名前を答えるのに戸惑った。自己紹介が一番嫌な瞬間だ。二人はじつとローズマリーの方を注目している。ローズマリーの発言を待っているというのは分かりきっていた。

「私が言っただけだろうか？」

ラピがにやりと笑った。ローズマリーは二人に見つからないようにラピをにらんだ。そして、ようやく、ローズマリーは口を開いた。

「ローズマリー・ウィザーです」

ローズマリーが俯くと、名前を尋ねた男がぐすりと笑った。ローズマリーはその男が笑った気配に思わず萎縮して視線を下げた。

「なるほど。苗字は響きがあまり宜しくありませんが、ローズマリーという名前は、神秘的で素敵な名前ですね」

ローズマリーは「えっ？」と驚いて顔を上げた。緑の目をした男は穏やかに微笑んでいた。紳士的で優しい太陽のような笑みだ。まさか、自分の名前を褒められるとは思っても見なかったので、ローズマリーは戸惑って目を白黒させた。

「私はアイヴィーです。このお方の秘書を担当しております。よろしく願いますね」

「は、はい、こちらこそ！」

にこにこ、ローズマリーとアイヴィーは笑いあう。ラピは明らかに面白くなさそうで、「ケツ」と吐き捨てた。ラピは、ローズマリーの傍に寄って耳元で囁いた。

「ウィザー・ローズマリーさん。コックローチさまに挨拶がまだ済

んでませんよ」

ラピが苗字と名前を逆に呼んだことにまた腹を立てた。

「分かってるわよ、馬鹿ラピ！」

ローズマリーは、改まって、こほんと咳払いした。そして気を取り直して、頭を下げる。

「初めまして、コックローチさま！」

ローズマリーの声は大衆を前にした演説のように部屋に大きく響いた。辺りが水を打ったかのように静まり返った。アイヴィーは何故か絶句している。ラピは「プツ」と吹き出し、口を押さえて顔を背けた。コックローチと呼ばれた黒髪の男は、怒りを抑えているように震えている。ローズマリーは周りの様子が可笑しいことに気づいた。

「どうされたんですか、コックローチさま？」

尋ねて失敗した。

「シャラ——ップ！」

コックローチの目がカツと稲光のように黄色く閃いた。どこかで本当に雷が落ちたような音がして、ローズマリーは驚いた。

ローズマリーはコックローチに睨まれて立ちすくんでしまった。

第五話 マルディクション・プレスレット

建物の外では、雷が鳴り響いている。外では人々の悲鳴が聞こえる。コックローチは怒って居る様子だ。目がぎらぎらと光っており、コックローチの着ている服はふわりと空気を含んで浮き上がっている。ローズマリーは恐怖してその場にへたり込んでしまった。だが、ラピとアイヴィーは平然としている。

慣れているのだろうか。

「立てれるか？」

ラピが手を伸ばしたが、ローズマリーは横に首を振った。

「腰が抜けて……何で怒ってらっしゃるんですか？」

「ローズマリーさんはフロウさまの一番気に障ることをおっしゃったみたいですね」

と、アイヴィーは苦笑している。まばゆい稲光が閃き、雷鳴が轟く。

「私は、コックローチではないフロウだ！」

「も、申し訳ありません！ ラピがそのように紹介したものですからそのとおりだと思ってしまいました！ 申し訳ありません、フロウさま！」

「私はそのようなことは申し上げておりませんよ」

ラピは面白そうにローズマリーを眺めている。ローズマリーはラピを蹴飛ばしてやりたくなった。だが、フロウの怒りを静めるほうが先である。

「申し訳ありませんでした、フロウさま！」

ローズマリーが慌てて頭を下げると、フロウの怒りがしぼんできた。目のぎらつきが消え、外の雷も消えた。フロウのふわりと浮き上がっていた服も、風船がしぼむように元に戻った。フロウは落ち着きを取り戻す。

「でも、コックローチなんて呼ばれても本名ではないのですから良

いではありませんか！ 私の名前なんて、自己紹介で笑われるし、普段からはからかわれるし、ろくな事がないんですから！」

ローズマリーが愚痴を零すと、フロウは自らローズマリーの手を取り、ローズマリーを立たせた。不思議なことに、抜けた腰が元に戻っている。フロウはじわりと涙を浮かべる。

「ローズマリー！ よく分かるぞ！ その気持ち！ ちょっと部下に厳しくすれば『コックローチさま』と陰口を叩かれるし！ 私の髪は黒々としているが、ゴキブリに見えるのだろうか！？」

今度は、フロウは感極まって、涙を滂沱と流し始めた。また窓の外が天気が悪くなり、今度は外では雨が降り始めた。ローズマリーはフロウに同情した。

「私の髪も黒髪です。それに、フロウさまの髪はつややかで黒檀のように美しいです！ どうか元気を出してください」

フロウは嬉しそうに笑った。

「ありがとう、ローズマリー！」

外は天気雨だったようで、また日が差し始めた。ローズマリーは不思議に思い窓の外に目をやる。そして、疑問を口にした。

「あの、先ほどからフロウさまが怒ったり泣いたりすることに天候が変わった気がするんですが、気のせいではないですよね？」

「そりゃそうさ、フロウさまはこの世界の守護神の竜神さまなんだから」

ラピの台詞を聞いてローズマリーは仰天した。

「ええっ、竜神さま……！？」

確かに、先ほどから尋常ではないことが立て続けに起こっているが。そういえば、フロウは威厳があるし、神聖な気が漂っている。

ローズマリーは神様が本当に存在していることを今知った。

「ラピの言ったとおりだ。そして、私が守護連盟の創業者である。ローズマリーには腕輪が合ったものとして守護連盟で働いてもらうが異存はないか？」

「異存ならすぐあります！ どうして、腕輪が合っただけで、こ

こで働かなければならないんですか！？ 私は実家の農業が気に入っているのに！」

フロウは「うむ」と頷いた。ラピと話せば、すぐ喧嘩になるが、フロウはローズマリーの怒気を受け流している。

「普通の腕輪なら、その必要はない。ローズマリーがしている腕輪に問題がある」

「えっ！？ この腕輪に？」

ローズマリーは忌々しい腕輪を目の前にやって見つめた。桃色の陶器で出来た幅広の装飾された腕輪だ。

「そう言えば、この腕輪、吸い付いているみたいに取れないし……」

ローズマリーがもう一度腕輪を外そうとするが、無駄なようだ。

ラピが横から顔を出して、にたりと笑った。

「その腕輪、呪われてるんだよ」

ラピは怖そうな顔で「イツヒツヒ」と笑う。ローズマリーは怖がりだった。ダークマインドは平気だが、どうも幽霊や呪いのようなのはつきりしないものが苦手なのだ。ローズマリーは、本気で恐ろしくなってしまった。

「もう！ 脅かさないでよ！」

ローズマリーは、ラピに拳骨を振り回したが、簡単にラピに避けられてしまった。

「顔に似合わず怖がりなんだなあ、ローズマリーさんは！」

ラピは「あはは」と楽しそうに笑っている。アイヴィーが「こら、ラピ！」と、咎めた。

「確かにその腕輪はマルディクション・ブレスレットというだけあって呪いの腕輪だと思いますが、私もラピもしているので、安心してください」

アイヴィーに宥められて、ローズマリーは落ち着きを取り戻した。そういえば、アイヴィーもラピも良く似た腕輪を右腕にはめている。「まるでいくしょん・ぶれすれつと？」

「ええ。ローズマリーさんは伝説を知っていますか？」

と、アイヴィーはにこやかに尋ねた。

「ダークマインドの伝説なら絵本で読んだことがあります」

「では、腕輪の伝説は？」

「いえ、なんとなく知っている程度で、詳しくは知りません」

「ほら、これを読めよ」

ラピが小冊子をローズマリーに渡した。ローズマリーは三つ折りになっているそれを広げる。

「何、これ？」

「守護連盟の宣伝用のパンフレット」

「えー何々？」はるか昔、人々の間には魔法がありました。だが、魔法を使う者の心が穢れていたため、やがてその心は邪悪な気と化し、ダークマインドが生まれたのです。そして、ダークマインドは人々を襲い人々の絶望を食らうようになりました。だが、人々には魔法があつたため、すぐにそれらを消滅できました。それまでは「やがて、ダークマインドは魔法を使えるものを襲いつくし、その魔力を腕輪に封じ込めてしまったのです。そのあとには、貧弱な魔法を失った民しか残らなかったのです」

「ダークマインドはゆつくりと人々の絶望を食っていきました。人々が絶望した時、人々を守る守り神や守護神が立ち上がったのです。それが、組織したものが守護連盟です。守護連盟は腕輪をダークマインドから奪い返し、人々の力を借りて国々に平和と安息を届けているのです」か、ふーん、守護連盟ってやつぱりすごいよね」

「つまり、ここに出てくる腕輪が、マルディクション・ブレスレットです。魔法使いの魔力の核を吸い取って出来た腕輪ですね。呪われていると言うのは、腕輪に意志があるからそのように思われているのです」

「意志……」

「魔法使いの遙かな記憶とも言われています。この腕輪に合ったものは高い魔力を得ます。しかし、マルディクション・ブレスレットが合うものはごく少数です。だから、その魔力を持ったものは少し

でも人々のためになるように守護連盟に協力する必要があるのです」

「なんで少数なんですか。もっと腕輪に合う人を探せば」

「マルデイクション・ブレスレットを模して作られたレベル・ブレスレットなら、万人が使えます。だけど、魔力は非常に限られているし、修行しなければならぬ。それよりは、マルデイクション・ブレスレットの合った者に協力してもらう方が良いでしょう。マルデイクションブレスレットなら修行しなくても使えますからね。ですが、マルデイクション・ブレスレットには人と腕輪の相性があります。腕輪に拒絶されてしまえば、腕輪を使うことは出来ません。少々、癖のある腕輪なのです」

「じゃあ、その腕輪に合う人を探せばいいではないですか」

アイヴィーが言っていることが言い訳じみて聞こえ、ローズマリは少々ふて腐れた。アイヴィーは苦笑する。

「昔、魔力を封印された魔法使いは数百万、数千万いるのですよ。それだけ、腕輪の数が多いのです。そして、その腕輪に合う確立は数千万分の一と言われています」

「そんなに確率が低いの!？」

「だから、俺たちは貧乏くじに当たったようなもんだよ」

ラピは肩をすくめた。だが、ラピはそんなに悲観しているようには見えない。ローズマリーはもう、諦めきって、ため息を付いた。

「じゃ、じゃあ、いつまで働けば良いんですか？」

「だから、この腕輪が取れるまでだよ」と、ラピ。

「いつになったら取れるのかを聞いているのよ」

「だから、死んだらだよ」

ラピはさらりと答えた。ローズマリーの動きが止まった。内容が衝撃過ぎてなかなか理解できないのだ。

「……」

「……もしもし？」

ラピがローズマリーの顔を覗き込む。時計の針が、カチカチと音を立てて、やがて六時ちょうどを指し示した。

「えええっ！？ 死ぬまで腕輪が取れないの！？」

ローズマリーの素っ頓狂な大声に驚いて、ラピは仰け反った。

「そのとおりだ」

ラピとアイヴィーの代わりに答えたのは、それまで黙っていたフロウだった。

第六話 いわくつきの部屋

「ローズマリーには、ずっとここで働いてもらう。いいな？」

フロウはしっかりと口調でローズマリーに命じた。ローズマリーは不思議な魔力のせいで思わず「はい」と返事しそうになった。しかし、ここで、頷いてしまつては後悔すること請け合いだ。ローズマリーは抵抗して首を振った。

「困ります！　ずっとだと仰るなら、私はここに参りませんでした！」

勇気を出して反抗すると、フロウは黙ってしまった。ラピが面倒くさそうにため息を付いた。

「だから、そのことは黙つてたんだよ」

「騙すなんて酷いじゃない、ラピ！」

「あの時、俺が出した腕輪の中には、レベル・ブレスレットが四つ、マルデイクション・ブレスレットが一つあったけど。五つもある中からあんたは迷わずにそれを選んだんだ。もし、レベル・ブレスレットを選んでいれば、腕からはずすことも出来たのに」

「それは、ラピが選べつて言うから！」

人のせいにされたラピは立腹した。

「何言つてるんだよ？　あんたが、俺のやっていることに文句を言ったからだろ！」

売り言葉に買い言葉だ。当然、ローズマリーも怒る。

「でも、ラピは魔法を使つてくれなかったじゃない！」

「使つつもりだったよ。あんたが居なければね！」

「なんで、私が居ちゃだめなのよ！」

「話したくないね！」

「まあ、二人とも、落ち着いてください」

アイヴィーが二人を制止した。そして、アイヴィーはローズマリーに優しい視線を投げかけた。

「ローズマリーさん、これは、運命だと思って諦めてくれませんか」
「運命……嫌な運命だわ……」

ローズマリーは消沈して俯いた。

「嫌？　この暮らしはそれほど、嫌なものではないはずです。マルディクション・プレスレットを使えるものが来たと、みんな温かく迎えてくれるはずですよ」

フロウも頷いた。

「その通りだ。だれも、邪険にするはずがない。仲間が増えて、自分の仕事が減るのだからな」

ローズマリーは黙りこくった。そんなことを言われても「そうなんだ、嬉しいわ」とはならない。

「落ち込まないで、ローズマリーさん。私は、貴方を応援していますよ」

まっすぐに見つめられて、ローズマリーは気持ちが癒されていくのが分かった。

「アイヴィーさん……」

後ろでラピが砂を吐きそうな顔をしている。アイヴィーはラピに微笑みかけた。

「さあ、ラピ。ローズマリーさんを彼女の部屋に案内してください」

「……部屋って？」

ラピが嫌そうな顔になる。尋ねたのは、理解しきっているのに、受け入れられないといった感じた。

「あの部屋に決まっているじゃないですか。ラピは十分に知っているでしょう？」

もしかして、いわくつきの部屋なのだろうか。ローズマリーは不安になった。

「ローズマリーさんはここに来て頼る人が居ないのです。貴方が仲良くしてあげないでどうするんですか」

アイヴィーにたしなめられてラピはため息を付いた。

「……分かったよ。ローズマリーさん、付いてきて」

ラピは諦めきつた顔で、先に部屋の外に出て行く。ローズマリーも慌てて、ラピの後を付いていく。そして、ドアを閉めた。

部屋の外は廊下になっていた。初めてここへ来たときの廊下と似ているが少し違う。ラピが突っ立って待っている。ローズマリーはラピに駆け寄った。初めて目にする長い木目調の廊下だ。壁には人の写真が沢山額に入れられて飾られている。周りを見回してローズマリーはぼやく。

「テレポーテーションばかりするから、場所が分からないわ」

「仕方ないな。俺が案内してやるよ」

ラピらしからぬ優しい言葉にローズマリーは面食らった。

「あ、ありがとう」

ローズマリーが思わず礼を言っていると、ラピが視線をそらして「おう」と言っただけに歩き出した。もしかして、照れているのだろうか。確かに、ローズマリーも照れくさかった。ドアを開けて、館の外に出る。外は晴れ間が見えていた。降った雨の雫を受けて、緑はキラキラと輝いている。あまりの気持ちよさにローズマリーは、うーんと伸びをした。ラピがさっきまで中に居た建物を振り返って、その館を指差した。

「ここが、守護連盟本部のく神々の館だよ。守護神は殆ど、フロウさま以外は出払っているけど、神様を見かけたときは十分に気を付けて」

「どうして？ そんなに怖い方ばかりなの？」

「ああ、中にはそういう気難しい方もいらっしゃる。だからな」

「うん、分かった」

ラピはまっすぐに歩いていく。木々の下を通っていくと、手入れされている中庭に出た。ご丁寧にも噴水まで整備してある。

「この向かいに立っている建物が、守護連盟の魔法使いの住んでいる寮だよ。普通に魔法使いの寮って呼んでる」

ラピが正面玄関まで歩いていく。ローズマリーもラピの横に付い

て行く。ローズマリーは目の前の建物を見上げた。

先ほどの神々の館もそうだが、この魔法使いの寮も木目調で統一されているようだ。神々の館とは違い、彫刻はあまりされていないが、品のある素朴な作りだ。

そして、魔法使いの寮の建物は東西北と三棟ある。ちなみに、神々の館が位置するのはその南だ。それから、建物は三階建てになっていた。

「さて、入ろうか」

玄関のドアを開けて、寮の中に入る。大きな広い天井。階段もゆったりと大きく設計されているようだ。綺麗で家賃の高そうな建物である。

「こつちだ」

「うん」

階段を上っていく。途中、魔法使いと思われる男女とすれ違った。その男女も右腕にブレスレットをはめている。マルディクション・ブレスレットなのだろうか。

「ここが、ローズマリーさんの部屋だよ」

そこは、西棟の二階だ。廊下を挟んで、向かい合わせに部屋がある。廊下の右側にある部屋の片方がローズマリーの部屋らしい。

ラピが部屋の鍵を開けて、

「はい、鍵」

「ありがとう」

その鍵をローズマリーに渡した。

ローズマリーは嫌そうな顔で部屋の中を覗く。どことなく、空気がよどんでいるような気がする。

「どうした？ 入らないのか？」

ラピが不思議そうにしている。ローズマリーは思わず、ラピの服を掴んだ。

「さっき、アイヴィーさんと話していたとき、嫌そうにしていたでしょ」

「ああ、あれね」

ラピは思い出して、苦笑いしている。

「この部屋、なんか、いわくつきなの？ 幽霊が出るとか？」

ローズマリーが怖がっていると、ラピがにやりと笑った。

「ああ、出るよ！ すごく薄気味悪いのが！」

ラピは幽霊の真似をして、ローズマリーを脅かした。

「ええっ！？ ほ、ほんとうなの！？」

ローズマリーは本気で恐怖した。割り当てられた部屋に幽霊が出るとは、なんて付いていないのだろう。ローズマリーは泣きそうになる。それを見たラピは楽しそうに笑った。

「ウソウソ、幽霊なんて出るわけないだろ！ さっきから思ってたけど、あんたって本当に怖がりなんだなあ」

「馬鹿ラピ！ いい加減にしろ！」

涙目になったローズマリーは、ラピに殴りかかる。だが、ラピに軽くあしらわれてしまった。本当にむかつくことこの上ない。

「ああは！ ごめんごめん。まあ、いい部屋だと思うから安心して」
「よかった」

ローズマリーは、やっと部屋の中に入る。トランクをよいしょと部屋の隅に置く。思ったより、ほこりも積もってないし、綺麗な部屋だ。

ローズマリーは、窓をがらりと開けた。澄んだ心地よい風が部屋の中に入ってくる。

「ベッドは、使用人の方が虫干ししてくれているからすぐにも寝れるよ」

ラピも部屋の中に入ってきて、ローズマリーの隣に立った。

「うん、分かった」

「何かあったら、俺の部屋は隣だから呼んで？」

「うん、分かった……って……えっ、隣？」

ローズマリーはラピのほうを振り返った。先ほど、ラピが理解不能なことを言った気がするが。

「ああ」

ラピはにににこと笑う。ローズマリーはもう一度聞く。

「隣って、この部屋の左？ ラピの部屋のとなり？」

「そういうこと」

「なんですって!？」

ローズマリーがまた、抗議の声を上げると、ラピが目を丸くした。

第七話 エメラルドVSローズマリー

「なんで！？ 女子寮と男子寮別れてないの！？」

「ああ、別れてないけど別にいいじゃん。普通だし」

「全然、普通じゃないわ！ 学校の寮でも分かれているっていうじゃない！ 何かあって結婚できなくなったらどうしてくれるのよ！」

ローズマリーの夢は綺麗な苗字の人と結婚することだ。もし、変態男に襲われて傷物になったら、お嫁に行くことは夢のまた夢になってしまう。ローズマリーはその事が我慢ならなくて、つい怒鳴ってしまった。だが、怒鳴られたラビは当然、腹を立てる。

「なんで、俺に言うんだよ！」

ローズマリーはしまったと思った。つい、ラビに文句を言ってしまった。ローズマリーの悪い癖が出た。怒ったは良いものの、引っ込みが付かなくなった。

「あ、あんたの隣っていうのが心配なの！ 今朝だって、勝手に私の部屋に入ってきていたじゃない！」

本当に今朝は恐怖したのだ。襲われるかと思ったのだ。ラビが頭を掻き毟った。

「心配しなくても、ブレスレットが守ってくれるから安心しろよ！」

「そ、それなら良いのよ」

ラビはじつとローズマリーの方を黙視していたが、はあっとため息を付いた。うんざりだと顔に書いている。

「だから、嫌だったんだ！ 俺の部屋の隣に誰も入ってこないように、俺があんたのブレスレットを持っていたって言うのに！」

何もかもローズマリーが悪いと言わんばかりだ。そのことにローズマリーはまた怒った。

「私のせいにするの！？ あんたが、腕に付けろって言ったんじゃない！」

「言っただけど、まさかブレスレットが腕に合うなんて思わなかった

「んだよ！ 誰がこんな女を襲うかったの！」

「なんですって！？」

「お前なんか頼まれても襲わないって言ってるんだよ！ このヒステリー女が！ クマに相手してもらえよ！」

「聞き捨てならないわ！」

「なんだよ！ 本当のことだろ！ 文句あるのかよ！」

「五月蠅いな！ ドアを開けっ放して何を叫んでんだよ！」

聞いたこともない男の声が割り込んだ。誰かが部屋の中に靴音に怒りを込めて入ってきた。ローズマリーは、我に振り返り向いた。そして、「すいません」と、軽く頭を下げる。そこには、二十歳くらいの見たこともない男が立っていた。

近くの部屋の住人だろうか。ローズマリーはじつとその男を注視した。彼は、茶色の肩までの髪を一つにまとめている。緑の目は自信有り気に輝いている。背はラピより低い。その男は、じつとローズマリーを見ている。ローズマリーのマルディクション・プレスレットに彼の視線が留まった。

「ラピ？ この女つてもしかして、チュリチュカの腕輪の？」

「ああ、そうだよ、エメラルド」

彼はエメラルドというらしい。ローズマリーはじつと見つめた。

「ローズマリー・ウィザーです」

言いたくない名前を嫌々名乗った。すると、エメラルドは面白そうに笑った。

「どおも！ あんたも災難だよなあ！ ラピなんかと仕事しなきゃなんないなんて！」

「どういうことですか？」

これからは、ラピと仕事をしなくてはならないのだろうか。しかし、引つかかるのはエメラルドが『ラピなんか』と言ったことだ。

「僕もさあ、ラピと仕事を組まされたことがあるけど、こいつ何の役にも立たないんだよ！ クズもいいところ！ 能無しなんだよなあ、

ラピってさあ！」

ラピは無言でエメラルドを見ている。ローズマリーの時とは全然態度が違う。怒りもしないし、何も言おうとしない。

「ちよつと！」

ローズマリーは我慢ならなくなった。エメラルドはにこにこしながら、「ローズマリー、何？」と、なれなれしく呼んだ。

「黙って聞いていれば、ラピのことをクズとか能無しとか変態とか！」

エメラルドは面食らって瞬きした。ラピがローズマリーを半眼でにらむ。

「……おい、変態とは言っていないぞ」

ラピの米神が引きつっている。

「あれ？ そうだった？」

「それに、あんたも似たようなこと言って怒鳴っただろ」

「……」

「……」

ローズマリーは指をエメラルドに突きつけたまま沈黙した。ラピの言い分にローズマリーは「と、ともかく！」の一言で片付けた。そして、エメラルドにまくし立てる。

「確かに、役に立たないかもしれないけど、言いすぎよ！ ラピに謝りなさいよね！」

思わぬところで庇われたラピは、驚いて瞬きする。可笑しそうにエメラルドが笑う。

「ふうん！ あんたってラピの肩を持つんだ？」

「何よ、私は普通のことを言っただけよ！」

「でも、僕はこの仕事に誇りを持っているんだ。いい加減な奴とは組みたくないんでね！ あんたも、すぐに僕と同意見になると思うよ！ あんたが、どこまでやれるのか楽しみだよ！」

「ご忠告どうも！」

バチバチとローズマリーとエメラルドの間に火花が散る。だが、

先にエメラルドがハツと馬鹿にしたように笑った。

「あんたの名前なんて言ったつけ？ ウィザー（枯れた）ローズマリー？ あー、残つつ念な名前だね！ 実力も残念でない事を祈るよ！ 枯れたローズマリーさん！ あーはっはっはっはっは！」

エメラルドは言い捨てると、愉快そうに部屋の外に出て行った。ボタンとドアが閉まる。ローズマリーは、穴を開けそうな鋭い視線でエメラルドの出て行ったドアをにらんだ。

「何よ、エメラルドって綺麗な名前した人にはわからないわよ！

エメラルドなんて粉々にしてやるわ！」

「お前な、自ら進んで敵を作るなんて、どうかしてるぜ？」

ラピは呆れている様子だ。

「馬鹿にされて黙ってるなんてどうかしてるわよ！ その、私も悪かったけど……」

ローズマリーがドアの方に向かってパンチの練習をしていると、ラピが笑った。

「なあ」

「……何よ？」

ローズマリーはラピを見て驚いた。とても嬉しそうな顔をして笑っていたからだ。ラピは美形だ。美形が笑うと一種の女の凶器になる。その、綺麗な微笑みにローズマリーはすっかり狼狽した。

「あんた、俺に気があるの？」

「はあ！？」

いきなり何を言い出すのかと思えば。ローズマリーはムカついたので反論しただけに過ぎない。何を勘違いしているのだろう、この男は。

「まあ、俺はこんな気の強い女なんてお断りだけど！ ウィザー・ローズマリーさん？」

また、この男はフルネームを逆に楽しそうに言う。顔と性格は比例しないということを忘れていた。

「何言ってるのよ！ 私だって、うそつきの変態なんてお断りよ！」

エメラルドもラピも変わらない。ローズマリーは、ラピを庇って
損をしたような気がして、また、腹を立てるのだった。

第八話 初仕事と発作

「ローズマリー・ウィザーが命じる！ 腕輪よ呼応せよ！」

大地が、緑が、光り輝く。辺りが白く明滅する。真つ白な光で染め上げると、ダークマインドは悲鳴を上げて消滅した。そして、周りは、またもとの綺麗な風景に戻る。生き生きした緑が爽やかな風に吹かれて揺れている。

「ふう」

魔法を使うと、かすかな疲労感がローズマリーの体の中に残る。

更に、これが、十件目となると、大変くたびれてしまったわけだが……。

登山をしたときのような疲労だ。ローズマリーは幼いとき、父の狩りに山へ付いて行ったことがある。あの時は、一日中歩いたので、帰って来るなり泥のように眠った。それくらい、今は疲労感で一杯である。

後ろで拍手の音が聞こえる。ローズマリーはため息を付いて後ろを振り返った。そこには、にこにこ拍手を送るラピの姿がある。

「ウィザー・ローズマリーさん、すごい！ よつ、この若大将！」

「若大将って、私、女なんだけど……」

ローズマリーは一気に疲労感が増した気がして、思いきりため息を付いた。ラピは、まったく疲れていないし、元気な顔をしている。それもそのはず、魔法を使っているのはローズマリー一人なのである。

ラピは村人に薬を飲ませるだけだ。魔法なんて、これっぽっちも使おうとしない。まったく全然だ。

ローズマリーはアイヴィーとフロウに期待されているらしく、朝食を食べた後、十件もの案件を任されてしまった。しかも、ラピと組まれてだ。その後に、丁度、ラピと対立しているエメラルドと出くわして、エメラルドがラピを茶化したのだ。

「十件？ あんたらが十件も案件を処理できるとは思えないね！ ラピなんて、一日で一件がせいぜいなんだからさあ！」

これには、ローズマリーがぶちきれたのだ。

「言ったわね！ 十件出来たら、あんたはラピを認めなさいよね！」
思い切り啖呵^{たんか}を切ってしまったのだ。ローズマリーは新人なので、ラピがフオローしてくれるだろうと考えていたのである。思っていたが、その考えは甘かったようだ。ラピはまったく魔法を使おうとしない。魔法を使うどころか、ローズマリーが魔法を使って解決すると、ラピは、喜んだ村人のパーティに参加しようとする。そんなことしている場合じゃないと、ローズマリーはラピを引っ張って次の現場に向かい、その繰り返しで今に至るのだ。

「ちよつと、ラピ！」

「なんだよ？」

「あんた、一回くらい魔法を使ったらどうなのよ！ 私ばかり使ってるじゃない！」

「俺だって、使いたいけど使えないんだよ！ あんたが居るからどうしても使えない！」

ローズマリーは嘆息して、ラピを見つめた。ラピの思いつめている様子から何か事情があるように見える。もしかして、昔、魔法を使って誰かを巻き込んでしまったのだろうか。確かにありえそうだ。「仕方ないなあ……。村の人たちに薬を飲ませたら、帰って報告書を書かなきゃ……。私、もうくたくた……」

ローズマリーは村人達の家へ行こうとした。だが、ふわふわとして歩いている感覚がない。空を飛んでいるような浮ついた感じがする。視界が九十度に傾いたと思った。

「ローズマリーさん？ お、おい！」

そして、ローズマリーの意識はなくなった。

今は何時だろう。ローズマリーは薄っすらと目を開けた。辺りは

薄暗い。その中で、言い合っている声が聞こえる。その声のせいで、ローズマリーは目覚めてしまったといっても良い。

「貴方が付いていながら、なんですかこのザマは！」

この声はアイヴィーだ。アイヴィーの怒鳴り声は意外な気がした。彼は温厚そのものだったからだ。

「あんたが十件もあいつに任せるのが悪いんだろ！」

どうやら、アイヴィーと話しているのはラピらしい。ということは守護連盟に帰ってきたということか。そういえば、今眠っているベッドは自分の部屋のベッドだ。

「全部ローズマリーさんが処理したんですか！？ 貴方は何もせずにな！？」

「おお、そうだよ！ 俺は休みながらやろうと思ったんだけど、あいつが妙に張り切るから」

「止めるのが貴方の役割でしょう！」

「はいはい、全部俺が悪いですよ！」

「分かればいいんです！」

その台詞にラピはムカついたらしい。

「アイヴィーさんよ。そんなに心配なら看病でもしてあげれば？」
売り言葉に買い言葉だ。

「そうですね、そうしますよ」

思わぬところで、アイヴィーが賛同したのでローズマリーは驚いた。少しの沈黙があった。ラピは「ケツ」と吐き捨てて、部屋から出て行ってしまった。足音が近づいてきて、ローズマリーの眠っているベッドで止まった。ローズマリーは慌てて眠ったふりをした。アイヴィーの温かい手がローズマリーの額を撫でる。ローズマリーはどぎまぎしてぎゅっと目を瞑った。

「熱はないようですね……。もしかして、ローズマリーさん起きています？」

アイヴィーはくすりと笑う。ローズマリーは観念して目をそろりと開ける。

「ばれてました？」

アイヴィーは「ええ」と言って笑う。その時、アイヴィーの顔が苦しそうに歪んだ。

「……っ！」

よく見ると、アイヴィーは腕輪の嵌った右手を左手で押さえている。

「アイヴィーさん、大丈夫ですか？」

流石に心配になって、ローズマリーは上体を起こした。苦しんだのは一瞬だったようでアイヴィーは息をついて、落ち着きを取り戻した。

「大丈夫です……マルディクション・ブレスレットが少し……」

「ええっ？ どうしたんだろう？ 大丈夫ですか？」

ローズマリーはアイヴィーを本気で心配していたが、アイヴィーは次の瞬間笑い出した。

「あはは、大丈夫ですよ！ 大丈夫です！ 貴方に心配されちゃしょうがないですね」

ローズマリーも可笑しくなって、あははと笑う。アイヴィーの好感がぐんと上がった。だが、このときのアイヴィーの発作が後に悲劇を招くとは今はまだ知らなかった。

第九話 恋の始まり

一日が経過すると、すっかりローズマリーの体の調子が良くなった。服を着替えて、靴を履く。そして、窓を開けて清澄な空気を部屋の中に入れる。

今日の朝は特に気持ちが良い気がした。ここから見える中庭の緑が美しい。

ローズマリーは緑が大好きなのだ。実家が農家だからかもしれない。いつも緑を見て過ごしてきたのだ。

軽やかなノックの音がする。ローズマリーはアイヴィーがまた様子を見に来てくれたのかと、心が躍った。髪を手で撫で付けて、いそいそとドアを開ける。

「アイヴィーさん」

ローズマリーが満面の笑顔で迎えると、そこには、アイヴィーではなくラピが立っていた。間違えられたラピはふて腐れた顔をしている。

「よう、アイヴィーじゃなくて悪かったな」

良い匂いがして、ローズマリーはラピの手元を見た。トレイに乗せた食事を器用に二つ持ってきていた。この匂いは、ポタージュだ。それから野菜のサラダとトーストされたパン、そしてピクルスがトレイに乗っかっている。

「悪くないわよ。ラピ、食事を持ってきてくれたの？」

「まだ、気分が悪いのかと思って、食堂から食事を持って来たんだけど、必要ないみたいだよな」

ラピも良いところがあるではないか。ローズマリーは首を振って、更にドアを開いた。

「そんなことないよ。せつかく持ってきてくれたんだから、一緒に食べよう？ 入って」

「ローズマリーさん、あんたさあ……嫁入り前の娘がどうか言っ

てたくせに、そんなに簡単に男を部屋の中に入れても良いわけ？」

ラピは仏頂面でばやいた。だが、ローズマリーは笑顔のままだ。昨日から良いことばかりで構わないのかと思う。

「だって、腕輪が守ってくれるんでしょ？」

「まあいいか……その様子だと、何もなかったみたいだよな」

「何が？」

ラピは部屋の中に入って、テーブルの上にトレイを乗せた。二人は椅子を引いて腰をかける。いただきます、と二人は食べ始めた。やはりポタージュは美味しかった。

実家の母が作るポタージュも大変美味しかったが、こちらの味も美味しく感じる。ラピが持ってきてくれたからだろうか。

「結局、アイヴィーはいつまで居たの？」

「夜中までよ。ずっと話していたんだけど、調子が良くなったから帰ってもらったの」

ラピは納得したのかしてないのか、「ふーん……」と呟いて、黙り込んだ。ピクルスを噛む音が小気味よくラピの口の中で響く。

「アイヴィーさんって、カッコイイよね！ 優しいし！」

ローズマリーの心の中は春が来たような温かい感情があふれ出している。アイヴィーのことがすっかり好きになってしまったのだ。ローズマリーが陶醉していると、ラピが半眼でローズマリーをにらむ。

「おーおー、そうですか」

「あれ？」

ローズマリーは感付いてしまった。面白くなって、ラピの顔を覗き込む。ラピがウザそうに顔をしかめた。

「なんだよ？」

「あれ？ あれ？」

「だからなんだよ！」

「もしかして、ラピさん、ヤキモチですか？」

にこにこしていると、ラピが疲れたようにため息を付いた。どう

やら、ローズマリーの勘違いだったようだ。

「なに言ってたんだよ。あんたってシアワセな脳みそなのな。そのうち、シアワセすぎてボケるぞ」

「ラピはもうボケてるよね！ あはは、手遅れ手遅れ！」

「あははー、そっくりそのままあんたに台詞を返すぜ。あんた、昨日はよほど快眠だったんだな！」

「なんでよ？」

「口によだれが垂れた跡がくつきり！」

「うそお！ 顔を洗ったのに!？」

「ばーか、嘘に決まってるだろ、まぬけ女」

「何よ、うそつき男！」

最後にはいつものように言い合いになってしまふ。でも、今日は守護連盟に来てから最良の日だと感じる。ラピもそんなに嫌な奴ではないようだ。ローズマリーは今日という日に感謝した。

食事を終えて、ラピと一緒に報告書を神々の館に出しに行った。

時間は朝の七時半ごろだ。その頃になると、人でごった返していたみんな手に金や銀のブレスレットをつけていた。ラピとローズマリーの付けているブレスレットを見て、口々に噂している。

「ほら、あの人、昨日来たらしいわよ」

「仕事が減って嬉しいけど、なんかム力つくわ」

ローズマリーに向けられているのは嫉妬のまなざし。そのひそひそ話を聞いたローズマリーは腹を立てた。

「何で、陰口を叩くのかしら。こっちがム力つくわ」

「だって、みんなはレベル・ブレスレットを使っているからさ。修行を積んでやっと魔法が使えるようになったのに、あんたはマルデイクション・ブレスレットがあったお陰で修行なく魔法が使えるんだからな。そりゃム力つくだろ」

「確かに、そうね……」

しかし、ローズマリーは好きでこの仕事をやっているわけではないのに、理不尽のような気がした。それにしても、アイヴィーやフロウが『みんなは仕事が減るので喜んでくれるだろう』と言っていたのに、大分異なった状況にあることは間違いない。

「あれー！？ ウィザー・ローズマリーさん！？ やあ、やあ！」
突然、くすくすという笑い声に包まれる。

「ウィザー・ローズマリー？」

「それってあの子の名前なの？ マジで？」

ローズマリーはカツと顔に血が上るのを感じた。こんな所でフルネームを呼ばれて、恥さらしもいいところだ。

「何よ！ 私の名前に文句あるの！？」

ローズマリーが叫ぶと、くすくす笑いが小さくなる。だが、それも堪えているからというのがムカつくところだ。

「あれ？ 僕、悪いこと言っちゃった？」

それは、やはり、エメラルドだった。エメラルドはわざとらしく肩をすくめた。

第十話 今明かされる理由

「ワザとでしょ！」

ローズマリーはエメラルドに詰め寄った。だが、間に入ってきたラピに止められる。

「まー、まー、落ち着いて、ウィザー・ローズマリーさん」

「ラピ、あんたも名前と苗字を逆さに呼ばないで！」

「ところで、昨日、あんたぶつ倒れたんだって？」

エメラルドは呆れたように聞いた。まだ何か文句があるのだろうか。

「その通りよ、悪かったわね！ でも、十件やってのけたわよ！」

「それはそれは！」

エメラルドは驚いたような嬉しそうな顔をわざとらしく浮かべた。ざわりと周りがざわめく。

「十件？ すごいわ」

「新人にしては出来るじゃん」

みんなはなかなかやるようだと思えているようだ。ローズマリーはすっかり嬉しくなってしまった。

「だから、ラピを認めなさいよ！」

「どうせ、あんたが全部処理したんだろ？」

エメラルドは全部知っているような顔をする。葉桜は、言葉に詰まった。全部したのはそのとおりなのだが――。

「そ、それは」

「おー、全部こいつがやってくれたよ」

ラピが全てばらしてしまった。

「ラピ！」

ラピがローズマリーの頭をワシワシとなでる。ローズマリーはラピのためにやったが、ラピは望んでないのかもしれない。ローズマリーは落胆してしまった。

「やっぱりな！ あんたは認めてやるよ。ローズマリー、あんたは、新人なのに良くやったよ」

「それはどうも！」

思わぬところで褒められて、ローズマリーは復活した。エメラルドもただ嫌な奴とは少し違うようだ。仕事が出来れば相手を認めるらしい。

「なあ、ローズマリー、僕と組まないか？ 仕事を半分ずつやれば、あんたはぶっ倒れることもないぜ？」

ローズマリーはにやりと笑った。

「お断りするわよ！ 私はラピと組むわ！ ラピはこう見えたって、良い所があるんだからね！」

「その必要はありません」

冷えた声が割って入った。すぐに、魔法使い達が避けて、彼の通る道が出来る。魔法使い達も彼には敬意を表しているらしい。声の主は、足早にローズマリーの方に歩いてくる。

それは、アイヴィーだった。

「アイヴィーさん？」

アイヴィーはいつもの優しい顔を強張らせて、ラピとエメラルドの前で立ち止まった。ラピの顔が心なしか険しくなった。昨日の喧嘩が尾を引いているのだろうか。そんなことは、まったく気にもせず、ラピとエメラルドに向かい口を開いた。

「ローズマリーさんは暫く、私の仕事を手伝ってもらいます」

「えっ！？ アイヴィーさんのお仕事を？」

ローズマリーは、驚いてアイヴィーへと視線を上げた。アイヴィーは、ラピを見るのとはまったく違う柔らかな視線で、ローズマリーの顔を目に映す。

「ええ。フロウさまのお仕事のお手伝いをしていただきたいのです。私と同じ秘書ですね」

「秘書……」

ローズマリーはその秘書という響きに酔った。

「構いませんか？」

「ええ、勿論、大歓迎です！」

二つ返事でローズマリーは頷いた。ラピを見ると何故か面白くなさそうな顔をしている。

「と思ったけど、やっぱり、ラピと組もうと思います」

「いや、ローズマリーさんはアイヴィーと仕事をしたほうがいい。俺は一人の方が気楽だし」

「そう？」

ラピが良いのなら自分としても構わない。気を回したものの、ラピは自分と一緒に働きたいのかと思っていたことは、違っていたのでラピの考えていることがよく分からなくなった。ラピはいつものようにローズマリーに向かっていたずらっぽく笑う。

「また、ぶっ倒れられたらこっちも厄介だしな」

「何よ、あんたが寂しがると思って言っただけなのに」

「はあ？ あんたが寂しいんじゃないの？ モテる男は辛い」

ラピは自己陶醉している。ローズマリーは呆れてしまった。どこ誰がラピを好きだというのだろう。

「寝言は寝ていってよね！ 行きましよう、アイヴィーさん！」

「ええ、そうですね」

ローズマリーはアイヴィーの手を引いた。だが、アイヴィーは顔をしかめてローズマリーの手を解いた。

驚いてローズマリーがアイヴィーを見たが、

「えっ？」

「何でもありません。行きましよう」

アイヴィーはまた柔らかな表情に戻っていた。

ローズマリーは安堵した。そして、アイヴィーと話しながら部屋に入る。

だが、ラピがローズマリーの方をじっと見つめていたことにローズマリーは気付かなかった。

魔法使いの行列の先へ続く部屋に入る。相変わらず、部屋は書

類で散乱しているようだ。フロウが魔法使い達に仕事の書類を渡している。

「フロウさま、ローズマリーさんを連れて参りました」

「おお、そうか」

フロウは仕事を忙しそうにしている。朝からてんてこ舞いで、これが夜まで続くのだろうか。いかにも大変そうだ。

「私は何をすればよいのですか？」

「この手紙を地域ごとにまとめて日付の順番に並べてください。最近、ダークマインドが大量発生して忙しさが増したせいか、苦情が殺到していますね」

「苦情ですか……」

「手紙がぐちゃぐちゃになっていて順番通りになっていないせいか、遅くなった案件は解決するのに時間がかかってしまつて、苦情が来るのです。これではいけないんですが……」

「どうしてですか？ アイヴィーさんみたいな優秀な秘書がいらつしやるのに」

「それはどうもありがとうございます。それはですね」

アイヴィーが何かを言おうとして、ちらりと言いにくそうにフロウを窺った。

「はっ、はっ、ハッ……」

いきなり、フロウが鼻をむずむずさせ始めた。

「いけない！ ローズマリーさん！ すぐにその書類を抑えて！」

顔色を変えたアイヴィーが、慌てて、書類を押さえる。

ローズマリーは呆気に取られていたが、ハッと我に返る。

「え…… あ、はい！」

慌てて押さえると、フロウが「ハックショイ！」と盛大にくしやみをした。ごうつと風が巻き起こり、アイヴィーとローズマリーが押さえていない部屋の書類が吹雪のように舞った。部屋の窓はしっかりと閉められているが、巻き起こった風でがたと音を立てる。

「すまん」

フロウは鼻をすすっている。

風は一瞬だったが、部屋の中の書類がばらばらになってしまった。部屋が片付いていない理由が今分かった。アイヴィーが盛大にため息を付いた。

「まあ、こういう理由です」

ローズマリーは驚いてしまつやら、呆れてしまつやら。ローズマリーの村にラピが来るのが遅かった理由が今分かった。

「あはは……」

ローズマリーは一瞬で疲れてしまった。

第十一話 不安な予兆

いつまでも呆れていてもしょうがない。ローズマリーはアイヴィーに指導されるまま、手紙を並べ始めた。読んでみると手紙は世界の各地から来ているようであつた。この手紙を地域ごとに纏める。そして、日付の順番に並べる。その単調な作業の繰り返しだ。ダイクマインドを倒すと言う大それた仕事よりは、この単調な仕事の方が自分に合っている気がした。

そうこうしている内に、大行列が段々と減って行き、ラピとエメラルドの番になった。

「エメラルドさん、貴方は五件お願いしますね」

アイヴィーが、愛想良くエメラルドに書類を渡す。エメラルドはぺらぺらと書類をめくって確認する。

「はい、お安い御用です！ お任せください！」

エメラルドの自信に満ちた瞳が楽勝だと物語っている。エメラルドはフロウとアイヴィーに一礼して、退室しようとした。

「ラピは、一件お願いしますね」

アイヴィーが書類を一枚渡す。ラピはそれを見て頷いた。

「ああ、分かったよ」

「ハッ、一件！ せいぜい頑張ってくれたまえ！」

エメラルドはまだいたらしい。大笑いしてそこから去つた。傍で聞いていたローズマリーは、思い切り机を叩いた。ギョツとして、ラピはローズマリーを振り返つた。エメラルドもフロウも魔法使い達すらローズマリーに驚いている。ローズマリーはそんなことをお構いなしにワナワナ震えて声を荒げた。

「アーツ、腹が立つ！ エメラルドなんてぎつたんぎたんにしてやる！ ラピ、あんたも頑張りなさいよね！ フンツ！」

ローズマリーは、すくと椅子に座り、また作業に戻つた。

ラピはそんなローズマリーにくすりと笑って「おー、行つて来る

わ」と、言い残すと部屋から出て行った。

ローズマリーは暫く作業に没頭していたが、視線を感じて、顔を上げた。

すると、アイヴィーと目が合った。

「……アイヴィーさん、どうされたんですか？」

「ローズマリーさんって、怒ると怖いですね」

アイヴィーは苦笑いを浮かべている。マイナスのイメージを与えてしまったのだろうか。

「そ、そうですか？ でも、これが本当の私だから、飾りたくなんてないんです」

たとえ、アイヴィーに嫌われたとしてもしょうがない。飾り立てた自分でいたらきつと疲れてしまうに違いない。だが、アイヴィーはにっこりと笑みを浮かべた。

「ローズマリーさんらしくて良いと思いますよ」

「ありがとうございます」

ローズマリーは嬉しくなってアイヴィーと笑いあった。

「ハックショイ！」

今度は、フロウが予告なしにくしゃみをかました。風が巻き起こり、書類はまた風に舞った。

「もう、フロウさま！ また一からやり直しじゃないですか！」

「すまん！ 花粉症なのかもしれん！」

「花粉症って……」

今は夏なのに季節外れのような気がするが。医者に診てもらえば良いのではないだろうか。だが、神さまを診る医者など聞いた事がない。ローズマリーはふうつとため息を付いた。

「重りを置いても、飛ばされてしまうし……」

アイヴィーもお手上げのようだ。このままでは全然仕事にならない。

「そうだ！ アイヴィーさん、私と付き合ってください！」

「えっ？」

アイヴィーは戸惑ったようにローズマリーを見ている。周りの魔法使いの行列も色めき立った。

「えっ？　じゃないですよ！　私と一緒に買い物に付いて行ってくださいって言うてるんです！　このままじゃ、仕事が終わりません！」

「ああ、そういうことですか。私はてつきり、恋人になってくれと言われたのかと思いましたよ」

アイヴィーは笑顔になった。ローズマリーは面食らって真っ赤になっちゃった。

「こっ！？　そんなことは、えっと、あの……」

アイヴィーのことは好きだが、こんな所で大告白をするつもりはない。否定するのも違うような気がして、ローズマリーは困っちゃった。アイヴィーはにっこりと笑う。

「良いでしょう。ローズマリーさんに考えがあるのでしょう？　お供いたしますよ」

「は、はい！」

ローズマリーとアイヴィーはにこにこ微笑みあった。フロウはふうとため息を付く。

「花粉症など、夏なのにおかしいと思ったのだが、ここだけ春だからしかたないな」

フロウの冷やかしは思ったより二人に効いた。アイヴィーとローズマリーは真っ赤になっちゃった。

「フロウさま！　何をくだらないこと言っちゃるんですか！」

「そうです！　人のせいにしないで、花粉症を早く治してください！」

「す、すまん！」

フロウは冷やかして失敗したと小さくなるのだった。

そのころ、国の果てでは、邪悪な雲がもくもくと大きく盛り上がっていた。その雲から糸を垂らすように虹色の液体が地面に落ちて水たまりを作る。

次の瞬間、水溜りは少年になって人の色に変化した。ちゃんとした服を纏い、手にはブレスレットを何十にも付けている。少年は空を仰ぎ、にやりと笑う。そして、また再び空の彼方に飛び立った。

第十二話 外出と嫉妬

一時間もすると、魔法使いの大行列への仕事の受け渡しを綺麗に終了してしまった。アイヴィーたちの仕事が一段落したということだ。竜神のフロウは、次の仕事があると言うので、出かけていってしまった。

フロウの秘書のアイヴィーは、最後に書類をまとめると、その上に重りを置いた。

「ローズマリーさん、では、出かけましょうか」

ローズマリーはアイヴィーの傍に駆け寄った。

「どういうお店に用があるのですか？」とアイヴィー。

「文具店に行きたいのですが」

「分かりました。文具店ですね」

「はい！ あの、馬車で行くのですか？ それとも徒歩で？」

アイヴィーが面白そうに「ふふっ」と笑う。

「何を言ってるんですか。腕輪があるでしょう？ テレポーターションで行きますよ」

「あっ、そっか！ そうでしたね」

「ローズマリーさん、手を貸してくださいね」

さりげなく、アイヴィーはローズマリーの手を取った。アイヴィーが顔を微かにしかめたような気がした。瞬間的に、体がパパッと伸び縮みして、次の瞬間にはレンガで出来た店の中にいた。大きな店で色とりどりの紙や便箋、ペンや鉛筆等が置いてある。

立派な文具店らしい。

「ふわー」

ローズマリーは煌びやかな空間に目を開けていられず、瞬きした。よく見ると、照明に使っているのは魔法灯だ。魔法の明かりで商品を綺麗に見せているらしい。

「おや？ アイヴィーさま、いらっしやいませ」

白髭を蓄えた店主がアイヴィーに気付いてこちらに歩いてきた。

ローズマリーにも気付いてにつこりと愛想良く微笑む。

「アイヴィーさまが恋人を連れていらっしやるだなんて珍しいですね」

「えっ!？」

ローズマリーは真っ赤になって思わず、アイヴィーの手を放してしまった。アイヴィーはにつこりと笑う。

「そんなことより、ローズマリーさん、何かご用がおりなんですよ?」

アイヴィーは否定もせずに「そんなこと」で済ませてしまった。

ローズマリーの胸はドキドキと脈を打つ。しかし、そんなことで今日ここに来たわけではない。ローズマリーは気を取り直した。

「あ、はい! ファイルって売ってますか?」

「ええ、ありますよ。穴を開けるタイプと、開けないで挟むタイプと二種類」

店主は棚からファイルを二種類出して見せた。ローズマリーはにつこりとアイヴィーに微笑んでみせた。

「なるほど! ファイルに綴じると言うわけですか! 今まで、案件が少なかつたので、重りだけで対処してきましたから……それも良いですね」

「書類を簡単にまとめるなら、綴込器もありますよ」

「綴込器って何ですか?」

「鉄の「コ」の字型の小さなくいを綴込器をつかって押すと、紙に刺さって内側に折れて止まるのです。外す時も簡単に取れますよ」

「これも良いですね。ご主人、ファイルを五十と綴込器二つ、替えの芯を五箱お願いできますか?」

と、アイヴィーは店主に注文する。アイヴィーが紙幣を取り出すと、店主の目が嬉しげに輝いた。

「お買い上げありがとうございます! すぐにお持ちします!」

「ローズマリーさん、私は寄るところがありますので、先に貴方と

荷物を神々の館に転送しますね」

「あ、はい……」

店主が急いで荷物をまとめて持ってくる。段ボール箱が二つと紙に入った袋が一つ、ローズマリーの横に積み上げられた。

「では、先に帰って作業しててください」

「はい」

フツとアイヴィーの姿が掻き消えたと思えば、景色も神々の館の中に戻っていた。ローズマリーはふうとため息を付いた。買い物は自分から言い出したことだが、本当にデートではなかった。心のどこかで期待していた自分がいる。ローズマリーはデートではなくてがっかりしていた。アイヴィーはあんなにまじめな人なのに。仕事の中にデートをするはずがないではないか。ローズマリーは雑念を消すように頭を振った。

「ああ、もう、仕事しよ！」

フロウのいない間に片付けてしまわないと、またせっかくした仕事が無駄になってしまう。ローズマリーはダンボールの箱からファイルを取り出して、書類をファイルに綴じ始めた。

一時間ほど、その仕事に没頭していると、部屋のドアが開いた。ローズマリーが顔を上げると、釣りあがった碧眼と目が合う。誰かと思えば、ラピである。

「あれ？ ラピ、仕事はもう終わったの？」

ラピはドアを閉めると、部屋の中に入ってくる。

「おー、まあ、なんとなく片付けてきたけど？」

ローズマリーに書類を見せた。ローズマリーは胡散臭そうに書類に目を通す。その書類には村長の名前と印鑑が記入されてある。案件を処理した証拠だ。ローズマリーは目を輝かせた。

「なんだ、ちゃんと出来るんじゃない！　すごいわ！」

書類を近くに見たり遠くに見たりしながら、何度も確認する。ラピはふいっと顔を背けた。

「別に褒められても嬉しくねーよ」

ローズマリーは立ち上がって、ラピに近づいた。

「ちよつとこつちにおいでよ！」

手をワキワキさせているローズマリーを、ラピは得体の知れないもののように怖がった。ラピは一步、後ろに下がる。だが、ローズマリーは一步、近づく。

「な、なんだよ？」

「なでなでしてあげる！ 偉い偉いって！」

「ばッ！ なんて、子供扱いなんだよ！ そんなことされても全然嬉しかねーし！」

「照れるな照れるな！」

鬼ごつこのようにラピを追い回していると、アイヴィーがテレポーテーションして帰ってきた。丁度、ラピがローズマリーを羽交い絞めしているところだった。ラピとローズマリーはアイヴィーを見たまま固まった。

「ただいま戻りました……けど、お邪魔でしたか？」

アイヴィーがにっこりと笑う。空気が凍りついたような気がして、ローズマリーは慌ててラピから離れた。

第十三話 ラピの予言

アイヴィーは笑顔でローズマリーを目に映している。だが、いつもの笑顔とは違うようだ。微笑んでいるように見えるが、目が全然笑っていない。ローズマリーは怒らせるようなことをしたのだろうか、びくついた。ラピが二人の様子を見て、気を回したらしい。ローズマリーを肘でつついた。

「お邪魔なんてこと、全然ないよな、ローズマリーさん？」

「そうですよ！　ただ、ラピが一人で案件を処理してきたので褒めてあげよう！」

ローズマリーとラピは「なー？」と声をそろえる。だが、アイヴィーの目は厳しいままだ。

「そうですか……。でも、ラピは今まで一人で今日のようにやってこれてましたけどね」

ローズマリーは蛇に睨まれた蛙のように固まってしまった。

「え、あ、そうですか……。ごめんなさい……」

シンと静まった室内にラピの笑い声が面白そうに響いた。

「まーまー、喧嘩なさんな！　俺はお邪魔しませんよ？　でも、フロウさまを待っているんで仕方ないよな！」

ラピはびらびらと報告書を振ってみせた。確かに、報告書はフロウに提出しなければならぬが、今でなくてもいいのではなからうか。そんな疑問が浮かんできたのだが、アイヴィーの足音が聞こえてきたせいで、それは打ち消されてしまった。

アイヴィーは嘆息して、ローズマリーに傍に立った。

「私のほうこそ、ごめんなさい。ちよつとした嫉妬です」

「えっ……」

顔を上げると、彼は元の温和なアイヴィーに戻っていた。アイヴィーの柔らかい笑みは一種の魔法のようだ。ローズマリーはアイヴィーの笑みに釘付けになってしまった。それにしても、嫉妬という

のはどういうことか。ローズマリーの脈拍が速くなる。

「宜しければ、これを指に付けてくれませんか」

アイヴィーは小さな小箱を取り出した。中にはシルバーリングが入っていた。それには、小さなダイヤが埋め込まれている。

「これ……！」

ローズマリーは指輪とアイヴィーを交互に見る。

「心配なさらないでください。呪いはかかってません。それに、安物ですし」

「良いんですか？ こんな素敵な物を頂いて」

ローズマリーは左手の中指に指輪をはめた。それを物足りなさそうにアイヴィーは見ている。

「悪いと仰るなら、私と付き合ってくださいませんか？」

ローズマリーはうろたえて、仰け反った。

「えっ？ ど、どこに？」

アイヴィーは表情を緩めた。

「ですから、私の恋人になって欲しいと申しているのです」

「え、あ……はい！ 喜んで！」

ローズマリーは真っ赤になって俯いてしまった。パチパチと拍手の音が聞こえ、アイヴィーとローズマリーは拍手の方に振り向いた。ラピが拍手をして、にこにこしている。

「良かったじゃないか、ウィザー・ローズマリーさん！ こんな気の強い女と付き合ってくれる物好きがいて！」

「物好きで悪かったですね！」

「悪かったわね！ 気が強くて！」

アイヴィーとローズマリーは同時に言っしまい、可笑しくて吹き出した。

「それより、ローズマリーさん、指輪を中指ではなく薬指に入れて欲しいのですが」と、アイヴィー。

「ああ、はい」

「手を貸してください」

アイヴィーはそつと、ローズマリーの指輪のはめた手を取る。アイヴィーはローズマリーの中指から指輪を抜き取った。そして、薬指に入れようとした。だが、ローズマリーとアイヴィーの触れている手と手が拒絶するように電撃がほとばしる。

ローズマリーとアイヴィーは反射的に手を引っ込めた。
「なっ!?!」

ローズマリーは驚いて、左手を右手で握り締めた。カランと指輪が空しく地面に落ちる。

「……ッ!」

アイヴィーは右手に、はまっているマルディクション・ブレスレットを痛そうに左手で掴んでいる。

「アイヴィーさん!?! どうなさったんですか!?!」

先ほどの幸せな空気は一変してしまった。ローズマリーは心配でアイヴィーに恐る恐る近寄った。アイヴィーは力なく笑う。

「……なんでもありません」

「また、マルディクション・ブレスレットが? でも、どうして?」
その時、ラピが「あっ」と声を上げた。

「もしかして、アイヴィーのマリオルの腕輪と——」

「ラピ! 余計なことを言わないでください! なんでもないのですから……」

「はいはい……」

ラピは肩をすくめて嘆息した。ローズマリーはじつとラピを見澄ましていたが、ラピは何も言おうとしない。ローズマリーはアイヴィーがああ言っている以上ここでは聞けないだろう。ラピが指輪を拾ってローズマリーに渡した。

「ほら、ローズマリーさん? アイヴィーのために指輪を入れてあげないと」

「そ、そうね!」

ローズマリーは左手の薬指に指輪を入れてアイヴィーに見せた。そして、ローズマリーは努めて明るく笑う。

「アイヴィーさん、これでどうですか？」

「ええ、とても嬉しいです。ありがとうございます……さて、仕事に戻りましょうか」

「あ、はい！」

アイヴィーは何事もなかったかのように仕事を始めてしまった。

ローズマリーはそんなアイヴィーを気にしているように盗み見ている。ラピだけはそんな二人を見て、一人で悟っていた。

この二人は、長く続かないだろうと。

第十四話 素晴らしい魔法使い

ここはとある町だ。上空にはダークマインドの黒い雲が固まっている。黒い雲は肥大しているようで体積が大きくなっている。風は吹いておらず、生ぬるい病んだ空気が辺りを満たしていた遠くから見るとその空気は黄色く不透明に滞っている。

そんな光景を目の当たりにしながら、屋根の上に跪く者がいた。ゆつくりと立ち上がり、緑の目を瞬く。

「この町みんなさん！ 守護連盟から参りました！ 僕が来たからにはもう大丈夫です！」

エメラルドは、茶色の髪を掻き上げて、ポーズを決める。街の人は寝込んでいるはずなのに、一体誰が見ているというのか。だが、エメラルドはそんなことお構いなしだ。すっかり自分の世界に入り込んでいる。

「グリーン・エメラルドが命じる！ 腕輪よ呼応せよ！」

町の景色が真っ白な光で染まり、白と黒に明滅する。ダークマインドの雲はその真っ白な光に浄化され、綺麗さっぱり消えてなくなった。エメラルドは、かすかな疲労に顔をしかめ「ふう」と、息を吐き出し、呼吸を落ち着けた。

「あれ……？」

かすかな違和感がエメラルドを襲う。おかしいと、エメラルドは思った。

今まで魔法を使えば、周りの景色が浄化され、緑が生き生きとし、爽やかな新鮮な風が吹き抜けるはずだった。だが、今はどうだろう。ダークマインドの雲は消滅したが、空気は淀んだままだ。

「変だな、もう一度魔法を使おうか」

ダークマインドは巨大だったのだから、そのせいかもしれない。エメラルドが両手を広げて言霊を口にしようとした時だった。

「お兄さん」

エメラルドは呼ばれて振り向く。少女がすぐ後ろにいた。気配を感じなかったので、エメラルドは肝を冷やした。少々、どきまぎしながら少女に笑いかけた。

「お嬢ちゃん、どうしたんだ？　こんなところに居ないで、家の中で待っていなよ」

エメラルドは少女に視線をあわせ少女に言い聞かそうとした。

「お兄さん、魔法使いなの？」

「ああ、そだよ。お嬢ちゃんの味方だよ」

少女の頭を撫でると、少女はすつと両手を広げて見せた。服の袖から手首が見える。少女の腕に三つの腕輪がはまっていることに気づいて、エメラルドは驚いた。

「お嬢ちゃんも魔法使いなのかい？」

魔法使いだとすれば、三つも腕輪をしているのだから、相当腕が立つのだろう。

「私？」

少女は首を振る。

『私は、お前たち魔法使いを倒すダークマインドの化身さ』

少女の声が段々と低くなり、最後には不気味なしわがれた声に変わった。エメラルドの肌が恐怖で粟立った。エメラルドは少女から離れ、魔法を使おうとした。だが、少女の方が早い。

『我、天駆ける邪の化身なり！　腕輪よ、我に従え！』

黒い衝撃波がエメラルドを跳ね飛ばした。エメラルドは屋根から落ちそうになりつつも、体勢を立て直したが、次に来た衝撃波のせいで隣の家の壁に打ち付けられ落ちていく。少女はとても素早い。攻撃すらまともに出来ない。そして、そのまま落ちていく彼を、影がすつと掬い取った。その影は身軽に、地面に降り立ち、エメラルドを見下ろす。

「大丈夫か、エメラルド？」

エメラルドは薄っすらと目を開けた。

「な、んでお前が……うつ……」

エメラルドはぐったりとして、そのまま意識を失った。

ローズマリーが用を足しに行き、戻ってきたときである。ドアを開けると、今まで居たはずのラピが居なくなっていた。

「あれ……？」

不思議に思っ、フロウの机を見ると、机上に先ほどの報告書が乗せられてあった。アイヴィーは、気にもせずに仕事を続けている。ラピもトイレだろうかと思い、ローズマリーは仕事に戻ることにした。暫くの間、ファイルの整理を続けていたが、ラピが一向に帰ってくる気配もない。ローズマリーは顔を上げてドアを見た。

「どうしたんですか？　ローズマリーさん」

ローズマリーは我に返ってアイヴィーのほうを振り向いた。

「あの、ラピは……？」

「気になりますか？」

アイヴィーの声は、ローズマリーを責めているような響きがある。ラピのことなど心配するなといったような、そんな調子だ。また、アイヴィーを嫉妬させてしまったのだろうか。ローズマリーは思い切り首を振った。

「そんなことはまったく全然ないですけど……トイレですよね！」

先ほどまで、報告書を提出するといったのに居なくなるのはおかしいと思ったのだ。となれば、用を足しに行ったとは思えない。だが、アイヴィーは静かに否定した。

「いいえ、違います」

「えっ……？」

「ラピは、エメラルドがダークマインドのせいでピンチになったので、助けに行ってもらいました」

アイヴィーの瞳に残酷な光が宿っているような気がした。アイヴィーはラピに嫉妬しているから、ラピが邪魔なのだろうか。そんな考えが、脳裏をよぎる。

「なんでですか！」

「後ろの壁を見てください。この壁画に描かれているさまざまな腕輪。この壁画は腕輪の持ち主が危機を迎えると、光るようになっていくのです」

そんなことを聞いているわけではない。

「違います！ どうしてラピを行かせたりしたんですか！」

ローズマリーが思わず立ち上がると、アイヴィーは穏やかに微笑んだ。

「今、丁度居た魔法使いはラピだけです。私には仕事がありますから」

アイヴィーは書類をファイルにとじていく。ローズマリーはアイヴィーの腕輪を見て思いつく。

「そうだ！ テレポーションを使えばみんな帰ってこれるはずですよね！」

「私たちの仕事はそんなに甘いものではありません」

冷たいアイヴィーの声。アイヴィーはこんなに冷酷だったのだろうか。ローズマリーの好きなアイヴィーではないような気がした。ローズマリーは我慢ならなくなり、バンと机を叩いた。アイヴィーが驚いて顔を上げる。

「なんでですか！？ ラピは普段から魔法が使えないで悩んでいるのに！」

「使えない？ そんなことはないはずです。ラピはローズマリーさんが思っている以上に素晴らしい魔法使いですよ」

第十五話　引き裂かれた愛

アイヴィーは穏やかな笑みを浮かべ、ローズマリーを見つめる。

アイヴィーのその表情を見て、ローズマリーは初めて彼に悪意がないことを知った。

「ラピを信じてください」

アイヴィーは再び作業に戻った。

「……」

ローズマリーも机に座り、作業を開始する。だが、どうしても、アイヴィーの言葉に返事をする事が出来ない。信じてくださいと言われても、エメラルドがダークマインドのせいでピンチになってしまったのに、それをラピが何とかできるとは思えないのだ。

信じないのはラピに失礼かもしれない。そう思いながら、窓の外に目をやる。窓の外は緑が輝いており、天気が良く平和そのものだが、ローズマリーの不安は募る。

もし、ラピに何かあったら……。ああ、とローズマリーは心の中でたまらず声を上げた。いつの間にこんなにラピに絆されてしまったのだろうか。最初はあんなに嫌いだったのに――。

暫く作業を続けると、夕方になってしまった。窓の外に目玉焼きの黄身のようなとろけそうな太陽が浮かんでいる。その真つ赤な太陽光が部屋の中を染め上げる。それは、ローズマリーをイラつかせる効果があった。イラつくのは、ラピのことがあるからだ。

「そろそろ、上がりましょうか」

笑顔で、アイヴィーを振り返る。仕事が済んだのだから、ラピの部屋を覗いてこよう。もしかしたら、帰っているかもしれない。ローズマリーは急いで、荷物をまとめた。

「そうですね！　じゃあ、私はこれで」

笑顔を浮かべてアイヴィーに一礼する。バッグを肩に下げて出て行こうとしたが、アイヴィーに前方をふさがれてしまった。ローズ

マリーはうろたえた。

「待って下さい。一緒に食事に行きませんか？」

「ごめんなさい！今日は」

ローズマリーはばつが悪くて俯いてしまった。

「早く帰ってラピの部屋を見に行くのですか？」

「えっ！？えっと……」

ローズマリーはぎくりとして、目を泳がせた。おそろおそろ、アイヴィーの顔を盗み見る。

アイヴィーは面白くなさそうな顔でローズマリーを見ている。ローズマリーは俯いてしまった。凶星もいいところで、反論すら出来ない。アイヴィーは諦めたように笑った。

「ローズマリーさんは嘘が下手ですね。私はラピに嫉妬すら覚えてしまう」

「す、すみません……でも、一番好きなのはアイヴィーさんですよ」
目を見ずに俯いて言うのと、アイヴィーが笑った気配がした。

「ありがとうございます」

「あの、どうして、アイヴィーさんは私のことを好きだって思われ
たんですか？」

「さあ、なんででしょうね？」

今日のアイヴィーは意地悪だ。理由を教えてくれてもかまわない
と思うのに。

「ついからです、ローズマリーさんを私のものと確かめても良
いですか？」

「えっ！？」

あまりのことに驚いて顔を上げた。アイヴィーが面白そうに笑っ
ている。ローズマリーは真っ赤になって硬直した。

「安心して下さい、抱きしめるだけです」

アイヴィーが手を伸ばしてローズマリーを絡め取った。そして、
優しく抱きしめた。温かいアイヴィーの体温が伝わってくる。心地
よく、心音が響く。

そのとき、アイヴィーが震えた。遠くで誰かが怒鳴っているような、耳鳴りが聞こえた。気のせいだと思ったが、それは段々と大きくなって不快に脳の中で響く。

一体これはなんなのだろう？

疑問が頭にもたげた時、答えは急に返ってきた。突然、アイヴィーが、ローズマリーを突き飛ばしたのだ。

「!? アイヴィーさん!？」

ローズマリーが思わず、尻餅をつく。顔を上げると、アイヴィーの緑の目がぎらぎらと光っていた。憎しみすら口元に浮かべ、ローズマリーを睨んでいる。これは、アイヴィーではない。直感的にそう思った。

『私に近づくな!』

ギャンと鼓膜を破るような音がアイヴィーではない誰かの言葉と一緒に劈いた。^{つぎ}ローズマリーは恐ろしくなって後ずさりした。

『私に触れるな! チュリチュカよ! さもないとお前を八つ裂きにしてやる!』

アイヴィーでない誰かはゴウツと吠えた。ローズマリーは恐怖して、開いたドアから這い出た。そして、震える足に鞭打って、そこから遁走した。アイヴィーが追ってくる気配はなかった。

ローズマリーは、破裂しそうな鼓動を抱え、魔法使いの寮まで走ってきた。ここまで来ると人の気配がする。楽しそうに喋る声が自分とすれ違った。ローズマリーは、笑いあう人々に安堵して、重い足を引きずり階段を上っていく。

アイヴィーは一体どうしてしまったのか。いや、あれはアイヴィーではない。ローズマリーのことをチュリチュカと呼んだ。腕輪の名で。

アイヴィーは一体何を隠しているというのか。ローズマリーは自分の部屋の前まで来ると、腰が抜けたように座り込んでしまった。

ローズマリーは泣きなくなった。ラピに相談しようにもラピは――

」。

人のざわめきの音が遠くに聞こえる。ローズマリーは初めて一人ぼっちになってしまったと実感した。実家に帰りたいと弱音が出る。その時、ローズマリーの前のドアが開いた気配がした。

「あれ？ ウィザー・ローズマリーさん、どうしたんだよ？」

聞いたことのある暢気な声が頭上から降ってきて、ローズマリーは打たれたように震えた。ゆっくりと顔を上げる。

「ラピ……？」

「よう、今帰ったぜ！」

ラピが元気に笑っている。ローズマリーの目から一粒の安堵の雫が零れ落ちた。

第十六話 消えた恋心

心のネジが緩んだような気がした。体がぐにやりとして腰が抜ける。涙腺が馬鹿になったようだ。目からボロボロと涙が零れる。

それを目の当たりにしたラピは、驚いたように目を瞬いている。しかし、それがすぐに面白がるような笑みに変わった。からかってやろうというような意地悪さが口の端にありありと浮かんでいる。

「おいおい、何で泣いてんの？」

ローズマリーは急いで涙をぬぐった。こんなときにラピと言いかいなどしたくない。

「あ、分かった！　へましてアイヴィーに怒られたんだろ？」

「……違うわよ」

ラピは人の気も知らないで楽しそうな笑みを浮かべている。ローズマリーはゆっくり立ち上がる。抜けた腰は元に戻ったようで、ちゃんと立つことができた。

「じゃあ、アイヴィーと喧嘩したとか？　アイヴィーって結構冷たいところがあるからな」

ローズマリーはムツと気色ばんだ。

「違うわよ、アイヴィーさんの悪口言わないでよ」

ラピは「んー？」と、視線を上にもたて、考え込んだ。

「それが違うとなると、あつ、もしかして、俺のことが心配でたまらなかったとか？」

「そうよ！　あんた、魔法も使わないのにどうなったのかと！」

ローズマリーはラピに詰め寄った。

「あー、悪かったよ。だから、襟首つかむな」

ローズマリーは無意識にラピの襟を掴んでいたようだ。ラピは引きつった顔をして、ローズマリーの指を襟から引き剥がす。ラピはケホツと軽くむせた。

「怪我してないわよね？」

ローズマリーはラピの手や足を軽く触ってラピの反応を見る。痛そうにすれば、怪我をしていると分かるのだが。そんなローズマリーをラピは面白そうに見ている。

「今、怪我しそうだけど？」

真剣なローズマリーに対し、ラピはどこまでもふざけている。ムカつくやら悲しいやらで、ローズマリーの涙腺が崩壊した。再び泣き始めたローズマリーにラピは困り果てたようで、両手を上げて降参のポーズをした。

「悪かった、悪かった！ そんなに心配されていたとはね。ちゃんと、エメラルドを助けて帰ってきたから大丈夫だよ。まさか、そんなに俺のことが好きだったとは」

今度はラピが都合の良い誤解をし始めた。ローズマリーはバシッと軽くラピを叩いた。ラピが「ん？」と、瞬きした。

「全然ラピのことなんか好きじゃないわよ！ この涙はね！ あんたのこともあるけど、アイヴィーさんが——」

ローズマリーは涙をぬぐいながら、今まであった出来事を話し始めた。アイヴィーの体を何者かが支配したような感じがしたこと。そして、ローズマリーをチュリチュカと呼び、ローズマリーにアイヴィーに近づくなと警告したこと。そこまで話すと、ラピが嘆息した。

「なるほどね。やっぱり、俺の思っていたとおりか」

それは、小さな声だったが、ローズマリーの耳にしっかり届いた。「思ってたとおりってやっぱり何か知っているのね！」

再びローズマリーがラピの襟首を掴もうとした。だが、今度はラピに両手を掴まれてしまった。そして、ラピがローズマリーの両手を下に降ろした。

「ここで話すと、またエメラルドに怒られそうだから、あんたの部屋の中で話そう」

そして、ローズマリーをくるりと回転させて、ローズマリーの部屋のドアへと向けた。ローズマリーは仕方なく、ドアを開けて、中

に入る。ラピはローズマリーが指示する前にテーブルの椅子に座った。ローズマリーは今朝沸かしておいた薬缶に入った冷めた白湯をグラスに注いでラピに出した。トンと置くと、白湯の水がグラスの中で踊る。

「ちゃんとした買い物に行っていないから、白湯しか出せないけど」

一応、ラピもお客さまなので、何か出さなくてはならないと思ったのだ。ラピは面白そうに笑って、「ども！」と頭を下げる。そして、その白湯を二口ほど飲む。ローズマリーも白湯をグラスに注いでテーブルの上に置くと、椅子に腰掛けた。

「ここら辺に日用品を売っているお店ってあるの？」

「あるよ、今度連れて行ってやるよ」

「ありがと！ それはともかく、アイヴィーさんの」

本題に入らなければ。ローズマリーが催促すると、ラピも真剣な顔になる。

「アイヴィーが豹変したっていうのは、腕輪にアイヴィーが支配されてしまったからだろうな」

「支配！？ アイヴィーさんは!？」

「安心しろ、数分したら元に戻る」

ラピは白湯を一口飲んだ。

「……それなら良いんだけど」

ローズマリーも安堵して白湯を口にする。

「多分、マルデイクション・ブレスレットの腕輪と腕輪の相性が原因だよ」

「人と腕輪の相性だけじゃないの？」

「そうなんだよな！ 腕輪にも昔の記憶や意志があるのが原因らしいんだけど」

「まさか、私とアイヴィーさんの腕輪の相性って……」

「ああ、そのまさか。アイヴィーのマリオルの腕輪とローズマリーさんのチュリチュカの腕輪って相性が最悪らしいな。アイヴィーは誤魔化して付き合おうと思っているらしいけど、腕輪と腕輪の相性

が悪いと十中八九上手く行かない」

「そうなのね……」

あっさりしているローズマリーにラピが拍子抜けしたように笑った。

「あれ？ それだけ？ 今後のこととか心配じゃないの？」

ローズマリーは苦笑いした。チュリチュカの腕輪を一瞥する。

「なんか、マリオルの腕輪に支配されたアイヴィーさんを見たら怖くなって、恋した気持ちがなくなっちゃったんだ」

ローズマリーはアイヴィーのマリオルの腕輪に恐怖していた。ローズマリーは怖がりだ。アイヴィーは好きだが、毎回あんなことがあつたら、耐えられない。それに、アイヴィーと手をつなぐことも触れることも出来ない。腕輪にも祝福されてないし、あんなに怖い思いをするくらいなら――。

明日、アイヴィーと話をして、別れよう。ローズマリーはそう心に決めた。

第十七話 失恋の序曲

その日の夜、ラピと一緒に食堂から帰ってくると、ローズマリーの部屋の前に人影があることに気付いた。それはこちらに気付いて振り返る。

「アイヴィーさん？」

ローズマリーは体を強張らせて立ち止まった。ラピもそれに気付いて歩みを止める。

廊下の魔法灯の光にアイヴィーが照らされている。だが、アイヴィーの顔には影が落ちていた。

光の加減かと思ったが、アイヴィーはどことなく落ち込んでいる。ラピと一緒にあったローズマリーを目の当たりにして、アイヴィーは顔をしかめる。

ローズマリーは思わず、後ずさりしてしまう。それを見たアイヴィーは不安げに瞳を揺らめかせた。

「ローズマリーさん、もしかして……」

「ああ、ローズマリーさんはもう腕輪のことを知っているぜ」

「ラピ！ 貴方が話したのですか！？」

アイヴィーは怒ってラピに詰め寄った。ローズマリーは慌てて二人の間に割り込む。

「私がラピにお願いしたんです！ アイヴィーさんが腕輪のせいで豹変したから」

「記憶が抜け落ちていると思ったら、やはり腕輪が……」

アイヴィーは腕輪を憎そうに握り締める。ローズマリーはバッグの中を探るとずっと小箱を差し出した。

「アイヴィーさん、これ、お返しします」

この中には指輪が入っている。アイヴィーから貰ったものだ。

「ローズマリーさん！？」

アイヴィーは驚いて、指輪の小箱からローズマリーへと視線を上

げた。

「やっぱり、私たち、付き合わない方がいいみたいです。腕輪の相性も悪いみたいですし」

「ローズマリーさんは私が思っているより、私のことを好きではなかったということですか」

苦々しくアイヴィーは呟く。ローズマリーは辛くなってしまった。「そんなこと……でも、傷は浅い方がいいと思うのです。それに、手を触れることも出来ないなんて、辛いだけじゃないですか……」

ローズマリーが弱弱しく微笑むと、アイヴィーも自嘲したように笑った。そして、アイヴィーはやっと、指輪の小箱を手に取る。

「それも、そうですね……」

「はい……」

「でも、多分、私は貴方のことをずっと……いえ、やめましょう……では、さようなら……」

アイヴィーは無理しているように微笑んだ。

ローズマリーはアイヴィーのように微笑むことが出来ない。

「さようなら……」

アイヴィーは背中を向けて、廊下をゆっくりと歩いて去っていく。アイヴィーの背中がやけに寂しそうだ。急激に胸にこみ上げてくるものがあつた。アイヴィーが階段を下りていなくなる。

（本当に、さよならしてしまったんだ）

つうつと、涙が一筋垂れた。

「ローズマリーさん？」

「なんでもないよ、ラピ」

ローズマリーは涙をぬぐって、微笑んだ。だが、これは、まだ失恋の序章だった。

翌日、ローズマリーが身支度をしていると、部屋の外で言い合う声が聞こえた。この声は男の声だ。一方的に何かをまくし立ててい

るようだ。

「なんだろう？」

ローズマリーは不思議に思って、部屋から外に出た。そこでは、ラピとエメラルドが廊下で言い争っていた。

「どうしたの？」

外には、ラピとエメラルドがいた。ローズマリーが割り込んだことで、言い争いは止まった。ラピはうんざりしたようにローズマリ―を振り返る。

「エメラルドは俺が助けたのが気に入らないんだと」

「そう、そのとおりだ！　とにかく、僕はお前なんか絶対に認めないからな！　フンツ！」

エメラルドは歯がゆそうな面持ちで、階段を下りて行ってしまった。

「何よ、いい加減認めなさいよね〜！」

ローズマリーは嬉しくなってラピの背中を叩いた。ラピはローズマリ―をじと目でにらむ。

「なあ、あんたは不思議じゃないわけ？」

「えっ？　そりゃ、もう！　何があつたか教えて欲しいわよ！」

「そりゃ、偶然に偶然が重なってさ……ダークマインドがいきなり、綺麗なねーちゃんに変身したわけよ！　俺が、パンツくれて迫ったら、逃げて行って……って、なんだよ、その目は！」

「最ツツ低！」

ローズマリーは軽蔑の視線を投げて、食堂へと急ぐ。ラピはムツとしながらも、ローズマリ―を追って来た。

「なんだよ！　真実が知りたいっていうから教えてやってんだろ！」

「近寄るな、変態！」

「近寄るなと言われたら近寄る！」

「ぎゃー、来るな！　あんたなんか、臭いパンツ被って気絶しちゃえ！」

「おお、そりゃ良いな！」

今日も、朝から言い争いで幕を開けた。ローズマリーはすっかり、アイヴィーと別れたことを忘れて、ラピと言い争いを続けるのだった。

朝食をとった後、神々の館に入った。

「まだ、ちよつと早い時間だな」

ラピは壁にかかった時計をみている。ローズマリーは「そうね」と言いながら辺りを見回した。まだ、魔法使い達は仕事に来ていない。

ラピと一緒に廊下を歩いていくと、受け付けで物音がすることに気付いた。アイヴィーの姿が目映った。どんな挨拶をしたら良いのかと、ローズマリーは悩んだ。

すると、もう一人が姿を現す。それは、綺麗な女性だった。だれなのだろうと、ローズマリーは疑問に思う。その女性は親しげにアイヴィーと話している。

「じゃあね、アイヴィー！」

「ああ、また今夜会いましょう」

そして、あるうことが、その女はアイヴィーとキスした。

「え……」

濃厚なキスを見てしまい、ローズマリーはショックで立ち止まった。

思考が停止したような気がした。ローズマリーは激しく胸を切られたような錯覚を覚えたのだ。

（見たくない！）

ここに居るのが絶えられなくなり、ローズマリーはその場から逃げ出した。

「ローズマリーさん！？」

ラピの声で、アイヴィーと女は気が付いたようだ。だが、アイヴィーがローズマリーを追ってくることはなかった。

第十八話 復讐

ローズマリーが出て行った後、女はドアの方を向いて、くすりと笑った。ラピは、この女はローズマリーとは違うタイプの、大人の綺麗な女性だと思った。

女は長い茶髪のウェーブヘアを肩にふんわりと掛けている。女はアイヴィーから離れた。そして、ラピの方に歩いてくる。カツカツと女のヒールの音が大きく響く。

女の青い瞳がラピとすれ違って部屋から出て行く。ドアが閉まる音がした。ひやりとしてラピは身震いした。

夏であると言うのに空気は冷えているような気がした。朝だから気温が低いのだろうか。いや、それだけではない気がする。

そんなことよりも、冷たい空間の中にラピとアイヴィーが取り残されてしまった方が問題だ。

ローズマリーを追っていけばよかったらどうかとラピは苦悩した。アイヴィーは、冷えた目でラピを射る。

「もしかして、ローズマリーさんがいました？」

面白そうにアイヴィーは笑んでいる。ラピは呆れてしまった。アイヴィーがローズマリーに、これを見せたのは、わざとだ。

「ああ、居たよ。それにしても、驚いたね。」

あんとローズマリーさん別れたばかりだろ？」

「ええ、そうですよ。別れたばかりですね」

あつさりとした口調だ。別れて気持ちを切り替えたとしても早すぎやしないだろうか。それがラピには不思議だった。アイヴィーはいつものように書類を片付けている。ファイルの端を机に軽く打ちつけて背を整えて、棚に戻した。ラピはローズマリーが出て行った後を振り返った。

「ローズマリーさん、傷ついたんじゃないかな」

「どうしてです？」

冷たいアイヴィーの声。ラピは振り返った。

「だって、ローズマリーさんとアイヴィーって、触れることも出来ないんだろ？ それなのに、あんたときたら、他の女とキスしていた」

「それは、ローズマリーさんが悪いんですよ」

「はあ？」

「何だかんだ言いながら、ローズマリーさんはラピとばかり楽しげに話している。それに、私を振った」

「そりゃ、俺と彼女は腐れ縁で！ 別に、俺とローズマリーさんとは何もないよ……」

「言い訳は宜しい。これは、私の復讐です。ローズマリーさんがまだ、私のことを思っているなら好都合です。」

彼女の心に消えない傷をつけて、私のことを忘れられないようにしてあげます」

ラピは背筋が寒くなるのを感じた。この部屋の空気が冷えているのはアイヴィーの嫉妬のせいだ。

男の嫉妬は女の嫉妬より怖いと言っが――。

ラピはローズマリーのことが心配になった。

第十九話 隠し事と伝書鳩

神々の館から逃げるように去った後、ローズマリーは中庭のベンチに座って、泣いていた。

「これもそれも、私の名前がローズマリー・ウィザーだからよ！」

また根拠もないのに名前のせいにして、嗚咽を漏らす。アイヴィーと初めて会ったときのことをふと思い出した。

『ローズマリーという名前は、神秘的で素敵な名前ですね』

アイヴィーだけは自分の名前を褒めてくれたのに。自分で罵ったローズマリー・ウィザーという名前が可哀想に思えた。ローズマリーは自分の名前を罵ることをやめた。そして、涙をぬぐった。

昨日、アイヴィーと別れた時は、少ししか悲しくなかった。それは、まだ、アイヴィーがローズマリーのことを好きだと知っていたからだ。

自分は愛されているのだと、心のどこかでおごり高ぶっていたのだろう。昨日の今日で、アイヴィーが誰とも分らない女といちゃついていると分かり、ローズマリーは酷く傷ついていた。やはり、自分はアイヴィーのことが好きだったのだ。だが、自分には傷つく資格もない。

ローズマリーからアイヴィーを振ったのだから。ローズマリーは涙を服の袖で拭った。もう一度アイヴィーと話をして、よりを戻そうか。だが、あの女性がアイヴィーの恋人だとしたら、もう、ローズマリーはアイヴィーの隣にいることはできない。

（私の馬鹿……自分勝手すぎるわ……）

ため息を付く。そのとき、影がちらちらしていることに気付いた。ローズマリーが顔を上げると、ローズマリーの座っているベンチの前を、エメラルドがローズマリーを見ながら、右往左往していた。エメラルドの一つにくぐられた茶色の髪が歩きたびに、ぴよこぴよこ揺れている。ローズマリーの目とエメラルドの目が合う。

エメラルドは慌てた様子で、目をそらした。そして、平静を装ってローズマリーの方に近寄ってきた。

「やあ、ウィザーローズマリー！ 偶然だね！」

偶然を装っているが、明らかに口元が引きつっている。もしかして、ローズマリーが泣いていたので、声をかけられなかったのだろうか。ローズマリーは面白くなって思わず笑った。

「どうしたの？ さっきから、私の前をうろつくと」

「あのねえ！ こっちは話があるっていうのに！ 馬鹿みたいに泣いてんじゃない！」

「馬鹿みたいですって！？」

しまったと、エメラルドは口を押さえた。笑顔を貼り付けて、ベソチに腰掛けているローズマリーの横に座った。

「そんなことは良いんだ！ 今は争っている場合じゃない！」

「そっちが喧嘩を売ってきたんでしょ！？」

「良いから、話を聞いて欲しいんだ！」

「話？」

エメラルドは言い難そうに口をもたつかせた。

「あー、ほら、僕、あいつに助けられただろ？」

「ああ、ラピにね！ エメラルドを助けたのは偶然らしいけど」

エメラルドが怪訝そうに眉を跳ね上げた。

「偶然だって？」

ローズマリーは面白そうに笑って頷いた。

「ラピがね、ダークマインドが綺麗な女の人になったんだって。それで、パンツをくれて迫ったら、逃げて行っちゃった！」

だが、それを聞いても、エメラルドはまったく顔色を変えなかった。

「馬鹿だな、ウィザーローズマリー。そんなのラピの嘘に決まっているじゃないか！」

「嘘……？」

確かに、ラピは嘘つきだが。

「確かに僕を襲ったダークマインドは少女の姿をしていた。だけど、そんなことで逃げるようなダークマインドじゃないはずだ！油断していたとはいえダークマインドは本当に強かったんだ！」

「ふ、ふーん……？」

「ラピは僕を助けた。それも、あのダークマインドを倒してだ！」

「ラピは何か隠している！」

「まあ、確かに、何か隠しているっばいけど」

「だろ！？」

ローズマリーは、気圧されて「う、うん」と返事をした。エメラルドは、ローズマリーの手を握り締めた。傍から見れば告白されていると勘違いするのではなからうか。だが、当人には、まったく色気のかけらもない。

「だから、ローズマリーに探ってきて欲しいんだ！」

エメラルドはパンと目の前で手を合わせ、頭を下げた。プライドの高いエメラルドがだ。だが、それは、ラピのプライバシーでローズマリーが探つてよいことではないような気がする。ローズマリーは困り果ててしまった。

「出来ることならするけど……」

あまり役には立てないかもしれない。だが、エメラルドのキラキラした目を見てしまったせいで、その言葉が、喉に引っかかって出なくなつた。

「本当だな！？頼んだからな！」

エメラルドはローズマリーの手を握り締めたまま、ローズマリーに迫る。ローズマリーは困り果てて、とうとう、首を縦に振つた。

「う、うん」

「そうか、ありがとう！じゃあな！」

エメラルドは嬉々としてそこから去つた。嵐が去つた後のようだと、ローズマリーは思った。ローズマリーは悲しみが少し紛れていることに気付いて、少し、エメラルドに感謝した。

「よーし！」

ローズマリーは気合を入れるように頬をたたいて立ち上がった。いつまでも、くよくよしているわけにはいかない。今日もいつものようにアイヴィーと並んでフロウさまの秘書をしなければ。アイヴィーの横で、普通に出来るだろうか。

そもそも、ローズマリーにはそんな図太い神経など持ち合わせては居ないのだが。

「少しでも、普通に見えるように頑張ろう！」

ローズマリーが神々の館に戻ると、フロウも出勤していた。アイヴィーは、もう、仕事に入っており、書類の整理をしている。ローズマリーは、よし！と気合を入れる。

「おはようございます！」

ローズマリーは元気を装って微笑んだ。フロウもアイヴィーもローズマリーを見つけて、笑みを浮かべた。

「ああ、おはよう！」と、フロウはにこにこしている。ローズマリーはフロウに気に入られているらしい。フロウという味方が居るので心強い。

「おはようございます、ローズマリーさん。これ、お願いしますね」アイヴィーは書類をどさりと置いた。何も変わらないいつも通りのアイヴィーだ。ローズマリーは大丈夫だと安心した。

「はい、任せてください！」

「今日は、下にある伝書鳩の小屋から手紙を降ろしてきてくださいね」

伝書鳩は、やはり、世界の各地から飛んでくるようだった。下に飼育小屋があることは、通りすがりに見かけるので大体知っていた。「分かりました」

ローズマリーがにつこり笑うと、アイヴィーも笑みを見せた。アイヴィーは何気なく左手でさりと、自分の髪を掻き上げた。そのとき、ローズマリーがアイヴィーに返したリングが、アイヴィーの左手の薬指に光っているのを見つけた。一気に気分が高揚する。ま

だ、アイヴィーは自分のことが好きなのかもしれないという期待で胸がふくらむ。

「伝書鳩から手紙を外してきますね！」

ローズマリーは嬉しくなって、部屋から退室する。軽い足取りだ。そろそろ、ちらほらと魔法使い達が列を作り始めている。ローズマリーはそれを横目で確認しながら、廊下を歩いていく。

「いいなあ、ジュリア！」

「いいでしょ？」

魔法使い達が楽しそうに話しているのがふと耳に止まり、視線をやる。そして、ローズマリーはぎくりとなった。ジュリアと呼ばれた女は今朝アイヴィーとキスしてた女だ。ローズマリーが思わず足を止めると、ローズマリーの視線にジュリアが気付いた。

「このリング、アイヴィーさんから貰ったんだあ」

薄く笑って、左手を翳す。彼女の手には見たことのあるリングが嵌っていた。それもそのはず。ローズマリーがアイヴィーに返したリングが、ジュリアの左手の薬指に輝いていたのだから。

ざっくりと胸を切られたような気がした。ローズマリーはそこから足早に去ろうとする。神々の館の出口のドアから外に出ようとしたときだった。がしつと、誰かに腕を掴まれた。

「ローズマリーさん！」

それは、ラピだった。

「あんたを探していたのに、どこに居たんだよ！」

「そこ、どいてよ！」

「どいてって何だよ！ 人が心配して——」

ローズマリーの両目から涙が零れた。驚いているラピを突き飛ばして、ローズマリーは外に逃げた。ローズマリーは伝書鳩の小屋まで走ってきた。

そこは一軒分くらいある大きな小屋だった。鳩の暢気そうな鳴き声が輪唱している。ローズマリーは鍵を開けて中に入った。たまらず、嗚咽が喉を突いて出てくる。涙が、ボロボロと零れる。

ローズマリーはその場にしゃがむと声を上げて泣いた。アイヴィーは酷い。昨日別れたばかりなのに、もう、新しい恋人を作っている。

確かに、振ったのはローズマリーだが、それにしたところで、自分にくれたはずの指輪を新しい恋人にあげるだろうか。アイヴィーが指輪をしていたことで、すっかり喜んでしまったが、ぬか喜びもいいところだ。アイヴィーはすっかり、ローズマリーのことを忘れてしまったのだろう。新しい恋人と青春を謳歌している。そして、ローズマリーがそのアイヴィーとジュリアの間に入る隙間はもうない。後悔ばかりが、涙となって頬を伝う。

かしやんと、小屋の網に誰かが触れる音がした。

顔を上げると、ラピが小屋の外で笑っていた。彼は息を切らして走ってきたところだった。

「おもしろいな」

ラピは無神経に笑う。

「何が面白いのよ!」

ローズマリーの大声に驚いた鳩が小屋の中で羽ばたいて暴れる。

ローズマリーは思わず身を屈めた。

「鳩の小屋の中にブタが一匹飼われてるのが面白くてさ」

ラピはケラケラと楽しそうに笑う。豚も飼われているのかと辺りを見回したが、豚の影などどこにもない。もしかしてと、ローズマリーが自分を指差すと、ラピが爆笑しながら頷いた。

「誰が豚よ!」

鳩が暴れるのが怖くて、小声で怒鳴る。ラピは鳩の餌の入った袋を提げて見せた。

「なあ、餌食べる? こ・ぶ・た・ちゃん?」

ローズマリーは腹を立てて、小屋から飛び出した。そして、ラピに殴りかかったのだった。

第二十話 謝罪と助け

「ラピ！ あんた、いい加減にしなさいよね！」

ローズマリーの繰り出す突きをラピは全てかわした。ラピは意外とすばしっこい。そういえば、ローズマリーの攻撃がラピに当たったためしがないことを思い出した。意地悪な顔をして笑っているのがムカつく。ローズマリーはゼーゼーと息を吐いた。

「それだけ、元気なら心配ないな」

「えっ？」

ラピが珍しく優しくそうな顔をして笑った。ローズマリーは攻撃していた手を止めて、ラピを見つめた。

「大泣きしてたから心配したけどさ」

「何よ、全然泣いてなんかいないわよ！」

思わず強がりが出てしまう。ラピがまた意地悪そうな顔になった。「うそこけ！ ビービー泣いてたじゃんか！」

ローズマリーは反論できなかった。泣き顔をまた見られるなんて不覚もいいところだ。ローズマリーはぷいと顔を背けた。

「それより、何か用？」

「ああ、少し、アイヴィーと話したんだけどさ」

真剣なラピの声。ローズマリーは視線をラピの方に戻した。

「アイヴィーさんと？」

「もう、アイヴィーのことは忘れた方が良い」

ラピは深刻そうな顔をしている。

「言われなくても、忘れたいわよ！ 私から振ったんだから！」

ローズマリーはイラついた。そんなことは分かっている。ただ、心と体がばらばらなのだ。

「忘れられないのか？」

ラピの問いにローズマリーは頷いた。ラピはため息を付く。そして、真剣な目でローズマリーを目に映す。

「でも、忘れた方がいいよ。アイヴィーの奴、あんたに復讐するって言ってたから」

「えっ……!？」

ローズマリーは驚いた。ラピは事も無げにさらりと言ったが、相当な衝撃がローズマリーを襲った。

ラピはなんと言ったのだ？

アイヴィーがローズマリーに復讐？

「アイヴィーと話していてゾツとした。あんたのこと、相当根に持っているぜ」

ラピは嘘つきだ。だが、ラピの目がいつも嘘をつくときのように笑ってない。ローズマリーは何も言わず立ち上がった。再び、小屋の中に入って、伝書鳩の足にくくられている手紙を採取する。

「お、おい……？」

ローズマリーは手紙を全て抜き取ると、手に抱える。そして、鳩小屋の鍵を閉めた。

「おい、ウィザー・ローズマリーさん？」

ローズマリーはラピの言葉を無視して、ずんずんと歩いていく。ラピはため息を付いて、ローズマリーの後ろにくっついてきた。ローズマリーは、ドアを開けて、神々の館に入る。そこでは、魔法使いが、仕事を貰おうと大行列を作っている。ローズマリーはその列の先まで辿っていくと、フロウたちの居る部屋に入った。

アイヴィーとフロウがにこやかに、魔法使い達に仕事を言い渡していた。

「ローズマリーさん！」

ラピが追ってきたが、ローズマリーは無視した。アイヴィーの前まで来て、手紙をどさりとアイヴィーの机に置いた。ローズマリーは息を切らしたまま、アイヴィーを見つめた。アイヴィーは優しくな面持ちで、にこりと笑う。

「ローズマリーさん、ご苦労さまです」

とても、復讐をしようとしている顔には見えない。アイヴィーの

顔は鳥が肩に止まりそうなほど優しく見える。

「アイヴィーさん、あの……あの……」

「今度は、手紙の選別をしてくれますか？」

アイヴィーはローズマリーに手紙を渡す。あの、指輪のはめた左手をちらつかせながら。ローズマリーは勢い良く頭を下げた。それと同時に、目から涙が零れる。

「アイヴィーさん、ごめんなさい！ 私、許してもらえないかもしれないけど、謝りたくて！」

「何を仰ってるんですか？」

顔を上げると、アイヴィーが変化したように思えた。アイヴィーの瞳に冷たいものが宿っている。表面上は優しくそんなアイヴィーと変わらない。だが、アイヴィーの緑の瞳が確実にローズマリーを突き刺していた。

「本当に、ごめんなさい」

ローズマリーが泣きながら頭を下げる。アイヴィーが勢い良く立ち上がった。

「謝ってほしくありません！」

アイヴィーの怒鳴り声を聞いてローズマリーは顔面蒼白になった。打たれたように体を強張らせる。アイヴィーらしからぬ口調にローズマリーだけではなく、みんなも驚きを隠せない。辺りが静まり返った。そして、辺りがまた、どよめき始めた。魔法使い達はアイヴィーとローズマリーを見て口々に噂している。

「アイヴィー、どうしたのだ？ 喧嘩でもしたのか？」

フロウさえも驚いている。

「いえ……」

アイヴィーは我に返り、椅子に座りなおした。ローズマリーは震えながら、泣いていた。嗚咽は出ず、ただ涙がとめどなく頬を伝う。ラピはじつと見ていたが、フロウの前まで歩いてきた。そして、フロウに進言した。

「フロウさま、お話が！」

「ラピ、どうしたのだ？」

「ローズマリーさんは現場の方が合っているらしいので、現場に戻してもらえませんか？」

ラピの声の調子は、世間話をするような明るい調子だ。現場とは、ダークマインドを倒しに行く仕事ということか。アイヴィーもローズマリーもラピの方に顔を向ける。

「どうしてだ？」

フロウは不思議そうにしている。ラピは場を和ますように笑った。
「ほら、俺のサポートをして欲しくて。俺、一人だと仕事が上手く行かなくて」

「ラピ！ 余計なことを言わないでくださいませんか！」

アイヴィーがまた立ち上がって怒鳴る。だが、ラピはアイヴィーを無視して続けた。

「フロウさま、それから、ローズマリーさんはちょっと、今日は体調が悪くて、お休みをいただきたいのですが」

アイヴィーの様子を見て、ラピが何をしようとしているのかフロウも悟ったらしい。フロウは神妙に頷いた。

「ああ、そうだな、ローズマリーは現場に戻すことにしよう。それから、今日はゆっくり休みなさい」

第二十一話 相性の問題

「ありがとうございます、フロウさま」

ラピは慇懃に頭を下げた。フロウは「うむ」と頷いて再び仕事に戻った。

「フロウさま！」

アイヴィーはそんなフロウに反論しようとする。だが、フロウは厳しい目でアイヴィーを射った。

「アイヴィー、そなたは早く仕事をするのです」

有無を言わさぬ口調だ。アイヴィーは言葉に詰まり、仕方なく仕事に戻る。だが、アイヴィーはローズマリーの方をしつこく見ている。

ローズマリーはアイヴィーからの視線がそらせずに固まった。アイヴィーの視線はローズマリーを苦しめた。

「ローズマリーさん、早く部屋に戻ろうぜ」

ラピの明るい声がローズマリーの背中を押す。それでも、ローズマリーはなかなか動かない。ローズマリーはアイヴィーの復讐に耐えていた。痺れを切らしたラピはローズマリーの手を取り、引っ張って歩き出した。

「ラピ……！」

ぐいぐいとラピは泣いているローズマリーを部屋の中から引きずり出した。ラピはずんずんと歩いていく。ラピの力はこれほどまでに強かっただろうか。ローズマリーの手はしっかりと握られている。魔法使いの大行列を横目に、ラピはどんどん歩いていく。扉を開けて神々の館を出た。中庭を突っ切って行こうとする。

「ラピ……！ 待って……！ ちょっと待ってよ！」

ローズマリーはラピの手を振り払った。泣きながら歩いてきたので空気が足りない。たまらず、立ち止まって息を切らして呼吸をした。

ラピが嘆息して振り返った。

「何？ お礼でも言ってくれるの？」

ローズマリーは涙目でラピを睨む。

「余計なことしないでよ！」

ラピは顔色を変えた。

「何だよ、その言い方！ 俺がせっかく気を回して」

「助けてやったって言いたいのか！？」

今度こそラピは腹を立てた。

「助けて欲しくなかったのかよ！？ あんた、あのまま秘書を続けていたら、アイヴィーのせいではろぼろになってたぞ！」

ラピに怒鳴られてローズマリーはさらに涙を零した。慌てて涙を拭くが次から次へと涙が零れる。ローズマリーは、たまらなくなつてその場にしゃがみこんで顔を腕で隠した。

「私なんて、ずたぼろになればいいのよ！」

顔を隠して叫んだので、声が腕の中でくぐもった。自分では強がっているが弱々しい声になってしまった。ラピが笑った気配がした。ラピもローズマリーに合わせるようにその場にしゃがみこむ。傍から見たら、何をやっているのだろうと思うこと請け合いだ。

「あんたって、自虐的な趣味があるのな。そういうの好きなの？」

ラピは呆れているようだ。ローズマリーは自分にもラピにも腹を立てた。

「私のことが許せないだけよ！ アイヴィーさんが私を憎むぐらい傷つけてしまったから！」

涙がまた零れる。涙をぬぐって、鼻をすすった。

「あのなあ、あんたが悪いんじゃないだろ？ 腕輪の相性が悪いんだよ。アイヴィーだって悪いぜ？ 腕輪の事を隠して付き合おうとしていたんだから」

ローズマリーは顔を上げる。

「でも……！ アイヴィーさんは私のことを好きで居てくれたのに……」

裏切ったのはローズマリーの方。あのマリオルの腕輪に怖がって怖気づいてしまったから。

「手を繋ぐこともできないのに、付き合ってるって言えるか？ 子供のオママゴトじゃないんだぜ？ あんたが悪いんじゃないんだから、アイヴィーの事は忘れろよ」

今日のラピは優しい。それに、先ほどもローズマリーのことを思っ
て助けてくれたことも本当は分かっている。ただ自分が許せなくて、その矛先をついラピに向けてしまったのだ。最低だ。だが、ラピはそんなローズマリーを慰めてくれた。ローズマリーは癒されていくのが分かった。

「うん」と子供のように頷いていた。

「……ラピ、ありがとう」

顔を上げて笑うと、ラピが満足そうに頷いた。

「よし！」

ラピがすつと立ち上がった。そして、「ほら」と、手を伸ばしてくる。ローズマリーは、ラピの手を掴んで、立ち上がった。

やっと可笑しなことに気が付いた。

じつとラピと繋いだ手を見つめる。

「ラピ、あのさ」

「何だよ？」

「ラピと私の腕輪の相性はいいのかな？」

「なんで？」

「……ラピは何ともなかったんでしょ？ ずっと手を繋いでたけど

……」

腕輪が何も反応しないのだ。チュリチュカの腕輪もベベルディロの腕輪も静まったままだ。ラピが慌てて、ローズマリーの手を放した。

「えっ？ えー、そりゃ我慢してたんだよ」

ラピが、ごまかし笑いをして、顔を背けた。

「うそ！ 平気な顔をしてたわ！」

いつものラピの嘘だ。だが、どうして隠す必要があるのだろう。それがどうしても分らない。ラピが大きなため息を付いた。手を腰にやって、ローズマリーに尋ねる。

「何々？ 何なわけ？ ウィザーローズマリーさん、そんなこと言いなから俺を口説いてんの？」

ローズマリーは思わず笑ってしまった。

「はあ？ 好きなわけではないでしょ。私は、まだアイヴィーさんのことと引きずってるのに」

「あー、残念だな！ 俺のことを好きだって言ったら、からかってやろうと思ったのに！」

ラピは肩をすくめて、首を振った。ローズマリーの機嫌が一気に悪くなった。

「この性悪！ 誰があんたなんか好きになるもんですか！」

せつかく、ラピのことを見直したのに、その気持ちが粉々になった。ラピの綺麗な顔が忌々しくて、ローズマリーは思い切り舌を出すのだった。

第二十二話 腕輪の秘密

それから、ローズマリーとラピは喧嘩をしながら、魔法使いの寮まで戻ってきた。ローズマリーはすっかり泣くことを忘れていた。普段仲の悪いラピと言ひ合いをして元気になったのだから不思議である。ドアの前まで歩いてくると、ラピは手を軽く上げた。

「じゃあな！　せつかく休んだんだから、あんたは、部屋の片付けでもしてな！　どうせ、散らかって汚いんじゃないの？」

ラピの台詞に呆れてローズマリーは肩をすくめた。

「はあ？　私の部屋のどこが汚いんですかあ？　そういうあんたの部屋って見たことないけど、きつと散らかってるんじゃないの？」

「はん、俺の部屋は綺麗だぜ！　じゃあな！」

ラピは鍵を取り出してドアの鍵穴に差し込んで回す。ローズマリーの顔に笑みがひらめいた。

「じゃあ見せなさいよ！」

ローズマリーはラピがドアを開けた隙を見て、部屋の中に先に滑り込んだ。

「なっ、なんだよ！　勝手に！」

「私の部屋だけ知ってるなんて不公平よ！」

ローズマリーは部屋に入って周りを見渡した。部屋は確かにこざっぱりと片付いている。ローズマリーはラピの部屋が散らかってなくてがっかりした。散らかってれば、ラピに口で勝てると思ったのだ。すると、何者かが部屋の中から歩いてきた。銀髪の緩いウェーブヘアを一つにくくった、青い瞳の女の人だ。ローズマリーより少し年上に思えた。

「こんにちは！」

女はにっこりと笑って、ローズマリーに挨拶した。ローズマリーは目を瞬く。状況が上手く飲み込めない。彼女はラピの客だろうか。それにしておかしい。部屋には鍵がかかっていたのだから。

「えーと？」

ローズマリーは右手で頭を掻いた。もしかして、とんでもないところにローズマリーは来てしまったのではないだろうか。彼女がラピの恋人だとしたら、誤解されてしまうかもしれない。その時、彼女の青い目が何かを見つけて、ぎらりと輝いた。

「貴方、もしかして！」

ローズマリーは女に手を掴まれてしまった。厄介ごとに巻き込まれるのではないかとローズマリーは恐れた。修羅場なんてゴメンである。

「わー！ 誤解しないで！ 私、性格が悪くて変態で救いようのないラピなんて、これっぽっちも全然まったく好きじゃないですから！ でも、どうぞ、ごゆっくりー！」

ローズマリーは愛想笑いを貼り付けて、出て行こうとする。だが、女はローズマリーの手を放そうとはしない。ローズマリーは困ってしまった。ラピが半眼でローズマリーを睨んでいる。

「おい、ローズマリーさん、何か誤解してないか？ それに言いすぎだっ！」

ローズマリーは目をぱちくりさせた。

「誤解？ この人はラピの彼女じゃないの？」

「ジェイニーは、俺の姉みたいなもんだよ」

「へー、お姉さん？」

「ああ、そんなとこ」

姉みたいなものという部分が微妙なところだ。突っ込んで聞くとまたラピに「気になるの？」と、からかわれるような気がしてやめた。それにしても……と、ローズマリーは少々疲れていた。

アイヴィーのことがあったので、部屋でゆっくりしたいのだが、このジェイニーという女は一向にローズマリーの手を放そうとはしない。

「あ、あの……」

ローズマリーは当惑してしまったが、ひとまずジェイニーに話し

かけようと試みた。だが、ジェイニーはローズマリーの手をひっくり返したり、持ち上げたりして熱心にローズマリーの手を見ており、ローズマリーの話など全く聞こうとはしない。

「やっぱり、このマルディクシヨン・ブレスレット、チュリチュカの腕輪だわ！ 間違いないわ！」

「えっ？ そうですけど……それが何か……」

ローズマリーは瞬きして、ジェイニーを見つめた。先ほどから何を見ていたのかと思えば、ジェイニーは熱心にローズマリーの腕輪を見ていたのか。ジェイニーは鋭い目でラピをにらんだ。

「ラピ！ どういうことなの！？ チュリチュカの腕輪の合う人が居ただなんて、ご報告を受けてませんけど！」

ラピは疲れたようにため息を吐いた。

「言いたくなかったんだよ……言ったら、実家で大騒ぎするだろ？それに、こんな短気で五月蠅い女にチュリチュカの腕輪が合ったから、嫌なんだよ」

「短気で五月蠅い女ですって！？」

これにはローズマリーの短気が爆発した。確かにそのとおりなのだが、本当のことだからムカつくのだ。

「あんたが嵌めろって言ったんじゃない！」

「あんたが文句つけるからだろ！それに、これはさっきの悪口のお返しだ！」

「ふんっ！」

ローズマリーとラピは思い切り顔をそらした。またマルディクシヨン・ブレスレットだ。アイヴィーと別れた原因もこれ、ラピと喧嘩する原因もこれ。ローズマリーは嫌気が差していた。だが、ジェイニーは一人、首をかしげる。

「おかしいわね、チュリチュカの腕輪と、ベベルデイロの腕輪なのに……」

どうも、納得がいかないようである。一体何が納得がいけないのかが不明だ。

「どういうことですか？」

ローズマリーは気になってジェイニーに尋ねた。ジェイニーはにっこりと笑って話そうとする。だが、ラピがそれを制した。

「聞かない方がいいぜ。めっちゃくちゃ恐怖するから」

ラピは怖そうなお化けの真似をした。ローズマリーはそれを見て、アイヴィーが腕輪のせいで豹変したことを思い出した。

「じゃ、じゃあやめとく……」

身震いすると、ジェイニーが笑った。

「じゃあ、話さないでおくわ」

そして、ジェイニーはラピに向き直る。

「このことはしっかりと、ラピのお母さまとお父さまにご報告しておきますからね？」

有無を言わさない口調だ。ローズマリーには、ラピに拒否権はないように思えた。

「うえ……」

ラピは嫌そうに呻いたのだった。

第二十三話 仲の悪い二人

ラピは暫く嫌そうに顔をしかめていた。しかし、気を取り直したのか、ローズマリーをじつと見つめ始めた。何か考え事をしているのだろうか。ラピの真剣なまなざしにローズマリーは面食らった。

「な、何よ？」

少々どぎまぎして、ローズマリーは一步後ろに下がった。ジェイニーの目が面白そうに輝く。ラピはにっこりと笑った。

「そういえば、ローズマリーさんは白湯を出してくれたのに、俺は何も出してなかったなと思ってさ。部屋に上げれば？」

「良いよ、そんなの。私、ラピの部屋が散らかってるかどうかを見たかっただけだし」

ローズマリーが出て行こうとすると、がしつと腕を掴まれた。後ろを振り返ると、ジェイニーがにやつと笑って、ローズマリーの手を掴んでいた。

「ジェイニーさん!？」

「まあいいからいいから!」

ジェイニーはローズマリーの手を引っ張って、部屋の中に連れ込んだ。ラピは冷蔵庫からビンを取り出して、グラスに注いだ。薄桃色をしたジュースだ。少し、どろつとしている。ローズマリーとジェイニーはラピの居る冷蔵庫の前までやってきた。

「どうぞ?」

「ありがと……」

ラピはローズマリーとジェイニーにジュースを渡した。それを口に含むと、口の中にほんのりとしたフルーツの香りと甘さが広がった。一口、飲んで味わう。その後は一気に飲み干した。

「美味しい! これ、何のジュースなの？」

「ミックスジュースだよ。色んな果実から絞ったジュースなんだけど、ここの店のミックスジュースは果物を絶妙な配合で混ぜている

から、美味しいんだ」

「へえ、こんな美味しいもの飲めるなんて良いな！」

毎回、ラピの部屋にお邪魔しようか。そんな考えが頭をよぎる。

ラピが笑った。

「じゃあ、買いに行く？　ローズマリーさん、買い物したいって言うってたじゃん」

「言ってたんだけど、良く考えたら、実家出るときにお金を持ってたの」

でも、食事は困らない。守護連盟には食堂があるからだ。その食堂は代金が必要ない。きつと、働いた報酬から引かれているのだからうけど。

「大丈夫だよ。受け付けに行ったら、働いた分の報酬がもらえるから」

ローズマリーはぎくりとした。

「受け付け……って、アイヴィーさんの働いているところだよね……」

ローズマリーが消沈して視線を下げると、ラピがグラスを置いて部屋の隅に歩いていった。

「心配すんなって。こないだの報酬なら、一応俺が預かってる。ほら！」

ラピが引き出しから封筒を取り出して見せた。そして、ローズマリーの方に歩いてきて、ローズマリーに手渡した。ローズマリーはそれを両手でしっかりと持った。封はしっかりとされている。そして、決して分厚くはない。しかし、いくらかの感動を覚えた。視線を上げると、ラピが微笑んでいた。

「一緒に仕事したもんな。でも、俺は殆ど何もしてないから全部ローズマリーさんが受け取ってよ」

「駄目！」

ローズマリーはラピに封筒を押し付けた。ラピは戸惑ったようにローズマリーを見ている。

「駄目だよ、そんなの！ 私は、ラピが居てくれただけで心の支えになったんだから！ 半分こしようよ！ ねっ？」

「ローズマリーさん……」

突然、拍手の音が割り込んだ。何事かと、ラピもローズマリーも拍手の方を振り返ると、ジェイニーがにこにこしながら拍手していた。

「なーんだあ、二人とも喧嘩ばかりしてると思ったら、仲が良いんじゃない」

ジェイニーは満足そうに頷いている。ローズマリーとラピは顔を見合わせた。そして、お互い顔をしかめる。

「ジェイニーさん、何言ってるんですか？」

「ホント、ジェイニーって目が節穴だよな」

「えっ？」と、ジェイニーの動きが止まった。

「こんな短気で怒りっぽい女、お断りだぜ」

「私だって、こんな嘘つきで、変態なんてお断りよ」

「なあ！」「ねえ！」と、ラピとローズマリーは声をそろえた。

ジェイニーはそれを難しそうな目で眺めて、「うん」と頷く。

「分かったわ。じゃあ、仲良くなるようにみんなでお買い物に行きましょうよ」

「えっ？」

ローズマリーとラピは目を見合わせる。

「どうしたの、そんなに嫌なの？」

ジェイニーは仲の悪い二人にがっかりした様子だ。ローズマリーとラピは視線を合わせた。

「いや、買い物行くのは前から約束してたからいいんだけど」

「ジェイニーさんも行くのかと思って」

ジェイニーは目を輝かせた。にこにこ笑って二人の肩を軽く叩いた。

「あっ、なーんだ！ 二人でデートしたかったのね！ ゴメンゴメン、邪魔しちゃ悪いわ！ 帰るわね！」

雷が落ちたような衝撃がラピとローズマリーに走った。帰ろうと玄関に引き返そうとしたジェイニーの手をローズマリーとラピは一緒に掴んだ。ローズマリーは離すまいと力を込めて握る。

「何言ってるんですか！ 行きましよう、ジェイニーさん！」

ローズマリーの血走った目を見てジェイニーは「いつ!?」と声を上げた。ラピもその通りとばかりに力いっぱい頷く。

「そうそう、こんな女と、デートなんて真っ平ゴメンだし！」

「私だって、こんな男とデートなんて、考えただけで嫌だし！」

ローズマリーとラピの声は妙に力が入っている。

「おお、今日は珍しく気が合うな、ローズマリーさん！ 行こう、ジェイニー！」

「あー、ジェイニーさんが居てくれて良かったー！」

ラピとローズマリーは朗らかに笑いあい、ジェイニーの肩を逃がすまいとしっかり掴む。

「しゅっぱーっ！」

ラピはローズマリーとジェイニーを連れて、テレポーターションする。

「ええっ!? ちょ、ちょっとお!?」

ジェイニーの戸惑ったような声が聞こえたあと、三人は部屋から綺麗に消えたのである。

第二十四話 ジェイニーの用事

ラピが、テレポーターションした先は、大きなショッピングモールだった。ローズマリーは見たこともない華やかな建物を前に「ふあー」と歓声をあげている。魔法灯で装飾されたレンガの建物のシヨーウインドウには色々なものが飾られてあるし、縫いぐるみが空を飛んでいる。

賑やかな音楽が流れていると思えば、店先でバイオリンやギターを弾いている人が居る。人々が楽しそうに行き交っていた。ラピは赤レンガの店を指差した。

「いつも俺はここで買っただ」

ローズマリーは目を輝かせ、子供のようにガラスに張り付いている。

「見て見て！ あの植物、お菓子が実になっている！ あれも魔法で出来てるのかなあ？」

ジェイニーは微笑ましく思い、目を細める。ローズマリーのはしやぎようが面白かったのか、ラピは笑っている。ローズマリーは顔をしかめた。

「何よ、ラピ」

「いや、良い大人が田舎もん丸出しだと思ってさ！ 良いよ、面白いからそのままで！」

ローズマリーは「フン！」と顔を背ける。そして、視線だけラピの方に向けた。

「何よ！ ラピみたいにすましてたって面白くとも何ともないわよ！ ねー、ジェイニーさん！」

「そうそう、ラピも混ざって一緒に楽しもうよ！」

「いや、俺は大人だから、そんなことは恥ずかしくて出来ないよ」
気取っているラピをローズマリーはハツと鼻で笑う。

「だーれが大人だ！ ド変態の鬼畜の癖に！ そっちの方がよっぽ

ど問題よ!」

「えっ、ラピってそうなの?」

ジェイニーは面白く思った。ラピのまだ知らない顔があるとは珍しい。ローズマリーはにやりと笑う。

「そうなんですよ、ジェイニーさん! 聞いてくださいよ」

全部話そうとしているローズマリーの口をラピが手でふさいだ。

「おい、ジェイニーに余計なことを吹き込むな?」

「何すんのよ! 息ができないでしょ!」

二人のやり取りをジェイニーはじっと見ていたが、

「もしかして、さ?」

「ジェイニーさん、なんですか?」

「私が知らないだけで、二人ってデキちゃっているの?」

一つの結論に達した。だが、ローズマリーとラピは意に適わなかったらしい。

「ハア!」

と思いつきジェイニーに尋ね返していた。喧嘩を売っているのかと言わんばかりの返答にジェイニーは気圧された。

「あ、違うならいいのよ」

空笑いを浮かべる。ラピは二人の背中を押す。

「さーて、買いに行こうか!」

そして、ローズマリーは日用品を色々と仕入れていた。それから彼女は、美味しそうな菓子も買ったし、靴も新しいものを購入していた。ラピが薦めたミックスジュースも一ダース買い占めていた。

「私、服見てきます!」

「じゃあ、俺はここで待ってるな」

店から出たところにある休憩所でラピはそう言った。

「ジェイニーさんはどうします?」

「私もここで待ってるわ」

「分かりました」

ローズマリーは楽しそうに走って行ってしまった。ラピは手すり

に、もたれている。風が吹いて、ラピの短い金髪を弄んだ。ジェイニーはラピの少し大人になった横顔を見て微笑んだ。

「何だかんだ言いながら、ラピとローズマリーって仲がいいのね」

「そう？ 俺は悪いと思うけどな」

「来て良かったわ。私のことを姉って言ってくれて嬉しかったし」

「ずっと、姉さんみたいに思ってたことは本当だよ」

ラピは、照れもせず、当たり前のように言う。それが、ジェイニーには嬉しかった。

「ありがとう、ラピ」

ジェイニーも手すりに背を預けた。ラピの隣に当然のように立っていたところが懐かしい。ラピの右手にはベベルディロの腕輪がはまっている。それをじっと見つめる。

サアツと爽やかな風が吹き抜けた。それからラピと色々な話をした。ラピはローズマリーのことを楽しそうに話していた。ジェイニーの知らないラピがここに居る。どれくらい、そうやって話していただろうか。ラピの横顔を見ているうちに、ジェイニーの口から言葉が滑り出る。

「もし、腕輪がなかったら――」

「えっ？」

ラピがジェイニーのほうを振り向く。突然、元気な足音がこちらに走ってきた。ジェイニーとラピはそちらに顔を向ける。ラピが驚いたように瞳を揺らめかせた。それは、ローズマリーの足音だった。「お待たせ！ 何よ、その顔は！」

ジェイニーも彼女の変身に驚いた。

「ローズマリーちゃん、それ、どうしたの？」

ローズマリーは綺麗な服に身を包んでいた。レースのブラウスに、膝までのフリフリのスカーツ。長い黒髪もウェーブがかかっている。化粧も薄っすらとされている。先ほどまでは、田舎臭い民族衣装だったのに。

ラピが驚くのも頷けるほどの変身振りだ。ローズマリーは疲れた

ように空笑いした。

「実は、お店の人に色々といじられて……でも、普通の服も買ったから良いかな……でも、すごく安かったのよ。まだお金が余ってるし」

ジェイニーはラピを見た。ラピはじつとローズマリーを凝視している。

「な、なによ!」

ローズマリーもラピの視線に気付いたようだ。ラピはローズマリーの方に近寄っていく。

そして――。

「痛っ!」

くいくい。

「痛っ、痛いつてば!」

くいくいくい。

「痛いつて言つてるでしょ! 何すんのよ!」

ローズマリーが叫んでいる。ジェイニーは呆れた。ラピはローズマリーのくるくるした髪の毛を引っ張って遊んでいるではないか。

ローズマリーがラピの手を振り払った。ラピがムツとする。

「田舎者が都会ぶってんじゃないぞ」

「何ですって! 痛い! ちよつとやめなさいよ!」

ラピはローズマリーを追いかけて、髪の毛を引っ張っている。ギヤーギヤーと騒いでいるので、通行人が振り返って恥ずかしいことこの上ない。

(まだ、子供ね)

ジェイニーは嘆息した。

「ラピ、ローズマリーちゃん、そろそろ私は帰るわね」

「えっ、お帰りになるんですか?」

「ジェイニー、用があつたんじゃないのか?」

ジェイニーはラピの所にやってきた一番の目的を思い出した。

「あ、そうそう、例の人物のことだけど、もう少しで追い込むこと

が出来そうよ。期待しないで待ってて」

「えっ!？」

ラピが今日一番驚いた顔になった。

「じゃあね!」

ジェイニーは、手を振った。ジェイニーの手にはレベル・ブレスレットが光っている。そして、ジェイニーはテレポーターションをしてそこから帰って行った。

第二十五話 異変

ローズマリーは放心しているラピに「ねえ」と声をかけた。ラピはローズマリーに声をかけられて驚いている。

「な、何だよ？」

「ジェイニーさんが言ってたことって一体何のこと？」

ラピは、嬉しそうでも、悲しそうでもない。だから、尚更、ジェイニーが言っていたことが何のことなのか、ローズマリーには全然分からなかった。ラピは嘆息した。少々疲れているような面持ちだ。

「あんたには、全然関係のないことだよ。気になさんな」

ラピは面倒くさそうに手を振った。

「な、何よ……教えてくれたっていいじゃない！」

ローズマリーは悲しくなった。ラピとジェイニーに壁を作られたような疎外感を感じていた。そういえば、ローズマリーはラピのことを何も知らない。どうして、魔法が使えないのか。そして、ラピが何者なのかすら知らない。

ローズマリーがじっとラピを見つめると、ラピは面食らったように瞬きをした。だが、またすぐに、おちゃらけた顔に変わる。

「あれ？ 俺のことが気になるの？ 私、あなたのことが気になって夜も眠れない！ ドキドキしちゃうの〜！ とか？」

ラピは女の真似をしながら、くねくねした。ローズマリーは、プツと噴出して大笑いした。途端に尋ねる気が失せてしまった。

ラピはラピだ。

それは何も変わらない。

「誰がそんなこと言うもんですか」

ラピのことはこれから知っていければ良い。

（仲の良い友人になれたら嬉しいのにな）

ローズマリーは気を取り直して、ニヤツと笑った。

「もう良いや。疲れちゃったから帰ろうよ」

「おっけー！」

そして、二人は戦利品を抱えて、守護連盟の本部にテレポーターションして帰って行ったのだった。

ここ最近、各地では日照りが続いていた。ここ、ミュウミュウ村も日照りのせいで危機に晒されていた。井戸の水が全てなくなってしまった。川も干からびて、ひび割れている。

アダムは、ざらつく舌を出して、息を吐いた。

喉が張り付くようで、上手く呼吸が出来ない。重い足を引きずる外に出ると、太陽が容赦ない強い光で照り付けた。

普通の雲や、ダークマインドの雲すらどこにもなく、日陰にもなってくれない。村の人は日照りのせいで、水が飲めず、終いには自分の排尿を飲んでいたが、死ぬのも時間の問題だった。

それすら飲むことの出来なくなった村人は、毎日のように死んでいく。

伝書鳩は守護連盟に飛ばしたが、日照りのせいでちゃんと守護連盟に助けが届いたかすら分からない。

アダムは空を睨みつけた。守護連盟には神がいると聞いたことがあった。

「何が、神だ。俺たちの危機も救ってくれないくせに」

怒り、憎しみ、そして、絶望がアダムを支配する。

「お兄さん、僕がお兄さんを救ってあげようか？」

アダムはぎくりとして、後ろを振り向いた。

そこには、年端もいかない少女と少年が立っていた。奇妙なことに少女と少年は無数の腕輪をしていた。少年は手を、すっと伸ばした。

すると、いつの間にか、少年の手には水の入ったグラスが握られていた。アダムは少年の手からグラスをひったくった。そして、貪るように水を飲む。

「ありがとう！　もしかして、守護連盟の人かい？」

「ううん、違うよ」

少女の答えを聞いて、アダムはムツと気色ばんだ。

「やっぱり、守護連盟なんてあてにならないな！　守護連盟が来ないせいで皆死んでいくんだから！」

「守護連盟が憎い？」

「ああ！」

「じゃあ、お兄さんに力をあげる」

少女は手を、ずっとアダムの方に伸ばした。少女の手には陶器で出来た腕輪が握られていた。アダムは不思議そうにそれを見ていたが、右手にそれを通した。腕輪はアダムの手に吸い付くように収まった。

「あ！？　な、なんだこれ！？」

途端に、アダムに異変が襲う。アダムは自分の内側に何者かが入ってきたことを知った。そして、その何者かがアダムの意識を奪い取るうとする。アダムは頭を抱えて、もんどりを打つ。

「うわああああああああ！」

そして、アダムは動かなくなった。

少女と少年は顔を見合わせて、にやりと笑った。

「サウザンド、目覚めたかい？」

少年は、腕輪の名で男を呼んだ。すると、それは静かに起き上がった。そして、「ふう」と、頭を振った。

「お久しぶりです。ダークマインドさま」

サウザンドは頭を下げて跪く。

「ご命令を」

ダークマインドと呼ばれた少女と少年は、満足そうに口の端を吊り上げたのだった。

第二十六話 太陽神サニー

ここは、神々の館である。竜神のフロウは厳しい顔をしていた。フロウは二階まで大急ぎで駆け上がる。

目的の部屋までずんずんとしつかりした足取りで進んでいく。そして、ひととき大きな部屋の前まで来ると、ドアをノックした。

「サニーさま！」

更に、ドアをノックする。だが、誰も出てこない。フロウは益々、イライラした。ドアを開けようとするが鍵がかかっている。

「サニーさま！？ 居留守ですか！？ 居るのは分かっているんですよ！」

フロウはドアをノックする。いつもなら、フロウが苛立って感情を乱せば、空には雨雲が浮かぶ。だが、今はどうだろう。どんなにイライラしようとも空は晴れ渡っている。これが異常だと言うことはフロウが一番感じていた。

「サニーさまっ！！」

フロウがこれまでにない大声をあげた。

「ああん、もうっ、五月蠅ああああああいっ！」

部屋の中で、ヒステリックな声が爆発した。そして、何かが激しく暴れる音がする。フロウはその音にぎょっとして、一瞬怒りを忘れた。

バタバタと足音が近づいてきて、ドアが開く。まず最初に目に飛び込んできたのが、キンと光った朱色の目だ。長いふわふわの赤毛がざあっと波のように揺れる。

それは、すごい勢いで出てくると、華奢な手を伸ばして、フロウの前襟を掴んだ。その為、フロウは必然的に前かがみに体を折ってしまったが。

「さ、さささ、サニーさま！？」

「そんな大声で言わなくても聞こえてるわよ！ 聞こえてる！ 聞

こえてるのよ！」

少々舌足らずの少女の声が神々の屋敷の中に響き渡る。

「ふえ、ふええええっ！」

サニーはフロウの襟首から手を放すと、大きな声を上げて泣き始めた。サニーはどう見ても、十くらいにしか見えない少女だった。フロウは困ってしまった。

「太陽神ともあるう方がお泣きにならないでください」

子供のお守り決定だ。うんざりしたフロウの気持ちに声に出してしまった。サニーはそれが気に入らなかつたらしい。

「なによ、太陽神だったら泣いちゃいけないって言うの!？」

サニーは激しくフロウの向こうずねを蹴った。

「いたた、痛いです……ほら、怒ったり泣いたりすると、ダークマインドが大きくなりますし」

「怒ったり泣いたりするようなことを我慢が出来ないことは、子供でも知ってるわよ！それはね、お母さんが子供に言い聞かせるため言う台詞よ！それに、今はそんなこと関係ないでしょ！」

「その様子だと、サニー様も異変のことはご存知で？」

フロウは涙目になりながら尋ねた。

「勿論知っているわよ。各地で雨雲が消えてしまったんでしょ」

「そのとおりです！流石、太陽神様です！」

拍手すると、サニーは「えっへん！」と仰け反った。サニーの機嫌が直ってフロウは安堵した。このまま煽ってサニーの気分を良くしようと考えた。

「その様子だと、対策を取られたんでしょう？」

にこにこして尋ねると、サニーは首を縦に振った。

「私も、日照りが緩和するように太陽の温度を下げようとしているのよ。でも、やりすぎると、どこかで反動が出てしまうの。今は良くても、何年後かには、太陽の温度が急激に上がったちゃうわ」

「そうですか、そこまで、対策を練っておられたとは存じませんでした。流石、太陽神さまです」

フロウは気持ちが軽くなると同時に、サニーを尊敬しなおした。やはり見かけで判断してはならないようだ。

ふと、サニーの耳からヘッドホンが伸びているのが見えた。音楽プレイヤーのようだ。しかも、小型で最新式である。

「ところで、先ほどから、何を聞いておられるのですか？ 音楽ですか？」

だが、違ったようでサニーは「ううん」と、首を振った。そして、お化けの真似をして見せた。

「怖い、恐怖体験よ。心霊現象。背筋がぞくつとするぐらい寒くなるやつ。太陽の温度を下げるために私も必死よ」

「そ、そうですか！」

サニーもフロウと同じで感情に気象が左右されるようだ。

「ところで、フロウちゃん？ 雨が出来る原理をご存知よね」

「はい、私も、竜神の端くれ。それくらいは存じております。雲からですよ」

「そう。でも、その時に出来るはずの雨雲がどこかに消えてしまったの。だから、雨は降らない。太陽が幾ら熱して水蒸気を作っても、雲が出来ない。だから、日照りになってしまったの。だから、私は少しでも太陽の温度を下げて日照りを緩和することしか出来ないわ」

「そつなのですか……」

「雲を押しつけて晴れにすることだったら簡単に出来るんだけどなあ」

フロウは困ってしまった。ここ最近、日照りの助けを求める手紙が世界各地から届いているのだ。サニーでも対策が取れないとなると……。

サニーが廊下の窓際まで歩いてきて、窓を開けた。空は、晴れ渡っており、雲ひとつない。

「どうしてか、ダークマインドの雲も消えてしまったみたいよ」

「そのようですね」

フロウは嘆息した。平和そのものの静けさが支配している。だが、

髪の毛が逆立つような嫌な感覚が消えないのだ。

足音が近づいてきて、フロウの後ろで止まった。

「あら、アイヴィーちゃん」

サニーがにっこりとアイヴィーに微笑みかけた。

「フロウさま、サニーさま。そのことで、お話があります」

フロウが振り返ると、アイヴィーが一礼していた。

第二十七話 ラピのキス

「守護連盟さま、ありがとうございます！」

「い、いえ」

ローズマリーはムームー村の人に拝み倒されて、恐縮した。頭を地面に擦り付けそうな村人の勢いに気圧され、ローズマリーは、ラピのところまで非難した。ラピはラピで村人からの賛辞を嬉しそうに気持ち良さそうに聞いている。

「いえいえ、こんなことなら、お安い御用です。また何かありましたら、守護連盟までご連絡ください」

ラピがそういうと、神様に祈るように村人はラピをあがめている。ラピはさらに気持ち良さそうに目を細めている。

ローズマリーはそんなラピに呆れた。ラピの腕を引っ張って、降りてきた耳に鋭く囁いた。

「ラピ！ 任務は終わったんだから帰るわよ！」

「あ、ああ、そうだな！ そういうことですので、私たちは帰ります」

村人その一はラピにすがり付く。

「ああ、守護連盟さま！ 風の噂によると、私たちの村より酷い状況の村があるそうです！ 早く助けに行つてあげてください！」

ラピとローズマリーは目を見合わせた。

「分かりました！ 情報をありがとうございます！」

ラピは真剣な顔を繕うと、一礼した。

「では、失礼します！」

そして、ラピとローズマリーはテレポーションをして、魔法使いの寮まで帰って来た。ここはローズマリーの部屋である。

最近になると、ローズマリーは行ったところにはテレポーションが出来るようになっていた。

ラピがついこの間、フロウに進言したお陰で、なにかあると、口

ローズマリーはラピと任務を組まされていた。それはそれで、嬉しいのだが。

「最近、気候がおかしいわよね」

ローズマリーは窓を開けて空を見上げる。空は雲ひとつなく晴れており暑い。最近の任務は、ダークマインドを倒すことではなく、専ら水不足の村に水を届けることだけだった。

「まあ、俺は楽で良いけど？」

ラピは満面の笑顔で言う。ローズマリーは呆れた。

「あんたねえ、楽っていつつも楽じゃない？ 何かしたことあった？」

「あるよ！ 色々こまごまとしたことをだな！」

「はいはい」

ローズマリーが話を投げやりに聞くと、ラピが怒った。

「なんだよ、人がせつかく真剣に話しているのに！」

「はいはい、えらいでちゅねー」

「あつ！ 俺のことを軽く馬鹿にしただろ！」

「あつ、わかつちゃったあ？」

「許せん！ くるくるした髪しやがって！」

ローズマリーはラピと買い物に行つてからずっとウェーブヘアだった。

「痛い、痛いつて！ 引つ張るな！」

ローズマリーはラピから逃げようとした。くるくるした髪の毛はラピに気に入られているのかそうでないのか、ことあるごとにラピに引つ張られる。だが、ローズマリーはこの髪形が気に入っていた。「楽しそうですね」

突然声が割り込んだ。二人の動きが止まる。ラピが気遣わしげにローズマリーを窺う。

それはアイヴィーだった。いつもの微笑を絶やすことなくローズマリーを見ている。

「ドアが開いていたので、勝手に入ってきましたが構いませんか？」

「はい」とローズマリーは頷いた。いつものアイヴィーの様子にローズマリーはほっと胸を撫で下ろした。

「この間は、つい、怒鳴ってしまつてすいませんでした。どうも、気持ちがコントロールできなくて」

「いえ、私のほうこそすいませんでした」

ローズマリーはまた、頭を下げた。アイヴィーはにっこりと微笑んだ。

「そんなことよりも、今日の集会、ラピもローズマリーさんも必ず出席してください。それをお伝えしに来ただけですので」

そういいながらアイヴィーは抱えていたプリントの束から二枚ラピとローズマリーによこした。そこには、集会の日程が書いてある。ローズマリーは紙面から顔を上げた。

「アイヴィーさん、今日任務にあたつた村よりも悪い村があるそうです。それを何とかして欲しくて」

「各地から来た手紙にはちゃんと魔法使い達を送つて対処しているつもりですよ。ご安心ください」

「そうですか。ありがとうございます」

「では、失礼しますね」

アイヴィーは一礼して、テレポーションして帰つていった。

「良かった、アイヴィーさん、もう怒つてないみたいだった」

ラピが再び、ローズマリーの髪を引っ張つた。

「痛いって言つてるでしょ!」

「やっぱり、その髪型、ジュリアさんの髪形を真似てるんだろ?」

ジュリアとは、アイヴィーの彼女らしき人だ。ローズマリーはぎくりとして、苦笑いを浮かべた。

「えっ? 分かつちやつた?」

ラピが嘆息して、手を腰にやつた。

「そんな髪型でアイヴィーの周りをうろついていたら、ジュリアさんに笑われるだけだぜ?」

「う、五月蠅いなあ……」

ラピの言い分はもつともだ。そのため、これ以上ラピに反論は出来ない。ローズマリーは消沈して視線を下げた。

「アイヴィーのこと忘れられないのか？」

「うん……」

「未練たらしくそんな髪してたら、またアイヴィーに付け込まれるぜ？」

ローズマリーは視線を上げて、ラピを睨む。

「付け込まれるって何よ！ 酷い言い方しないでよ！」

「じゃあ言うけど？ アイヴィーって昔から相当女癖が悪いって評判だったんだぜ」

「え……そうなの？」

また、ラピの嘘だろうか。だけど、ラピがこんなことに嘘をつくだろうか。

「俺は、大体のアイヴィーの考えが分かる。きつと、俺がチュリチユカの腕輪の合うローズマリーさんを連れてきたから」

「えっ！？ ということ？」

ローズマリーが突っ込んで聞くと、ラピはハツと我に返った。ごまかし笑いを浮かべている。

「まあまあ、そこ座れよ。俺が髪形を整えてやるから」

「う、うん……」

テーブルの椅子にローズマリーを座らせた。ラピはテレポーターションして、ラピの部屋からスプレーとブラシと、小さな送風型の乾燥機を持って帰ってきた。

「ラピって私の髪形なのに、ちゃんと出来るの？」

「昔、ジェイニーにしてやったことがあるんだ」

「ふーん、ジェイニーさんにね」

ラピとジェイニーは昔から仲が良かったようだ。特に焼くわけではないが、なんとなく面白くないような微妙な気分だ。

「ああ、ローズマリーさんは、長くて綺麗なストレートの髪を持ってるんだから無理にウェーブヘアにしないほうがいいよ」

ラピはローズマリーの髪をするすると梳といていく。あまりの気持ちよさにローズマリーは目を細めた。水の入ったスプレーを髪に吹き付ける。そして、ラピは乾燥機で髪を伸ばしながら乾かしていく。どれくらいそうしていただろうか。

「はい、鏡どうぞ?」

ラピは手鏡をローズマリーの部屋から持ってきて渡した。

「すごい、髪がストレートになってる。しかもサラサラ……」

「なっ? 良いだろ?」

「うん! 素敵!」

ラピはくすつと笑って、ローズマリーの後ろの髪をさらりと掬く上げた。

「綺麗だよ、ローズマリー」

そう囁ささいて、掬くい上げたローズマリーの髪の毛にラピはキスした。
「!?!」

ローズマリーは驚愕して、持っていた鏡を落としてしまった。

第二十八話 立場逆転

ローズマリーは勢い良く振り返った。

「な、何してんの!？」

ラピはきょんととして、ローズマリーを見ている。そうして、自分の頭を掻く。

「えっ? ああ、つい」

「ついって!」

ラピはローズマリーが落とした鏡を拾い上げて、ローズマリーに渡した。

「なんだよ、ドキドキしたとかいう?」

ラピは面白そうにニヤニヤしている。凶星だった。だが、こんなことで、ラピに、からかわれたくない。

「し、しないわよ。しないけど、変なことしないでよ!」

「なんだよ、俺がせっかく、アイヴィーのことから気を紛らわせてやろうとだな」

あれは、ラピの気まぐれだったのか。ローズマリーは安心して、肩をすくめてみせた。

「はあ? あんたにアイヴィーさんの代わりが務まるとでも? アイヴィーさんはあんなにかっこよくて優しいのに?」

つい、憎まれ口が出てしまった。ラピは一瞬、顔をしかめたが、すぐにお茶らけた顔に戻る。

「あれ? 勘違いしてるようだけど、アイヴィーの代わりになつてやるなんて誰も言っていないぜ?」

「そりやそうよね、あんたにアイヴィーさんの代わりなんて到底無理なもの」

「あはは、だれも、こんな短気で怒りっぽい女と付き合いたくなんてないね」

二人はじつとにらみ合っていたが、『フン!』と、目をそらす。

ローズマリーは、いつものラピに安堵した。先ほどのことは、ラピがローズマリーをからかったのだ。

それにしても、ラピの整った顔顔が忌々しいこと、この上ない。ローズマリーは反抗するように心の中でラピに舌を出した。

食堂でラピと一緒に昼食を取ったあと、報告書を出しに行った。フロウも、アイヴィーも昼食をどこかで食べているのか見当たらない。

報告書だけを置いて、ラピとローズマリーは部屋に帰ろうとした。そのとき、壁に時計があるのがローズマリーの目に留まった。それは、一時を示そうとしている。

「あれ？　もしかして集会が始まるんじゃない！？」

ローズマリーは慌てて、アイヴィーが持つて来たプリントを開いて見た。

「ほら、やっぱり、もう始まるわ！」

道理でフロウもアイヴィーも見かけないわけである。

「神々の館の二階だってアイヴィーさんが言ってたわよね！」

「えゝ行くのかよ。二人してさばらない？」

ラピは、ふああと、あくびしている。ローズマリーはラピの手を掴んで歩き出した。

「そんなこと言っていないで、行くわよ！」

木の階段を上っていくと、部屋がいくつもあった。その中で一段と大きな部屋があった。いや、これは部屋と言うより、ホールだ。ドアを開けると、魔法灯の光が目刺さった。そして、ざわっと周りがどよめいた。

既に、話は始まっていたようである。千人ほど入れそうな部屋だった。床が階段状に外周に向けて高くなっている。

「遅れてすいません！」

ローズマリーが言っていると、講壇に立っていたアイヴィーが、驚いた

ように瞳を揺らめかせていた。ラピも「すんませーん」と言っ
て、ローズマリーと一緒に開いた席に上っていく。

「あれって、誰？」

「もしかして、あの新人の！？」

「すごい変貌を遂げてない！？」

「もしかして」

ひそひそと噂されている。ローズマリーとラピは席につきながら
はムツと顔をしかめた。

「なんで、噂されてるのかしら？ 遅れたのは悪かったわよ」

「髪型が似合ってるからじゃないの？」

ラピが隣で、ニカツと笑った。ローズマリーは瞬きした。

「そ、そう？」

ローズマリーは少し嬉しくなって、ラピとニヤニヤした。視線を
前に戻すと、アイヴィーがマイクを持ったまま惚けていた。

「アイヴィー続きを」

フロウに言われ、アイヴィーはハツと我に帰ったようだ。その様
子を、ジュリアが面白くなさそうに見ていたことに、ローズマリー
は気付いていなかった。

アイヴィーの声がホールに木霊する。

「えー……、日照りが続いているのは、ダークマインドが周りの雨
雲を取り込んでしまったからだと思われます。雨雲がないことには、
フロウさまも太陽神のサニーさまもどうすることも出来ません。で
すから、魔法使い達には、ダークマインドを見つけ出して、浄化し
て欲しいのです」

魔法使い達の間から手が上がった。

「質問どうぞ」

アイヴィーが促す。それは、エメラルドだった。エメラルドは二
つ長い机を隔てた向こうの席で立ち上がった。みんなからの注目を
浴びている。

「つまり、いつもどおり浄化の魔法を使えばいいわけですね？ そ

れなら、お任せください！」

エメラルドは得意げに髪を払ってみせる。だが、アイヴィーは難しい顔をして「いいえ」ときっぱりと否定した。

「えっ？」

エメラルドの表情が固まった。魔法使い達は口々にどよめいている。

「皆さんからのご報告によりますと、ダークマインドに耐性が付いたのか、通常の浄化の魔法が効かなくなっているそうです」

「そういえば、確かにそうです！ 効かなくなっていました！ それに、小さな子供に変化していました！」

「そうです、だから、古代魔法を使っていた必要があります」

「古代魔法？」

初めて聞く言葉だ。周りもざわざわとその名を口に出している。

「マルディクション・ブレスレットをお使いの方は、レベル・ブレスレットをお使いの方とは違って、修行をしておりますので、浄化の魔法しか使えないはずですね。ですから、マルディクション・ブレスレットをお使いの方はこちらに魔法書がありますので、お持ちになってください。そして、各自で修行してください」

辺りはまたざわめいた。

「ど、どういうこと？」

ローズマリーも戸惑った。マルディクション・ブレスレットがあれば、どんな魔法も使えるはずではなかったのか。ラピは珍しく真剣な顔をしていた。

「つまり、マルディクション・ブレスレット使いの方が魔法力の容量が大きくて重宝されるけれど、レベル・ブレスレット使いの方が修行しているので実力は上だし、色んな魔法が使えるってことだよ。マルディクション・ブレスレットに頼っていただけじゃ、魔法は一種類しか使えないままってことさ」

「つまり、色んな魔法を使いこなすには、練習するしかないってことなのね」

ローズマリーは唸った。レベル・ブレスレット使用と、マルデイクション・ブレスレット使用の立場が逆転した瞬間だった。ジュリアがうつすらと勝ち誇った笑みを浮かべる。

ジュリアの手にはレベル・ブレスレットが光っていた。

第二十九話 ジュリアの刃物

集会が終わった。アイヴィーとフロウはホールから出て行った。

ローズマリーは配られている魔法書を二つ手にとって、ラピがまだ座っている席に戻ってきた。

「はい、ラピの分よ」

ラピはあくびして机に突っ伏す。

「俺は良いや。どうせ、魔法は使わないし」

寝言のようにむにやむにやと言っている。

「駄目よ！ 私だって魔法があれしか使えないんだから、二人して頑張らないと！」

「そうね、魔法が使えないんですものね？」

色の違う声が割り込んだ。どこか、楽しそうな響きがある。ローズマリーが振り返ると、青い瞳が笑っていた。

「ジュリアさん」

ジュリアはアイヴィーの現在の恋人だ。彼女が一体ローズマリーに何の用があるのだらう。ジュリアは長い茶色のウェーブヘアをさりと掻き上げた。

「あら、マルディク・ブレスレットをお使いの方が、私の名前をご存知だなんて光栄だわ！」

ローズマリーの短気に火がついた。

「嫌味でも言いたいんですか！？」

思わず怒鳴ると、ジュリアは楽しそうに笑った。どこか、馬鹿にしている節がある。

「やっぱり、分かる？」

「何ですって！？」

ジュリアは腕を組んで、ローズマリーの周りをゆっくりと歩く。

「最近の貴方、面白かったわ！ 私みたいな髪型でアイヴィーさんの周りをうろちょろしてて」

カツと顔に火がついた。ラピの言ったとおりだ。本当にジュリアに笑われてしまった。

ラピがいつの間にか机から顔を上げて、恐怖したような表情でこちらを見ていた。

「でも、止めたわ!」

ローズマリーがきつぱりというと、ジュリアの目つきが鋭くなった。

「そうね。でも、そんな髪型で、アイヴィーさんの気を引くのは止めて」

「気なんか引いてないわよ! これは、ラピが私に似合うからってしてくれたのよ!」

ジュリアは楽しそうに笑った。

「そう、役立たず同士、仲がいいのね!」

これには、ローズマリーの短気が爆発した。

「何ですって!? 私のことはともかく、ラピのことまで言うなんて許せない!」

掴みかかるうとすると、ジュリアが顔をしかめて、ローズマリーの手を払った。

「許せないって本当のことじゃない。悔しかったら、その魔法書を早く覚えることね! マルディクシオン・プレスレットが合っているだけで、守護連盟に居られちゃたまらないわ!」

「分かってるわよ! 絶対に覚えてやるわよ!」

「そうそう、最後に、貴方の名前を教えて欲しいんだけど? 私、貴方の名前なんて全然知らないから!」

眼中にないと言いたいのだろうか。ローズマリーは鼻で笑った。

「貴方に名乗る名前なんて持ち合わせてないわよ!」
これには、ジュリアは気色ばんだ。だが、すぐに小馬鹿にしたような笑みに変わる。

「そういえば知ってたわ。何て言ったっけ? 枯れた……そうそう、ウィザー（枯れた）・ローズマリーっていう残念な名前だったわね

！」

「ただ。最後には、結局名前を馬鹿にされる。」

「私の名前を馬鹿にしないでよ！」

思わず怒鳴ると、ジュリアは楽しそうに笑った。

「あら？ でも、ローズマリーって小さな花よね？ それが枯れてるんだから、残念なことこの上ないじゃない？」

「でも、アイヴィーさんは、私の名前を褒めてくれたわ！」

だが、ジュリアの表情は曇らない。

「そうかしら？ 本当にアイヴィーさんが本心で言っていると思ってるの？ あまりにも哀れで可哀想だから施し程度に言っただけなんじゃない？ それを真に受けるだなんておめでたい頭ね！」

「え……」

それは、どの刃物より良く切れた。頭の中が真っ白になる。ジュリアはローズマリーを傷つけて満足そうに笑った。

「じゃあ、頑張ってたね？ 枯れたローズマリーさん？」

ジュリアはホールからゆっくりと出て行った。ジュリアが出て行ったのを見計らって、ローズマリーはその場にしゃがみこむ。

シヨックで暫くは動けそうになかった。

第三十話 守護連盟のお荷物

「女の喧嘩って怖あつ！」

それまで黙っていたラピが、身震いしたような声を出していた。ローズマリーはそれ所ではない。一縷の光だったアイヴィーの褒め言葉まで否定されてショックでしゃがんだまま動けない。

「ローズマリーさん？」

ラピがやっと気付いたらしく、ローズマリーに声をかけている。

「おーい、ウィザー・ローズマリーさん？」

ラピにまで苗字と名前を逆に呼ばれて、ローズマリーは泣きたくなっていた。

「枯れたローズマリーさん？ かっれたたっ、ろ〜ずまり〜さん」

お茶らけたラピがローズマリーの名前で手拍子しながら歌っている。これには、ローズマリーはぶち切れた。立ち上がって、ラピの襟首を掴んだ。

「うるさいわね！ ショックで落ち込んだのに、慰めるとか、優しい言葉をかけるとか出来ないの！？」

ラピの襟首を掴んで揺すると、ラピが目を白黒させる。

「お、おー。でも、ジュリアさんにあれだけ言われた後に、慰めても効かないと思うんだけど？」

「はあ！？ それでも、擦り傷に塩を塗るように名前を呼ぶよりマシよ！ 俺だけは、ローズマリーの名前が可愛いって思うよ。ぐらい言ったらどうなのよ！」

ラピはそっとローズマリーの手を襟首から離させた。そしてにっこりと笑う。

「一人で言ってて空しくない？」

ラピにまで突き放されて、諦めの境地に達した。ここまで達すると、人は悟りを開くらしい。

ローズマリーは天から一筋の光が差し込むのを見たような気がした――実際には、ここは外ではないので魔法灯の光が光っているだけだ。

ローズマリーはフツと冷笑した。

「もー良いわよ！　そうよ！　良く考えたら、味方は私だけだってことが、よく分かった！　私の名前は良く考えたら可愛いわよ！　ローズマリーって花だけじゃないし！　枯れたって、香辛料として使えるし！　香辛料としてだって爽やかな香りで素敵だし！　なにより、海の雫って意味が神秘的よね！」

ここまで自分でほめ倒すと気持ちが悪くなる。すると、ラピも感心したのか拍手する。

「それでこそ、ローズマリーさんだ！　ローズマリーさん、素敵！　イカス！」

ラピはローズマリーを煽って口笛まで吹いた。一応、ラピも慰めてくれているのだろうか。ローズマリーの気分が回復した。

「取って付けたように言うのはよしてよ、ラピ。さあ、帰って特訓するわよ！　でも、魔法ってどこで特訓すればいいのかしら」

「枯れたローズマリー！」

気を取り直したところに、名前と苗字を逆に呼ばれてローズマリーは「何よ！」と、怒った。振り向くと、エメラルドが突っ立っていた。

「やあ！」

エメラルドが顔を上げて、下にラピとローズマリーを見る。魔法灯の光でエメラルドの緑の目がきらりと光った。

「エメラルド、苗字と名前を逆に呼ぶのよしてくれない？」

「ややこしいのが来たと、ローズマリーは内心呻いた。

「あれ？　立ち直ったんじゃないか？　それにしても、さつきは派手な喧嘩してたな！」

まさか見られていたとは。ローズマリーが周りを見ると、幾人かが、ローズマリーの方をちらちらと見ていた。だが、それは、満足

したのか、ホールから次第に出て行っている。

ローズマリーは思い出して、仏頂面になった。そして、手を腰にやる。

「私が悪いんじゃないわよ！ あれは、向こうから喧嘩を売ってきたのよ！」

「どうでも良いけど、例の質問の答えは調べてくれたかい？」

ローズマリーはぎくりとした。ラピの方を振り向くと、ラピがじつと、ローズマリーを見返す。珍しく、ラピのウサギのような純真な目を見てしまい、ローズマリーは言葉に詰まった。

「えっ、あー、まだかな……？」

しどろもどろになる。目が泳ぐ。何で、ラピに内緒でこそこそとラピのことを詮索しなければならないのか。ラピに知られたら、幻滅されるかもしれない。エメラルドは嘆息した。

「なんだ、頼りにならないな！ 何か分かったら早く知らせてくれよ！」

「う、うん」

何故、懇願されているのにエメラルドが上から目線なのだろう。

それだけが、疑問だ。エメラルドは言うだけ言って、ホールから出て行こうとする。

ローズマリーはラピの手を引いて、エメラルドの傍に駆け寄った。

「ちょっと待って、エメラルド！」

「何だよ？」

「魔法を特訓するところってどこでやるのか分かる？」

「ああ、確かコロシウムが守護連盟の本部の傍にあるからそこで訓練しているみたいだけど……」

エメラルドがニヤリと笑って、ラピの方を振り向いた。

「ラピも魔法の練習するんだろう？」

「えっ？ 別に——」

ラピはその気はないようだが、エメラルドはラピの手をガシッと掴んだ。そして、ローズマリーの手も。

「仕方ないな、僕がテレポーターションするからそこまでの感覚を覚えてくれ！」

ローズマリーが、アツと声を出そうとした時には、景色が移り変わっていた。どうやら、コロシウムの中のような。コロシアムの壁は石でできている。屋根はなく、太陽が燦燦と降り注いで暑い。コロシアムの地面は芝生で覆われていた。その中で、魔法使い達が訓練していた。水撃波や炎の玉を繰り出して戦っている。これが、古代魔法なのだろう。

「よし、特訓しましょう！」

ローズマリーが魔法書を開く。エメラルドも古代魔法は知らないらしい。彼も持って来た魔法書を開く。ラピは芝生の上に寝転がって、昼寝をしようとしている。

「うあ、字ばかりだね。これを覚えるの？」

「すごく難しそうだ」

ローズマリーとエメラルドは唸った。魔法書には字が隅から隅までびっしりだった。しかも、小難しく書いているためよく分からない。

一瞬でやる気が、そがれてしまった。

「分かったか！　これが、魔法の基礎だ！　よく覚えるように！」
そこに、魔法を指導している男が通りすぎる。手にはレベル・ブレスレットをしている。

「あそこに居る先生らしい人に教えてもらった方が良いかも」

ローズマリーとエメラルドはニヤツと笑った。そして、エメラルドと一緒に先生らしき人の方へ駆けて行く。

「すみません！　僕達にも古代魔法を教えていただけないでしょうか！」

エメラルドが笑顔で尋ねる。教師らしい人はローズマリーとエメラルドの腕輪を見て、笑った。

「見たまえ、諸君。彼たちがマルディクション・ブレスレットだけに頼っている能無しだ。魔法の基礎すら知らない出来損ない。今や、

守護連盟のお荷物だよ」

男は大声で説明して、失笑した。

「なっ!?!」

途端に生徒達からも嘲笑がローズマリーたちに向けられた。

第三十一話 偶然

「私だって好きでここに居るんじゃないわよ！」

ローズマリーは我慢できずに叫んでいた。

「では、出て行きたまえ」

魔法の教師が顎をしゃくってコロシアムの出口を示した。ローズマリーは益々イライラする。

「いいえ、出て行きません！ もう良いです！ 魔法だって自分で覚えるので構いません！」

途端に笑い声に包まれる。

「自分でだって」

「出来るわけないわ」

後ろでエメラルドが肩を叩いた。

「ローズマ——」

「出来ます！ やれるわよ！ 行こう、エメラルド！」

はらわたが煮えくり返る。ローズマリーは荒く息を吐きながらエメラルドの手を引っ張ってラピの居るところまで帰ってきた。エメラルドが失望したように天を仰いだ。

「ねえ、ローズマリー！ なんで君はあんなに短気なんだい！ 僕がお願いした方が良かった！」

ローズマリーはエメラルドを振り返る。

「お願いしたって絶対に教えてなんてくれないわよ！」

「そうかもしれないけど」

「エメラルド、あんたはプライドが高いのだけが取り柄だって思ってたのよ。がっかりだわ」

エメラルドは目をしばたいた。すぐに、エメラルドは面白そうに口角の片端を上げる。

「フン。まあ、この僕なら、あんな奴に指導をされなくても、自分で魔法ぐらい使えるようになるけどね」

ローズマリーはいつもどおりのエメラルドに安心してニヤリと笑った。

「私だってやれるわよ。いいわ、どちらが先に出来るか競争しましょうよ」

「ああ、良いよ。どうせ、僕の方が早いに決まってるけどね」

ローズマリーがラピを振り返った。

「ラピもやろうよ」

ラピはあくびをする。寝ぼけ眼で二人を見ている。

「俺は良いや。どうせ、魔法は使わないし」

「じゃあ、二人で競争だ」

「ええ！」

ローズマリーは本を開いた。

「一番簡単な火炎球の魔法から……」

ローズマリーは魔法書を読み込んだ。何回も手振りを確認してぶつぶつと呟く。コホンと咳払いした。手を構えて叫ぶ。

「ローズマリー・ウィザーが命じる！ 聖なる火球よ邪を滅せよ！
火炎球！」

辺りは水を差したように静まり返った。だが、それは一瞬だけのことだ。すぐに、笑い声がそれを破った。

「やっぱり、出来ないんじゃない」

「それにしても、あの子の名前つてすごく変よ！」

ローズマリーは気にせず、同じ呪文を声高らかに叫ぶ。エメラルドも形にならない呪文を叫ぶ。次第に、ギャラリーは飽きてきたのか居なくなる。日も段々と暮れてきた。

「ローズマリー・ウィザーが命じる！ 聖なる火球よ邪を滅せよ！
火炎球！」

だが、何回やっても手のひらから炎の玉は出ない。ローズマリーは意気消沈して、その場にへたり込んだ。

「駄目、全然……」

「なんだ、ローズマリー諦めるのかい！」

エメラルドも同じ呪文を唱えているが形になってない。ローズマリーは空しくなって嘆息した。だが、諦めるのは悔しい。

「やるわよ！」

よろよろとローズマリーは立ち上がった。空腹になって力もあまり出ない。

「ローズマリーさん、そろそろ、ご飯食べに行こうぜ」

ラピが立ち上がった。だが、ローズマリーは構わず、呪文の型を取る。

「ローズマリー・ウィザーが命じる！ 聖なる火球よ邪を滅せよ！」

「ロー・ズ・マ・リー・さ・ん」

ラピがローズマリーの耳元でフツと息を吹きかけた。

「火にゃ！？」

ローズマリーの声は火炎球と言おうとしたのと悲鳴が混じって変な音になった。ローズマリーはラピを怒ろうと思った。

だがそれより早く手のひらから火炎が生まれて向こうの方に飛んでいった。

「！？」

ローズマリーもエメラルドも絶句して、その場に立ちすくんだ。

「おー、ローズマリーさん、出来たじゃん！」

「や、やった！」

「ローズマリー、どうやったんだい！？」

エメラルドが嬉しそうな表情で駆けて来た。

「わ、分かんない！ ラピに邪魔されて偶然出来たの！」

「ラピに？」

エメラルドは考え込んだ。そして、ラピを見て明らかに愛想笑いと言わんばかりの笑みを浮かべた。

「じゃ、じゃあ、ラピ！ 僕の邪魔をしてくれないか！？」

「良いぜ〜！」

「じゃあ、僕が呪文を唱えるからその後で！」

「おっけー」

「グリーン・エメラルドが命じる！ 聖なる火球よ――」

「こちよこちよこちよ！」

ラピは思い切りエメラルドの腹を後ろからくすぐった。

「だあっはっはっは！ って何をするんだ君は！」

エメラルドは思い切りラピを振り払った。そして、服を正して、嘆息する。

「失敗のようね！ 本当に偶然みたいだわ」

「だなー。それより、メシ食べに行こうぜ」

「そうねー！ じゃあね、エメラルド」

ローズマリーとラピはテレポーションして去っていった。エメラルドはラピとローズマリーが消えた方をじっと見て考え込んでいた。

第三十二話 無茶苦茶な任務

翌日のことだ。ローズマリーとラピが神々の館に並んで仕事をフロウから貰った時だった。後ろから、誰かがローズマリーの書類を覗いていた。振り返ると、そこにはジュリアが居た。

「な、何！？」

ローズマリーが面食らっていると、ジュリアがローズマリーの書類を取り上げる。

「ちよつと待ってください！」

「何するのよ！」

ローズマリーが怒ると、ジュリアはキツと眉を上げた。

「何するのよはこっちの台詞よ！」

ジュリアが書類を振りながらフロウに詰め寄る。

「どうして、私たちレベル・ブレスレット使いがこんな難しい任務でこのマルディクション・ブレスレット使いの人がこんな簡単な任務なの！？」

その声が聞こえていたらしく、辺りは沸騰するように怒りが渦巻いた。

「冗談じゃないぜ！」

「やってられないわよ！」

急に列が崩れて、みんなは先頭にいるフロウとアイヴィーの元に向かつて詰め掛けた。

「皆の者、落ち着くのだ」

フロウが魔法使い達を慌てて宥めている。

「ジュリアさん、マルディクション・ブレスレット使いの方はまだちゃんとした魔法が使えません。仕方ないのです」

アイヴィーがジュリアを押さえようとしている。ジュリアはしたり顔で笑う。

「そう、役立たずってことね！　じゃあ、報酬も差をつけてもらわ

ないと！ 私たちが出来損ないをフォローするんですからね！」

アイヴィーはちらりとローズマリーを見る。ローズマリーは怒りが爆発しそうになっている。

「そうですね。分かりました」

アイヴィーが先に答える。ローズマリーが「待ってください」と言い募ろうとした。だが誰かの手がローズマリーの口をふさいだ。

「ふぐっ！？」

だれっ！？ と言おうとして、振り向く。するとラピが呆れ顔でローズマリーの口をふさいでいた。

「ローズマリーさん、また、短気爆発させちゃだめだろ。ジュリアさんが行く任務をするって言いたいんだろうけど、俺たちじゃ到底無理なんだからな」

「ふぐー……」

ローズマリーの短気はラピに、たしなめられて、萎んでいった。

「待ってください！ ジュリアさんの任務は代わりに僕が行きます！」

ざわりと周りが戸惑ったようにどよめいた。それは、エメラルドだった。

「貴方に出来るのかしら？ 難しい任務よ？」

エメラルドはジュリアの手からジュリアの書類を奪い取った。

「出来ますよ！ 僕にお任せください！」

ラピはローズマリーから手を放した。ローズマリーとラピは思わず顔を見合わせる。

「もしかして、エメラルド、魔法が使えるようになったのかしら……」

「さあ？」

ローズマリーとラピは首をかしげた。エメラルドは自信満々でふんぞり返った。

「まあ、僕はまだ魔法が使えませんから、ローズマリーとラピを連れて行きますので了解をください！」

さらりと、エメラルドは重大なことを言った。ローズマリーは目を見開いた。

「はぁ！？ エメラルド、魔法が使えないの！？ 大口叩くからてつきり……」

「だから、ローズマリーとラピを連れて行くんじゃないか」

エメラルドは「分かってないねえ」と肩をすくめて見せた。ラピは「はぁ」と疲れたようにため息を付いた。

「アイヴィー何とかしてくれよ。俺たちじゃ無理だよ」

ラピがアイヴィーに縋ると、アイヴィーはラピへと楽しそうな笑みを向けた。

「そうでもないんじゃないですかね？」

「アイヴィー！？」

ラピがまさかという顔をしている。エメラルドも頷く。

「そうそう、なんてったって、ローズマリーは一回魔法が成功したことだし！」

ざわりと周りがどよめいた。ローズマリーは、エメラルドの言葉に驚いて、否定するように手を振った。

「あ、あんなの、まぐれじゃない！」

「まぐれでもすごいですよ」

アイヴィーはにっこり笑っている。アイヴィーの笑顔がキラキラと輝いている気がした。

「アイヴィーさん……」

ドキンと胸がときめく。

「安心しました。では、ラピとエメラルド、ローズマリーさんは、ジュリアさんの任務を代わりに行って下さいね」

にこにこにこつ。

「え？」

ローズマリーは固まった。それとこれとは話は別だ。

「ああ、そうそう、ダークマイン드의化身と悪い魔法使いが村を占拠しているそうだから綺麗さっぱりやつつけてください」

にここにこにつ。

「ではよろしく願いします」
にこつ。

「うえ……」

ラピが呻いた。ローズマリーも恐ろしげにアイヴィーを見る。アイヴィーの笑みが悪魔の笑みに思えてきたのだ。

ダークマインドだけでなく、悪い魔法使いまで居るとは、とても難しそうな任務ではないか。それをこの三人がやるだなんてどう考えても無理だろう。

ローズマリーは書類を手にラピに小声で話しかけた。

「アイヴィーさん、私に復讐するって本気なんじゃ……」

ラピが乾いた笑いを浮かべた。

「ついでに、俺にも、とばかりつてわけか……」

二人して気分が悪そうにしていると、後ろからエメラルドが、水のタンクを二つ手に戻ってきた。エメラルドの書類を持った手がラピとローズマリーの肩へ回る。

「なんだい、二人とも暗いなー！ さあ、今からミュウミュウ村にしゅっぱーつ！」

「ええっ！？」

「ちよつと待——」

ローズマリーとラピの声もエメラルドの明るい笑い声に消された。そして、問答無用でエメラルドにミュウミュウ村へとテレポーテーションされたのだった。

第三十三話 緊急事態

「ここがミュウミュウ村……」

やけに、この村は日が降り注いで暑い。ローズマリーは手で日差しを避けて、辺りを見回した。集落がぼつぼつとある。緑は殆どない。畑には作物が枯れたような後があるだけだ。用水路には水はなく、川や池は干からびて枯れてしまったのか、ひび割れた、くぼみしか、そこにはなかった。

「もしかして、酷い状況の村があるって言ってたけどミュウミュウ村のことじゃないのか？」

ラピが辺りを見回しながら言った。エメラルドも頷く。

「そうかもしれない」

「ねえ、村の人たちが危ないんじゃないの？ 早く、水を持って行ってあげないと……」

ローズマリーが水のタンクを一つ重そうに両手にぶら下げた。ラピも水のタンクを片手に持つ。

「でも、悪い魔法使いに占拠されているって言ってなかったかい」
先を急ごうとしている二人にエメラルドが追いかけてきて、そう言った。

ふわりと、ローズマリーとラピの頭上に陰がかかる。ローズマリーとラピはさりげなく見上げて驚いた。

「ひ、人が飛んでる！？」

宙に浮いているのは、一人の男だった。男はにやりと笑った。

「初めまして、私はサウザンドと申します」

「はあ、ご丁寧にどうも……私たちは守護連盟のものです」

ローズマリーは暢気に頭を下げた。ラピとエメラルドが「ローズマリー！」と突っ込んだ。

「何よ！」

「ローズマリーさん！ こいつが村を占拠している悪い魔法使いじ

やないのか!？」

「えっ!？」

ローズマリーは我に返って青ざめた。

「そのとおりです」

悪い魔法使いサウザンドはにやりと笑う。

いきなりエメラルドに連れてこられたため、心の切り替えが出来てなかった。緊張感が途端に戻ってきた。

「逃げよう!」

ラピとローズマリー、エメラルドは方向転換をした。そして、水の入ったタンクを捨てて、逃げようとする。

「待て!」

声が聞こえたかと思うと、村人らしき人が次々と物陰から出てきた。

「皆さんも早く逃げてください! 悪い魔法使いが——!」

ラピが声を張り上げた。

「……お前達は守護連盟のものだな?」

村人が仏頂面でそう尋ねた。ローズマリーは逃げながら村人へと声を張り上げる。

「そうです、早く!」

すると、村人は逃げようとしているローズマリーたちの退路を塞いだ。

「待って、様子が変だ!」と、エメラルド。

「もしかして、村の人たちって、サウザンドとグルだとかいう——」
ラピが引きつったように苦笑する。ローズマリーは青ざめた。

「ああ、そのとおりだ! 捕まえろっ!」

逃げようにも囲まれてしまった。ローズマリーとラピ、エメラルドはテレポーテーションしようと試みた。だが、力が発動しない。サウザンドがニヤリと笑っている。

「きゃあああ!」

「うわああ!」

あつという間に捕まえられてしまった。縄でぐるぐる巻きにされる。

三人は歩かされて、納屋まで連れてこられた。そして、乱暴に投げられてしまい、ローズマリーたちは強かに地面に体を擦り付けてしまった。

「何するのよ！ 私たちは貴方達を助けに来たのよ！」

ローズマリーが声を張り上げると、村人が怒った。

「助けに来ただと！？」

「忌々しい、守護連盟が！ お前達が来るのが遅いせいで、俺の母親は死んだ！」

「私の父さんもよ！」

「俺の娘もだ！」

口々に死んだものの名前を挙げていく。ローズマリーは申し訳なく思い、頭を下げた。

「ごめんなさい！ 許してください！」

ローズマリーが縛られたまま頭を下げる。ラピもエメラルドまでも頭を下げる。

「謝ったって死んだものは帰ってこないんだよ！」

村人の男が吐き捨てるように言った。

「それなら、死を持って償うべきでしょう」

サウザンドが村人の間から進み出た。村人は口々に「サウザンドさま」とすがっている。

カランと、サウザンドは何かを投げた。それは、納屋の隙間から漏れた光で、照らし出された。——ナイフだ。

村人は青ざめて口をつぐんだ。

「さあ、皆さん、この守護連盟を串刺しにしてください。仇を取るのです！」

サウザンドが両手を開いて高らかに命令した。

恐怖で涙が勝手にぼろぼろと零れる。このままでは、ローズマリーだけではなく、ラピもエメラルドも殺されてしまう。ローズマリ

「は震える口を開いた。

「待ってください！ 二人だけは助けてください！ 私に出来ることなら何でもしますから！」

「ローズマリー！？」

「やめる、ローズマリーさん！」

エメラルドもラピも驚いている。

「その言葉に二言はないな？」

「はい！ 二人を助けてくれるなら！」

「じゃあローズマリーお前は来い！ 男たちの慰み者にしてやる！」
「！！！」

ローズマリーは恐怖で皮膚があわ立つた。言葉も出ない。ローズマリーは村人に引っ張られて納屋の外に引っ張り出された。

「ローズマリーさん！」

ラピの声だけがローズマリーを追ってきた。だが、納屋の戸は閉められ、鍵をかけられてしまった。

第三十四話 ミュウミュウ村の崖

「きゃあ！」

ローズマリーは地面に強かに体をぶつけた。男たちが上から見下ろしている。ローズマリーは逃げようとした。だが、上から男が覆いかぶさってくる。荒い息遣いと下卑た笑いにローズマリーは恐怖した。

「自分から言い出したことなんだから、覚悟するんだな！」

男はローズマリーの服を脱がそうとする。

「お待ちなさい」

向こうにいたサウザンドが制止をかけて、ゆっくり歩いてきた。村の男たちは戸惑ったように振り向いた。

「な、なんですか、サウザンドさま？ これから、いいところで……」

「——その女、マルディクシオン・プレスレットをしている」

「？ それが、なんですか？」

「魔女だ」

「魔女？」

「伝説にはこうある。魔女をミュウミュウ村の崖から捧げれば、雨がまた地上に降るだろうと」

サウザンドが神の予言をするように両手を上げて高らかに言った。村の人々はそれを聞いて明らかに喜んでいる。

「そ、それは良い！」

「早速試してみよう！ この女を崖へ連れて行こう！」

『おおっ！』という一連結託した声が辺りに木霊した。

ローズマリーは恐怖からひとまず開放されて安堵していた。

「それには及びません。ミュウミュウ村の崖はここから険しい道のりだ。私が担いで飛んで行ったほうが遥かに簡単に早く実践できる」
サウザンドは、そう言いながら、ローズマリーを肩に担ぎ上げた。

ローズマリーは瞬きをして、

「つ、つまり、私を崖から突き落とすそうということ……？」

恐る恐る尋ねた。後ろ向きに担がれているので、サウザンドの表情はここからは見えないが、笑ったような気配がした。

「そのとおりだ。思いつきり恐怖させて崖から落としてやる」

サウザンドはボソリと呟いて空に舞い上がる。

「い……いやあああああああ！」

ローズマリーの悲鳴が辺りに木霊した。

その頃、納屋ではラピとエメラルドの二人がローズマリーの悲鳴を聞いて、真っ青になっていた。二人は納屋の柱に縛られている。

「ローズマリーさん……！」

ラピが縄抜けをしようとするが、しっかり縛られているため、それも敵わない。

「くそつ、俺たちを助けるため、ローズマリーさんが！」

ラピは涙を浮かべて震えている。エメラルドは真っ青になっていたが、誤魔化すように笑った。

「ま、まだ、そうと決まったわけじゃないだろ」

ラピがキツとエメラルドの方を振り向く。

「でも、男たちの慰み者って、あんなことや、そんなことだろ！？

あああ！ こ、こんなことになるなら——」

「ら、ラピ……」

エメラルドは責任を感じていた。やはり実力がないのにミュウミユウ村に来るべきではなかったのか。

ラピは真剣な顔をして、

「ローズマリーさんが元気なうちに乳でも揉んでおくんだ……！」

真顔でそうのたまった。エメラルドは今までのシリアスな空気が砕けたような気がして、嘆息した。

「ラピ、今の言葉ローズマリーが聞いていたら、ラピは確実に張り

倒されてるぞ」

ラピは涙で濡れた目を開けた。キツと空を睨んでひとりごちた。
「こうなったら、魔法を使うしか――」

エメラルドは驚いてラピを見る。

「今、なんて言った？ ラピは魔法が使えないんじゃないなかったのかい？」

ラピが深呼吸する。

だが、鍵の開ける音が響いて、ラピとエメラルドは納屋の戸を見た。

納屋の戸が開いて太陽の光が差し込んだ。

ラピとエメラルドは、まぶしくて目を細める。

誰か知らないが、中に一人入ってくる。目が慣れると、それが、四十代後半の女であることを知った。

「助けてあげる！」

女は急いでラピとエメラルドの縄を解いた。

「ローズマリーさんは！？」

「あの子は何もされなかったよ。安心おし」

「よ、良かった」

「それが良くないんだよ」

女はサウザンドがミュウミュウ村の崖までローズマリーを連れて行ったことを説明した。そして、雨を降らせるためにローズマリーをそこから突き落とすのだと。

「早く行って、サウザンドを倒そう！」

エメラルドの言葉にラピも頷く。走り出そうとするラピを女は止めた。ラピの手をしっかりと握っている。

「待っておくれ、サウザンドは私の息子なんだ」

「えっ？」

「本当はアダムって名前なんだけど、どうしてもか、人が変わったみたいになっちゃって、今はサウザンドと名乗っているし、魔法まで使えるし」

「サウザンドをやつつけるなとそう仰いたんですか？」と、ラピ。
「いいえ、私は元のアダムに戻して欲しいんだよ！ 元の元気なあ
の子に戻して欲しいんだ！ お願いします、守護連盟さま」

女はラピとエメラルドを神のように拝んでいる。ラピとエメラル
ドは戸惑った。サウザンドを倒さないことにはローズマリーは助け
られないような気がした。だが――。

「分かりました！ アダムさんもローズマリーさんも助けて見せま
す！ 行こう、エメラルド！」

「ああ！」

ラピとエメラルドは、村人の隙を見て、ミュウミュウ村の崖まで
走り出した。

第三十五話 切れたラビ

「きゃあああああああああ！」

ローズマリーは先ほどから悲鳴を上げどうしだった。サウザンドはミュウミュウ村の崖のその上空に居る。

「大回転！」

「きゃあああああああああ！」

サウザンドは上空に飛び上がったままローズマリーを抱えて上下にくるくると二、三度回転した。そして、今度は、ローズマリーを縛っている縄の端を片手にぶら下げた。

「ほーら、ぐるぐる！」

「いやあああああああああ！」

サウザンドは円を書くように縄をぐるぐると回す。ローズマリーは怖くて悲鳴を上げる。

「何すんのよ！ 何すんのよ！ 何すんのよーっ！」

ローズマリーが涙目で怒鳴って、足をばたつかせると、サウザンドがにやりと笑った。

「お前の怒気は、実に気持ちが良いな」

「そんなことで褒められても嬉しくないわよ！ 大体、私をここに連れてくる意味ってあるの！？」

「ほう？ 気付いていたか」

サウザンドは面白そうに一笑した。

「書類には悪い魔法使いがダークマインドと結託して村を占拠しているっていうじゃない！ そんで、そのダークマインドは雨雲を全て取り込んでいるって聞いたわ！ つまり、私がミュウミュウ村の崖から突き落とされたって雨なんか降らないはずよ！」

「馬鹿ではないらしいな」

「馬鹿ではないって何よ！ 他にも何かあるみたいじゃないのよ！」

「ちなみに、守護連盟に手紙を出したのは私だからな」

「は、はあ！？ どうしてよ？」

「守護連盟から来た魔法使い達をいたぶって、恐怖のどん底に陥れて、ダークマインドさまを喜ばせてから、殺してやろうと思っただんでな」

「それで、まんまと私たちがやってきたわけね。それで、村人も怒るし、私たちは恐怖するし、ダークマインドには好都合ってわけ！ ム力つくわ！」

「まあ、そういうことだな」

丁度、サウザンドの右腕に腕輪が見えた。別段不思議とも思わないが、サウザンドはこの腕輪のお陰で魔法が使えているのだらう。サウザンドは崖の途中まで降りてきた。このまま、降ろしてくれるのだらうかと、淡い期待を抱いたが、サウザンドは途中に生えている木にローズマリーの縄の端を括り付けた。足の下に崖下の木々が小さく見えている。

「……！」

宙吊りで怖いことこの上ない。縄がぎりぎり張り詰めた音を立てている。ローズマリーは顔を上げて、サウザンドを見る。

「でも、どうして、私をあんな嘘で助けてくれたの？」

「あれは、お前は恐怖するだらうが、男たちは喜ぶのでダークマインドさまはお喜びにならない。それよりは、私が短気なお前を拷問する方が数倍お喜びになられる。後は、お前をじっくり、いたぶってやる」

ローズマリーの目をひたりと凝視する。すると、辺りの景色が様変わりした。ローズマリーの家族が居る。仲の良い村人も笑っている。ラピもエメラルドも居る。そしてアイヴィーも。

「みんな……」

『ほう、これらがお前の大切なものか』

サウザンドの声がゾツと頭の中で響いた。途端に、ローズマリーの家族たちの死んでいくビジョンが展開される。心臓を突き刺され、手をもがれ、目玉をくりぬかれ。それは、残酷に冷徹に惨く……。

「やめて！　お願い、やめて！」

ラピもエメラルドもアイヴィーも無残に殺されていく。ローズマリーは過呼吸になって息が苦しくなった。すぐさま、そこから逃げ出そうとした。だが、両足を誰かに掴まれる。

『ローズマリーさん、たすけ、て』

それは、ラピだった。ラピは血みどろで、目を開けたまま絶命した。

「いやあああああああああ！」

ローズマリーは悲鳴を上げた。

ラピとエメラルドはミュウミュウ村の崖に向かって走っていた。

「どうして、テレポーションが出来ないんだろう！？」エメラルドがぼやいた。

「守護連盟が帰って来れないようにしているんだろ。ちゃんと任務遂行するようにってことさ」

「それにしたって、ローズマリーがピンチなのに——」

ラピは嘆息した。最後に見たアイヴィーの笑みはラピを試しているようだった。それだけ、アイヴィーはラピに信頼を持っているということだろう。

キーンと耳鳴りになってラピの元に異変が伝わる。

——ラピ、助けて——

「ローズマリーさん！」

ラピは思わず立ち止まる。

「どうしたんだい、ラピ！　急がないと——！？」

エメラルドが振り返って絶句した。ラピには異変が起きていた。
『チュリチュカ！』

ラピの頭の中で、チュリチュカの異変を感じ取ったベベルディロが確かに叫んでいた。途端にラピの髪の毛がふわっと逆立つ。ラピの目がきらきらと宝石のように光る。

（来たっ！）

ラピはエメラルドの腕を掴んだ。

「行くぞ、エメラルド！」

「行くつてどこへ!？」

その疑問はすぐに体と一緒に掻き消えた。

「うわっ!？」

次の瞬間、エメラルドとラピは森の中に居た。エメラルドは尻餅をついたまま呆けた。

「なんでテレポーション出来たんだ……?」

それは、ラピの魔法力が守護連盟の制御している力を超えたからに過ぎない。

そのことをエメラルドは後に知るのである。

ラピはエメラルドを残してテレポーションする。そして、ローズマリーとサウザンドの居る崖の途中に出た。崖の途中に突き出ている木がある。そこに誰か吊り下げられている。

近くまで飛ぶと、ラピの目にローズマリーがぐったりして木に縄でぶら下げられているのが目に飛び込んできた。

ローズマリーの服がボロボロに切られている。

胸元には吸い付いたような跡が付いている。

途端に、ラピの脳が揺さぶられたような衝撃が走る。

「サウザンド! 貴様——っっっ!」

ラピはぶち切れて叫んでいた。

第三十六話 接戦

ラピはサウザンドに向かって複数の火炎の弾を飛ばして攻撃する。サウザンドが、避けると、弾はローズマリーがぶら下げられている縄に当たった。ロープはすぐに切れてしまう。ラピはテレポーターションしてローズマリーの体を掬い上げた。そして、そのまま、エメラルドいる森の中にテレポーターションする。

ラピがローズマリーを地面に横たえたまま揺する。それを見たエメラルドも駆け寄ってきた。

「ローズマリーさん！　ローズマリー！」

ラピが呼びかけると、ローズマリーはハッと我に返る。震える口をパクパクさせていたが、「ラピ！　良かった、無事だったんだ」と今度は、はつきりと、声に出してラピに抱きついた。ラピは安堵したように息を吐き出した。

「ローズマリーさん、戦える？」

労わるような笑顔を灯してラピはローズマリーに尋ねた。エメラルドが辺りを気にしながら割って入る。

「ラピ、無茶を言うなよ！　ローズマリーがこんな状態で戦えるはずが——」

「エメラルドらしくないな。ここは戦場だ。甘えは通用しない」

ラピらしからぬ厳しい声にエメラルドは我に返り、口をつぐんだ。ローズマリーはラピから離れて立ち上がる。

「待って、戦えるわ！」

ローズマリーを見て、ラピが頷く。エメラルドは頭を掻き毟った。「戦うって言ったって、どうするんだよ！　サウザンドは元はアダムっていう男で操られているだけだよ！」

フツと気配が背後に生まれる。

「その通りですよ。私は、よみがえる時にこの男の意識を乗っ取った」

「サウザンド！」

ラピたちの声が交差した。サウザンドは肩をすくめて見せる。手にはナイフを持っている。

「だから、私を攻撃できないでしょう？ 私を殺せば、アダムを殺すことになる。そうなれば、村人達はさぞ怒ることでしょうね」

ラピはじつとサウザンドを睨んでいる。

「……ローズマリーさん、書類をよく見て、考えてくれ」
「書類って」

ローズマリーはポケットから案件の用紙を取り出した。ラピは頷く。

「後は任せた！」

ラピが身振り手振りを加えて声を張り上げる。

「ベベルデイロ・デイラ・ストーンが命じる！ 切り裂くは鋼の翼！ 翼斬風！」

鋭い風がサウザンドの肌を傷つけた。サウザンドの皮膚に切り傷が無数に出来る。

「なっ！？」

ローズマリーとエメラルドは絶句した。ラピが腕輪の名前で魔法を使っているからだ。

「サウザンド、こっちだ！」

ラピはテレポーターションして遙か上空に浮かび上がる。

「いいでしょう！ その挑戦受けてたっ！」

サウザンドはナイフを木に刺す。そして、テレポーターションして、ラピの所に飛んだ。

「ベベルデイロ？ ベベルデイロってラピの本名？」

「——それは違う気がする。それより、ラピの言っていた書類だ！」
ローズマリーは書類を慌てて広げた。

「書類には『悪い魔法使いとダークマインドが村を占拠している』とだけしか書かれてないわよ！」

「待ってくれ？ サウザンドはアダムの体に乗っ取ったって言うて

ただろ？　じゃあ、元のサウザンドはどこに居たんだ？」

「もしかして、腕輪じゃないかしら？　サウザンドは腕輪をしていたから！　アイヴィーさんのように体に乗っ取られたのかも！」

「それだ！　ということは、腕輪を渡したのはダークマインドじゃないかと推測されるな。ダークマインドが小さな子供になっていたとき腕輪を無数にしていたからな」

「ダークマインドを見つけ出して、倒せ言うことなのかも！」

「倒せば、サウザンドも消えてもとのアダムに戻るかもしれない！」

エメラルドとローズマリーは笑みを浮かべて頷いた。ローズマリーは書類を畳んでポケットにしまう。

拍手がどこから聞こえた。

「何？」

ローズマリーとエメラルドが音の方を見やると、小さな少女が木の枝に座って拍手をしていた。手には無数の腕輪がある。

「ダークマインドだ！　僕は一回見たことがあるんだ！」

「なんですって！？」

「その通り、あたしはダークマインドの化身。貴方の推理もあつてゐるわ。果たしてあたしを倒せるかしら？」

「ローズマリー・ウィザーが命じる！　聖なる火球よ邪を滅せよ！　火炎球！」

「エメラルド・グリーンが命じる！　聖なる火球よ邪を滅せよ！　火炎球！」

ローズマリーとエメラルドはほぼ同時に呪文を唱えた。だが、何かが起こる気配はない。

ダークマインドは笑った。

「そんなことで、あたしを倒せる？」

「何よ！　余裕ぶっこいてんじゃないわよ！」

ローズマリーは地団太を踏んだ。また短気が爆発したのだ。ローズマリーは辺りを見回した。そして、木に刺さっているナイフを抜いた。

「これを使ってなんとか、ダークマインドを倒せないかしら！」

「ローズマリー！ 魔法じゃないと駄目だつて！」

突然、持っていたナイフの先が震える。

「な、何！？」

ナイフは、生き物のように動いて、シュツと空を切った。

「ローズマリー！？ どうしたんだ！？」

エメラルド側から見ればローズマリーが乱心したようにしか思えないだろう。

「手が勝手に動くのよ！」

ナイフを離そうにも手が言うことを利かない。

「危ない！ 避けて！」

ローズマリーのナイフを持った手がエメラルドへと振り下ろされた。

第三十七話 追い詰められていく者たち

「うわぁ！」

エメラルドは間一髪でローズマリーの攻撃を交わした。
「避けて！」

ローズマリーは悲鳴じみた声を張り上げた。そうして、ローズマリーのナイフを持った手がエメラルドに向かって振り下ろされる。エメラルドはそれを横に避けた。だが、ローズマリーの手は意志を持ったかのように勝手にナイフで攻撃する。

「ローズマリー！ 操られてるのかい！？」

エメラルドはすばやくそれを避けていく。

「そうみたい！ —— やだ、怖い！ —— エメラルド——ちゃんと避けて！」

避けるのはいいが、エメラルドはすれすれだ。ローズマリーはマリオネットの気持ちが分かったような気がした。手足が既に自分のものではないように動いている。上から振り下ろし、左右を切り付け、更に下から切りつける。玄人のようなしつかりした攻撃が出るため、ローズマリーは恐怖に泣きそうになっていた。

「これじゃあ——ダークマインドを——攻撃することなんて——できないわよ！」

ダークマインドを倒すどころか、エメラルドが倒されてしまう。

ローズマリーは恐怖で泣きそうになっていた。

「手足が勝手に動くけど——意識がしつかりしてるのは——何でかしら！？」

意識さえなければ、恐怖すらしないのと思わざるをえない。

「そりゃ、ダークマインドがローズマリーと僕の恐怖を食べたいからだろ！」

エメラルドは笑んでみせた。

「でも、これはチャンスだ！ ローズマリー！ 冷静になれ！ 何

か策があるはずだ！」

エメラルドは攻撃されているが落ち着いている。そのため、ローズマリーの頭も少し冷やされた。

「何か策が……」

ローズマリーは攻撃しながら考えた。

「そうよ！——私をダークマインドの傍に誘導して！それで、上手くやれば——ダークマインドを刺せるかも！」

ローズマリーの手は、まだしつこくナイフを振っている。

エメラルドはちらりとダークマインドの方を探る。

「無理だ！ダークマインドは木の上だ！」

「テレポーテーション出来ないの？」

「ラピは出来るみたいだけど、僕は無理らしい！」

「そんな！」

だんだんと息が上がる。少女の姿をしたダークマインドは木の上で足をばたつかせて、楽しそうに笑っていた。

「ベベルディロ・ディラ・ストーンが命じる！交差する火炎の歯車は殺戮の調べ！炎壊弾！」

無数の炎の玉がサウザンドに向かって飛んでいく。

「そんな攻撃は効かない！サウザンドが命じる！封鎖する鉄壁！風妨害！」

サウザンドが身振り手振りを交えて、風の壁を作り出す。ラピの炎の玉は突風に煽られて、火が大きくなる。

「サウザンドが命じる！切り裂くは鋼の翼！翼斬風！」

風の刃が燃えさかる炎の玉を取り込んでラピに降り注いだ。

ラピは間一髪で、テレポーテーションした。ラピは、サウザンド

の後ろに出現したつもりだった。だが、肝心のサウザンドの姿が見えない。

（どこだ……？）

ラピは四方八方に視線を巡らせる。途端に、ガシツと後ろから両腕を掴まれてしまった。

「サウザンド！」

「君は、大変な苦勞をしてきたようだね……」

サウザンドが同情的な声を作る。だが、本当に同情しているようには到底思えない。

「君の思っていることが手に取るように分かる！ このままだと、君は魔法を再び使えなくなるだろうということもね！」

サウザンドはラピの耳元で囁く。

「だから、君にいいものを見せてあげよう」

サウザンドはテレポーションしてラピの前に現れた。勿論、ラピの両手はサウザンドに動きを封じられている。

サウザンドの目が、宝石をくるりと回したときのように、ギラリと光る。ラピはすっかり、サウザンドの目を見てしまった。

「……」

ラピは体を震わせた。ラピの脳内で映像が再生される。それは、ローズマリーがサウザンドに犯されていく様子だった。

「うわああああああああっっっ！！」

ラピは映像を振り切ってテレポーションした。そして、ラピは怒りで我を忘れ、魔法を数発サウザンドに打ち込んだのだった。

第三十八話 勝てない戦い

「な、何！？」

ローズマリーはラピの声に驚いてついラピの方を見てしまった。そのため、気がそれてしまい、操られているローズマリーの手のナイフがエメラルドの頬をかすった。エメラルドの頬に血がにじむ。ローズマリーは我に返り、涙目になった。

「ご、ごめん！」

謝っている間もローズマリーは攻撃に暇がない。

「ごめんじゃない！ 僕の美しい顔になんてことをしてくれるんだ！」

「だから——謝ってるでしょ！——ごめんってば！」

攻撃をしているので真実味がない。エメラルドは息を切らしてそれを全部避けている。エメラルドも鬱憤がたまっているらしい。

「それに、君ときたら！ 何で怪しいナイフに自ら触るんだい？ 愚の骨頂じゃないか！」

「悪かったって言うてるでしょ！——ええ、そうですとも！——私が全て悪いのよ！」

「よく分かつてるじゃないか！ 君がナイフに触らなければ、もつと策があつたはずだ！ そう思わないか？」

「そうね！——私が悪うございました！」

「大体、君は性格に難がありすぎだろ！ 短気で煩くて！ アイヴイーに振られるのもよく分かる気がするよ！ しかも、枯れたローズマリーなものな！ 残念だ！」

エメラルドはハッと笑い捨てた。

争ってはならない。怒ってはならない。

それが父母の教えだった。

それに、ここで争っては、ダークマインドの思っ壺だ。だが——。

ローズマリーの頭の中の線が完全にぶち切れた音がした。

その頃、上空では、ラピも完全に切れていた。ラピの頭の中でベルデイロが完全に怒っている。

「ベベルデイロ・デイラ・ストーンが命じる！ 鳴くカナリアは制裁の音を奏でよ！ 奏音破！」

高音の不協和音の音波がサウザンドを包む。

「サウザンドが命じる！ 一繋ぎの呪となり燃えさかる津波を起こせ！ 邪炎波！」

サウザンドは音を炎の風で包んで打ち消した。炎の津波はそのままラピに降り注ぐ。ラピはテレポーションした。

「……！」

だが、ラピが再び現れたところに炎が注いだ。ラピは炎風に焼かれる。

「っ……！」

ラピはまたテレポーションした。だが、その間にサウザンドは呪文を唱えていたらしい。ラピは風圧に飛ばされてしまった。そして、強かに崖の岩壁に体を打ちつけてしまった。ずるずると、ラピは地に落ちていく。それをテレポーションしてきたサウザンドが、ラピの首を持ってそれを止めた。

「うぐっ……！」

ラピは息が出来なくなり、意識を取り戻した。慌てて浮遊する。

そして、サウザンドを振り払って距離を置いた。

「まだ、生きていましたか」

サウザンドが冷酷に笑う。

（強い……！ これじゃあ、勝てない！）

ラピは、初めてサウザンドに恐怖した。息を切らしていると、サウザンドは身振り手振りを交えた。呪文をまた唱えるらしい。

「サウザンドが命じる！ 封じるは猛り立つ鬼！」

（俺を閉じ込める気だ！）

ラピは慌ててテレポーションした。だが――。

「煉獄！」

ラピの移動先に魔法が発動した。ラピは檻に閉じ込められてしまった。

「しまっ……！」

ラピはこれでこの呪文が終わりではない事を知っていた。

「雷撃破！」

檻全体が電撃に包まれる。

「うわああああああああああ！！！」

ラピは電撃の痛みで絶叫した。ラピの入った檻はそのまま地上に落ちていった。

第三十九話 戦いの終わり

「エメラルド！ 言いすぎよ！ 大体、あんたも悪いでしょ！？
自分に見合った任務じゃないのに、のこのことテレポーテーション
で私たちを連れてきたんだから！ あんた、どう責任とつてくれる
んでしょうね！？ それに、私はアイヴィーさんに振られたんじゃない
んだから！ 勝手なこと言わないでよ！！」

ローズマリーは息継ぎなしに早口でまくし立てて、ゼーはーと息
を吐き出した。鬱憤が全て出て、すっきり快感だ。

エメラルドは立ち止まって瞬きした。辺りは静まり返っている。

「ローズマリー……？」

「何よ！」

「攻撃が止んだんだけど……」

そういえば、ローズマリーの持っているナイフは止まったままだ。
ローズマリーも立ち止まったままエメラルドを見る。

「ほ、本当だわ……どうして……？」

ローズマリーの脳裏にラピと初めて出合ったときのことが思い起
こされた。あの時も、ローズマリーの短気にダークマインドが反応
して、攻撃が止んだ。

向こうから、引きずる音が聞こえて、ローズマリーは顔を上げた。
エメラルドもそちらの方を振り向く。

「喧嘩ですか？ いけませんねえ」

それは、サウザンドだった。ローズマリーは肝を冷やした。そし
て、サウザンドが陰から出てくる。すると、サウザンドがラピの襟
首を引っ張って無理やり引きずってきていることに気づいた。ラピ
はボロボロで傷ばかりだ。意識がないのかぐったりしている。

「ラピ！？」

ローズマリーの喉から悲鳴のような声が出た。エメラルドが身構
える。

「ど、どうする？ ローズマリー！」

ローズマリーの持っていたナイフが再び震えだした。また、滑稽に仲間同士で切りあいをしなければならないというのか。

ローズマリーは鋭くサウザンドを睨んだ。

「ラピに何をしたのよ！ 許さない！ 許さない！ 許さないんだからっ！」

ローズマリーの短気がまた爆発した。また、ナイフは大人しく静まる。

（そうよ、もしかして！）

ローズマリーは跪いて、ナイフを地面に突き刺した。それを見たサウザンドは笑う。

「どうしました？ 許さないといっておきながら、攻撃しないんですか？」

サウザンドは完全に舐めきっている。エメラルドも完璧にうろたえているが、ローズマリーは一人だけ冷静だった。

（もしかしたら……！）

ローズマリーは地面に突き刺したナイフを両手で持った。そして、声を張り上げる。

「ローズマリー・ウィザーが命じる！ 腕輪よ呼応せよ！」

それは、効き目がないはずの魔法だった。

ローズマリーの手の中で浄化の魔法が炸裂する。それは全てナイフに注がれる。

「ぎゃあああああああああ！」

ダークマインドの少女は悲鳴を上げた。やはり、このナイフはダークマインドの一部だったのだ。

「おのれ！ おのれええええ！」

サウザンドが駆けて来る。

それより早く、エメラルドがローズマリーの手に自分の両手を重ねた。

「エメラルド・グリーンが命じる！」

「ローズマリー・ウィザーが命じる！」

『腕輪よ呼応せよ!!』

二人は、自分の全ての魔力をナイフに注いだ。辺りがナイフを中心に真っ白に明滅した。ナイフは真っ白に浄化されて砂になって消えた。

「おのれ……！」

サウザンドのしている右腕の腕輪も真っ白になり砂塵になって消えた。そして、ぎらついていたサウザンドの目の光が消える。そして、サウザンドはその場に倒れた。ダークマインドの少女は骸骨のように肉が削げ落ちていく。

「おお……お……おお……おお……」

ダークマインドの少女はひゅーひゅーと言葉にならない声を絞り出している。エメラルドとローズマリーはよろよろと立ち上がった。

「はぁ……はぁ……、どうする！ あと一息だけど！」

「私は限界……目がかすんできたわ……」

「同じく……」

諦めかかったその時、影がすばやく獣のように飛んで来た。それは、ローズマリーより少し年上の女だった。民族衣装のような服を着ており、手には長い杖を持っている。

新たな敵かと思ったその時、女は長い杖で少女の姿をしたダークマインドを突いた。すると、ダークマインドは風船が破裂するがごとくパンとはじけた。そして、水蒸気が空に戻っていく。みるみるうちに空には雨雲が出来た。

「オングラグドンソワカ！ キリバラバドンソワカ！」

少女は呪文を唱えて、「破！」と、杖を空に翳した。すると、水滴が空から落ちてくる。雨だ――。段々と、雨は大地を潤していく。「貴方は……？」と、エメラルドが聞いた。女は振り向いて微笑んだ。

「私は水神、ワールドです。貴方たちのご活躍少しですが拝見させていだいておりました」

ローズマリーは我に振り返るを振り向いた。三重にぶれる視界にラピが横たわっている。

「ラピ！」

ローズマリーは、ぬかるんだ地面に足を取られながら、よろよるとラピの方まで駆けて行った。

「ラピ！」

そして、ラピを抱き起こした。ローズマリーは、かすむ目をこすった。ラピの脈を確かめる。

「え……嘘……脈がない……？」

ローズマリーは口もとに手を翳した。

「息、してない……」

エメラルドもローズマリーも顔面蒼白になった。時間が止まったような気がした。

第四十話　ローズマリーの怒り

『ベベルデイロ!』

ローズマリーの頭の中でチュリチュカが泣いている。

「僕のせいだ!　僕が無理やりこの任務にラピたちを連れてきたから!」

エメラルドも泣いている。ローズマリーはキツと目を吊り上げた。
「まだ死んだと決まったわけじゃないでしょ!」

ローズマリーはラピを仰向けに寝かせて、心臓マッサージをする。
そして、ラピに口付けて肺に息を吹き込んだ。

「ラピ!　帰ってきなさいよ!」

それでもラピの脈は静まったままだ。二、三度繰り返す。だが、反応はない。次第にローズマリーの目から涙が溢れて出てくる。雨が降り続ける。涙と雨が交じって何がなんだか分からない。

「あんと喧嘩するのがすごく楽しいのに!　こっちに帰ってこないと許さないんだから!」

涙が溢れて、力が入らない。見かねたエメラルドが割って入る。

「ローズマリー!　力ならローズマリーより僕の方が強いから、心臓マッサージを替わろう!」

「お願い!」

エメラルドが心臓を手で叩くように押す。そして、ローズマリーがラピの肺に息を吹き込む。

繰り返すこと、

一回――。

二回――。

三回――。

「かはっ!」

ラピが咳き込んだ。

「ラピ!」

「ラピ！」

ラピは激しく咳を繰り返す。次第に呼吸が穏やかになる。ラピはそのまま、静かな寝息を立て眠っているようだ。

「やった……！ エメルルド！ ラピが帰ってきた！」

「ああ、ローズマリー！ よかった！」

ローズマリーとエメルルドは手を取り合って喜び合った。

「よく頑張りましたね。傷を治してあげましょう」

ウォルドがラピの前に跪いた。

「ウォルドさま！ ラピの傷を先に治してください！」

「僕も後で構いません！」

ウォルドは満足そうに頷いた。そして、手をラピの傷に翳す。ウォルドの手からは柔らかな光が漏れ、段々とラピの傷を癒していく。「もう少し、早く来るべきでしたが、他の魔法使いのところにも行かなくてはなりませんでしたから、遅れてしまつて申し訳ない限りです」

「いえ。でも……アイヴィーさんが、他の魔法使いを寄越してくれるものと思っていたのに……」

「そうですね、今回は対応が遅かったですね」

途端にアイヴィーへの怒りがこみ上げてくるのが分かった。アイヴィーはこんなことでローズマリーに復讐をしようと思っていたのだろうか。鈍い怒りがローズマリーの感情を占める。

「ローズマリーさん……」

ラピの声がしてローズマリーは急いで視線をラピに戻した。ラピは気がついた様子だ。

「ラピ！ 大丈夫なの？」

ラピは眉を下げてローズマリーを見る。

「ローズマリーさんこそ、大丈夫じゃないだろ。サウザンドに、その……犯されたりして」

ローズマリーは瞬きした。

「はぁ？ 何言ってるの？」

「だって、服……」

ローズマリーが服を見ると、ビリビリ破けている。ボタンも飛んでしまって、ブラジャーが見えている。改まって見ると気恥ずかしい。ローズマリーは胸元を隠した。

「ああ、これは、サウザンドが何故か分からないけど破いたのよ。胸元にキスマーク付けられて、それこそ犯されるのかと思ったけど。幻術を掛けられる以外は何もされなかったわ」

「本当……？」

「本当よ、こんなことで嘘ついてどうするのよ」

「良かった……」

ラピたちは安堵して、笑いあった。

「あのお……」

声がして、振り向くと、サウザンドが突っ立っていた。

「サウザンド！？ まだ生きていたの！？」

ローズマリーがウォルドの杖を引手繰ってサウザンドを叩こうとすると、サウザンドが悲鳴を上げた。

「ちっ、違います！ 僕はアダムです！」

ローズマリーは力が抜けてその場に蹲った。

「はー、びっくりしたあ」

「俺もびびった」

「僕は違うと思っていたけどね」

ラピたちは力が抜けたように笑った。しとつく雨が心地よかった。

それから、ミュウミュウ村に帰ってくると、アダムが状況を説明した。そして、村人はラピたちに謝ったのだった。だが、ラピやローズマリーも村人達に謝罪した。守護連盟の対応が遅かったのは本当のことなのだから――。そして、ローズマリーたちはやっとテレポーテーションして守護連盟に帰ってこれたのだった。

ローズマリーはボロボロの姿だったが、まっすぐに神々の館の受け付けに書類を出しに行く。ウォルドは再び魔法使いたちの元に飛んで行ったのでいないし、エメラルドはラピを部屋に寝かしにいったのでいない。魔法使いたちは戸惑いながらローズマリーを見ている。

「何なのあの格好！」

「物凄くボロボロじゃない」

その魔法使い達の中にジュリアもいる。ジュリアは驚いた様子でローズマリーを傍観している。ローズマリーは魔法使いたちの列には並ばず、フロウの元に書類を出しに行った。

「ローズマリーさん、お疲れ様です」

出迎えたのはアイヴィーである。アイヴィーは笑顔まで浮かべている。

カッと頭に血が上った。ローズマリーはアイヴィーの頬を思い切り叩く。パンツと乾いた音がした。

第四十一話 吹っ切れた思い

叩いた衝動でアイヴィーの顔が横に向いた。アイヴィーが、ローズマリーを見たまま、そつと自分の頬に手を当てる。

「ちょっと！ アイヴィーさんに何するのよ！」

様子を見に来たらしいジュリアが番犬よろしく割って入る。だが、ローズマリーはその番犬にも「あんたは黙っててよ！」と、噛み付いた。

「なんですって!？」

ジュリアは湯気を出しそうなほど怒っている。

「ジュリアさんは、入ってこないでください」

「あ、アイヴィーさん……！」

だが、アイヴィーに冷たい視線を投げかけられて、ジュリアはしぶしぶ後ろに下がった。それでも、しつこくジュリアはローズマリーを睨んでいる。

「なんで、アイヴィーさんは、私たちがピンチになっているのにすぐに助けを呼んでくれなかったのよ!？」

ローズマリーが怒鳴るとアイヴィーは冷たい笑みを浮かべた。

「……ウオルドさまを寄越したでしょう？」

「来るのが遅いのよ！ お陰でラピは死にかけたのよ!」

アイヴィーはため息を付いた。そして、ぼそりと呟く。

「いつそ、そうなればよかったのに」

小さな声で言ったつもりかもしれないが、耳ざといローズマリーにはしっかりと届いた。

「何ですって!？ そんなこと、ラピの前で言ったら許さないんだから!」

ローズマリーは顔を真っ赤にして怒る。アイヴィーは笑った。

「じゃあ、貴方がラピを守るように強くなればいいではないですか。どうせ、今回も足手まといだったんでしょ?」

痛いところを突かれてローズマリーは口ごもった。アイヴィーが悪いとばかり思っていたが、全ては役に立たない自分が悪いのかもしれない。だが、そう考えて思いなおす。この任務は最初から無理だと分かっていたのに、アイヴィーが無理に進めたのだから。ローズマリーは悔しかった。

「分かってるわよ！　これから特訓するのよ！」

アイヴィーはフロウの方を向いた。

「フロウさま、ローズマリーさんたちに休暇を貰えませんか。どうせ、暫くは役に立たないでしょうし」

「役に立たないって何よ、その言い方！」

フロウはアイヴィーとローズマリーに気圧された様子で頷いた。

「あ、ああ。良いだろう。こちらにも落ち度がある。ラビの休養も兼ねて二週間じっくり休みなさい」

「ありがとうございます、フロウさま」

アイヴィーがフロウに向かってお辞儀した。そして、笑顔でローズマリーの方を見る。

「そういうことです、ローズマリーさん、頑張って特訓なさってください」

「分かってるわよ！」

ローズマリーは「フン」と顔を背けて、出て行こうとする。その前にジュリアと視線がぶつかった。

「もう私はアイヴィーさんのことをすっかり吹っ切ったから、せいぜい二人で仲良くして！　とってもお似合いだと思っわ！」

ジュリアが何か言う前にローズマリーは部屋から出ていった。アイヴィーがじっとローズマリーの方を見ていた。ジュリアはそんなアイヴィーを見て、それから、ローズマリーの出て行ったほうを睨んだ。

ローズマリーは、ラピの部屋を訪れた。ラピの部屋のインターホンを押すと、中からエメラルドがドアを開けた。

「ああ、ローズマリーか」

「ラピの具合はどう？」

「部屋の中でごろごろしているよ。って、何？ その花は……」

「花屋さんで買ってきたのよ。ラピのお見舞いよ、お見舞いっ！」

ローズマリーは、もうすっかり、服も着替えてしまっている。服を着替えてから、花屋に寄ったというわけだ。

ローズマリーは部屋の中に入る。すると、ラピがベッドの中で、ごろんとこちらに寝返りを打った。ラピと目が合った。

「ラピ、調子はどう？」

ラピは驚いた様子でベッドから体を起こした。

「ろ、ローズマリーさん、何、その花……」

ラピはエメラルドと同じ事を聞くのでローズマリーは面白くなった。

「じゃーん、ラピのお見舞いよー！ 景気良く百本買って来ちゃった！」

「お見舞いって、それって薔薇じゃん……」

ラピはそう言って面白そうに笑った。ローズマリーは気色ばむ。

「薔薇じゃ不満だって言うの！？」

「赤いし、しかもつぼみじゃないか」

ラピは面白そうにローズマリーを見ている。

「せっかく買ってきたのに！ 文句ばかり！」

ローズマリーはベッドの横まで歩いてきて、ラピにその百本の花束を渡した。

「意味分かってやってるの？」

ラピは楽しそうに笑っている。エメラルドがブツと噴き出した。
「何よ、みんなして！ 私の好意が受け取れないって言うの！？」

「好意！ どうしよう、俺！」

ラピが大うけしている。

「な、なによ！」

見かねたエメラルドが口を挟む。

「あのねえ、ローズマリー。薔薇の花言葉知らないの？」

「赤い薔薇は愛情とか情熱でしょ？ 別に変じゃないじゃない。お見舞いに向いているじゃない」

「つぼみの花言葉は『愛の告白』だよ！ しかも百本！ ラピに大告白して求婚でもするつもりなのかい？」

第四十二話 不意打ち

ローズマリーは思わず真っ赤になった。知らないとはいえ、ローズマリーはラピに告白しようとしていたのだ。

「ち、違うわよ！ 変な誤解しないでよ！」

「ローズマリーさんが俺のことをそんなに思ってくれていたとは……でも、ローズマリーさん短気だし怒りっぽいしお断りだけど」

ラピは、ローズマリーをからかっているらしい。薔薇の香りを嗅いだりしており、いかにも楽しそうだ。

「だから、違うって言ってるのに！ エメラルドも何か言ってよ！」

エメラルドは面白そうに笑った。

「ラピ、観念して付き合っただけなら？」

「何を言ってるのよ！」

「だってさあ、ローズマリーって、ラピが死に掛けたとき、じん——」

そうだ。人工呼吸をラピにしたのだった。ローズマリーは真っ青になる。慌ててエメラルドの口を手で塞いだ。

「エメラルド！ いいからちょっと来なさい！」

ヒステリックな声が出た。ローズマリーはエメラルドを引っ張って外に連れ出そうとする。ラピは呆気に取られているようだ。

「ローズマリーさん？」

「なんでもないんだから、あんたはしっかり休養して直しなさいよね！」

エメラルドを外に連れ出して、ローズマリーはドアを閉めた。ぜえはあと、息をつく。寿命が縮まった気がした。

「……別に秘密にしくてもいいんじゃないの？」

エメラルドが面倒くさそうにこちらに半眼を向けている。

「駄目よ！ ラピに人工呼吸をしたことは黙ってて！ それこそ、ラピに何をからかわれるか分かったもんじゃないわ！ あんなこと

したのって、一生の不覚よ！」

ローズマリーは頭を抱えてのたうつ。先ほどから変な汗をかくし、生きた心地がしない。

「ふーん、じゃあ、ローズマリーはラピの秘密をしっかり探つてくことだね。それまで、秘密にしててあげるよ」

ローズマリーは顔を上げた。

「なにそれ！ 脅すつもり！？」

「脅してないよ。失敬だな、君は」

「それに、ラピの秘密ならもう分かったんじゃないの？ ラピの本名がベベルデイロなんじゃないの？」

「馬鹿だな、君は！ ベベルデイロはラピの腕輪の名前だろ！」

「腕輪の名前を本名にしてたっておかしくはないでしょ？」

「あのね、腕輪の名前は古代の魔法使いの名前なんだよ？ その古代の魔法使いの名前を本名にすることは出来ないんだ」

「そうなの？」

「ああ、法律で決まってる。そんなことも知らないのかい？」

「やれやれと、エメラルドは肩をすくめる。

「知らなくて悪かったわね！」

「だから、ラピは何か隠しているんだ」

「ふーん。私は別に隠しててもいいと思うわ。そんなの、ラピの自由だし」

「だから言ってるだろ？ 人工呼吸のことは黙っててあげるから、君は探つてって」

「やっぱり、脅してるじゃない！」

ローズマリーが怒ると、エメラルドはニヤツと笑った。

「それは、ともかく、僕は今からコロシウムで魔法の練習をするけど、君はどうする？」

「良いように話をそらされた気がするが――。」

「私もするわ！ これ以上足手まといになりたくないもの」

意見はすぐにまとまり、二人は魔法書を持つてくると、コロシア

ムにテレポーテーションした。

それから、三日が経過した。ローズマリーとエメラルドは、しつこくコロシウムに通って、朝から晩まで呪文を唱えていた。だが、まったく呪文は形にならない。

「私、呪文だけ五十とおりなら、そらで言えるようになったわ」
「僕もだ」

ローズマリーとエメラルドは虚しくて空笑いする。学芸会ではないのだから、呪文だけいえたところで何の自慢にもならない。ならないが。

「さあ、今日もやるわよ！」

気を取り直して、勢い良く手を上にあげて伸びをした。

朝のコロシウムには、人があまり居ない。みんな任務や授業で出払っているのかもしれない。

「ローズマリー・ウィザーが命じる！ 聖なる火球よ邪を滅せよ！ 火炎球！」

声だけが木霊となって帰ってきた。ローズマリーはため息を付いた。

「まったく駄目だわ……身振り手振りだけなら完璧なのに……何がいけないのかしら……」

ローズマリーは魔法書を読もうと身を屈めた。魔法書のページをめくる。

「うーん……」

まったく代わり映えのしないことしか書いていない。

「――よ邪を滅せよ！ 火炎球！」

風に乗って呪文の端が流れてきた。それは聞いたことのある声だ

ったが、エメラルドの声ではない。すぐには誰の声か分からない。

「危ない、ローズマリー！」

エメラルドの声がして、ローズマリーが顔を上げると、大きな炎の玉がローズマリーに向かって飛んでくるところだった。

「きゃああ！」

ローズマリーが慌ててテレポーテーションすると、炎の玉は壁にぶつかって消えた。

「誰よ！ こんなことするのは！ 何を考えてるのよ！」

ザッと、土を踏みにする音がしてローズマリーは振り向いた。

「——私ですが、何か文句がありますか？」

それは、他でもないアイヴィーだった。

第四十三話 プライドとお願い

「アイヴィーさん！？ さっきの魔法アイヴィーさん！？」

「そうですが、何か文句ありますか」

アイヴィーは、しれっと開き直って自分の髪を掻き上げた。いつもの優しそうなアイヴィーの感じからは程遠い。この間アイヴィーをビンタした事をまだ根に持っているのだろうか。

「文句ならあるわよ！ もう少しで怪我するところだったじゃない！」

ローズマリーは思わず地団太を踏んだ。アイヴィーは冷たく顔をそらせて、目の下の方でローズマリーを捕らえた。

「普通の魔法使いなら避けれて当然です。あんなの挨拶じゃないですか」

「何ですって！？」

ローズマリーはカッカと頭に血を上らせている。アイヴィーはふうと嘆息した。ローズマリーの短気に付き合っていると疲れたとでも言いたげだ。

「何だ……せつかく、休みを割いて魔法を教えに来て差し上げたのに、そうですか、いないんですか」

アイヴィーはくるりと踵を返す。教えに来たとは初耳だ。「ま、待って！」ローズマリーはアイヴィーの手を掴もうとした。だが、電気が触れるようにアイヴィーのマリオルの腕輪に弾き返される。アイヴィーが顔をしかめる。

「ま、待って！ 教えてよ！」

今度はアイヴィーの前方に回り込んだ。アイヴィーがにつこりと笑う。

「丁寧をお願いしてもらえますか？ 教える気になれません」

ローズマリーはムツと気色ばむ。やはり、この間のことを根に持っているのだ。いや、もつと言えば、ローズマリーが振ったことも

恨んでいるのかもしれない。だが、ローズマリーはアイヴィーの態度が気に入らなくて、どうしても謝る気にはなれない。

「私だってそんな言い方されたら教えてもらう気になんてなれないわよ！」

隙を見てエメラルドがローズマリーとアイヴィーの間に割って入った。

「アイヴィーさん、僕に教えてください！ よろしくお願いします！」

エメラルドは思い切り頭を下げた。エメラルドはプライドだけは高いと思っていたが、調子が良いだけのようない気がする。ローズマリーは半眼でエメラルドを見る。エメラルドはローズマリーを見て「フン」と笑った。アイヴィーは満足そうに微笑む。

「良いでしょう。エメラルド君には教えて差し上げます。ローズマリーさんはどうします？」

ローズマリーはフンと顔を背けた。頭を下げる気にもならない。

「私は結構よ！ ラピに教えてもらうわ！」

「無理だと思えますよ」

鼻歌を歌いそうな挑発したような調子でアイヴィーは言う。

「ど、どうしてよ？」

アイヴィーは肩をすくめた。アイヴィーは唯一ラピの秘密を知っているらしいのは分かっていたが……。ローズマリーはアイヴィーの口をこじ開けたくなった。だが、意に反してアイヴィーは、ローズマリーの短気に油を注いで火をつけるがごとく笑った。

「私の口からはなんとも…… ラピに聞いてみればどうです？」

「言われなくてもそうするわよ！」

ローズマリーは、ラピの部屋の前にテレポーションした。ドアが開いているので入る。ラピは大きな薔薇を鍋に活けている最中だった。見渡せば、そこらじゅうの食器に薔薇が活けられている。お陰で部屋の中が薔薇臭い。よほど薔薇を貰ったことが嬉しかったのか、ラピは鼻歌を歌っていた。

「おお、ローズマリーさん！ この薔薇見事に俺の家の食器を占領してるぜ。どうせだから、薔薇風呂にして消費してもいいかな？」

「好きにしてよ。それより、ラピ、私に魔法を教えて！」

ラピの顔色が変わった。

「無理！」

ラピは首を振った。これでは、アイヴィーが言っただとおりではないか。ローズマリーはうるたえた。

「ど、どうして!？」

「教えるってことは魔法を使わないと無理だろ？ だから駄目」

ラピは台所まで歩いていく。そして、食器に水を入れて、薔薇を部屋に、しつこく飾る。薔薇に添えられていたリボンは鍋にデコレーションする。

「どうしてよ！ 魔法ならこの間、思いっきり使っていたじゃない」

「あれは、ローズマリーさんがピンチになったからだよ。通常じゃベベルディロの名前では魔法を使えないんだ」

「それじゃあ、ラピの名前で使えばいいはずでしょ？」

「あー、とにかく無理だから！」

ローズマリーはラピが冷たくて悲しくなった。

「アイヴィーさんが教えてくれるって言ってるの！」

アイヴィーの名前が出たことで何故かラピは顔をしかめた。

「……教えてもらえばいいだろ？」

何で俺に言うんだよ、と言いたげだ。ラピは薔薇の向きを整えていたが、薔薇を触りすぎたせいでとげに触れたらしく手を引っ込めた。

仏頂面のままラピはこちらを見る。この間あったことを黙っていたよと思ったが――。

「この間、救助が遅れてラピが死に掛けたでしょ。だから、ムカついてアイヴィーさんのほつぺた叩いたのよ。だから、アイヴィーさんに目の仇にされてるんだけど」

途端にラピは相好を崩した。一気にラピの機嫌が良くなる。

「へえ、そりゃあすごい！ クマの一撃だ！」

ラピはニヤニヤしている。こんなことでも、からかおうというラピに腹が煮えた。

「もう良いわよ！ あんたのことで腹なんか立てるんじゃないかなかった！」

「待つて」

ラピがローズマリーの手を掴んだ。

「何よ？」

「ありがと、ローズマリーさん」

ラピは機嫌を直したらしく、笑顔になった。

ラピが礼を言うとは珍しい。ローズマリーは嬉しくなった。

「私のほうこそ、サウザンドと戦ってくれてありがと。役に立てなくてごめんね」

ラピが苦笑いを浮かべる。

「ホント、役に立たなかったよなあ」

「だから、悪かったって言ってるでしょ！」

「だから、役に立つようにアイヴィーにちゃんと教えてもらえよ」

「うん！ 分かったわ！」

そして、ローズマリーはテレポーションして戻ってきた。

アイヴィーはエメラルドを教えている最中である。手振り身振りを復習しているらしい。

「アイヴィーさん！」

アイヴィーはこちらに気付いて振り返る。

「やはり、駄目でしたでしょう？」

「はい、だから……」

自然と笑顔がこぼれる。ラピと話したのが楽しかったからかもしれない。

穏やかに微笑むローズマリーが気に入らないのかアイヴィーは顔をしかめる。

「私に、魔法を教えてください！ よろしく願いします！」

ローズマリーは上体を折って勢い良く頭を下げた。

第四十四話 厳しいアイヴィー

「……いいでしょう。教えて差し上げますよ」

「やった！ありがとうございます！」

顔を上げると、アイヴィーはローズマリーからすでに視線を外していた。

「それでは、基礎からです。エメラルド君に身振り手振りのおさらいをしてもらってましたが、ローズマリーさんにもしてもらいましょうか」

アイヴィーは、厳しい顔をして、ローズマリーとエメラルドの周りをゆっくり回る。

ローズマリーは上機嫌でニヤツと笑った。

「五十とおりなら出来るようになったの！」

アイヴィーはそんなローズマリーに笑顔を返してくれた。

「そうですか。では、基礎の火炎球の呪文からどうぞ？」

「ローズマリー・ウィザーが命じる！ 聖なる火球よ邪を滅せよ！
火炎球！」

「エメラルド・グリーンが命じる！ 聖なる火球よ邪を滅せよ！
火炎球！」

悲しいことに何も起こらない。ローズマリーとエメラルドは落胆して腕を下げた。何度も口にした呪文なので呂律の滑りだけは良くなっているが……。アイヴィーはフツと笑った。

「あー、腕の角度が違います。これでは、他の呪文も期待できませんね」

ローズマリーはアイヴィーの口調に腹を立てたが、本当のことなので何も言えなかった。

「エメラルド君の腕の角度はこう」

アイヴィーはエメラルドの腕に触れて、角度を正した。

「やってみてください」

「エメラルド・グリーンが命じる！ 聖なる火球よ邪を滅せよ！ 火炎球！」

「よろしい」とアイヴィーは頷いた。魔法としては何も起こらなかったが、手振り身振りは合格なのだろう。エメラルドは嬉しそうに「よし！」とポーズを決めている。

「ローズマリーさんの腕の角度は――」

アイヴィーがローズマリーの腕を触ろうとした。だが、電気で弾かれてしまう。アイヴィーは顔をしかめてローズマリーを見た。ローズマリーも消沈して眉を下げてアイヴィーを窺う。相変わらずの腕輪の調子だ。過去を思い出してしまい、ローズマリーは嫌な気持ちになった。きっと、アイヴィーも同じ気持ちだろう。

「仕方ありませんね……少し下がっててください」

アイヴィーは嘆息して、身振り手振りを交えて呪文を唱えた。

「アイヴィー・ロンガンが命じる！ 一の武器よ我が手に！」

アイヴィーの声はローズマリーやエメラルドより響いて聞こえた。アイヴィーの手に現れたのは皮製のムチだった。ムチといっても大きなものではない。細くて、三十センチほどの、馬に使うようなムチだ。

「おお」

ローズマリーは、拍手しようと思って「ん？」と、その手を止める。何か、嫌な予感がするのだが。

「そ、そのムチはまさか……」

アイヴィーが晴れがましく、にっこりと笑った。

「エメラルド君には触れることができるので普通に指導しますが、ローズマリーさんには触れられないので、これで、しばいて指導します」

アイヴィーはムチの両端を引っ張って調子確かめている。

「ええっ！？ 何でよ！ 不公平よ！」

「口答えしないでください」

早速、ムチがぴしゃりと飛んできて、ローズマリーの腕を打った。

「痛っ！ ～～～っ！」

ローズマリーは下唇を噛んでアイヴィーを睨んだ。アイヴィーは「ふむ……」と頷いた。

「これは、興奮しますね。癖になりそうです」

小さな声で呟いたのかもしれないが、しっかりと、ローズマリーの耳に届いた。

（この変態が！）

ローズマリーはギリギリと奥歯を噛んだ。隣でエメラルドが笑っている。

「良かったな、ローズマリー！」

「良くない！」

「私語は慎んでください」

ぴしゃりとムチが飛んで来た。

「いたっ！ 何で私だけぶつのよ！」

それから、日が暮れるまでローズマリーはアイヴィーのムチに打たれながら魔法の身振り手振りを習った。

「それでは、今日はこれくらいにしますか」

そう言ったアイヴィーの顔はつやつやしている。ローズマリーを引っぱたきまくって、すっかり気分爽快らしい。ローズマリーが引っぱたい張りの分は、なかったことにしてくれても別に良いのではないだろうか。それくらい、アイヴィーはローズマリーにムチ打った。最後の方になるとローズマリーは閉口してしまい、口答えする気力がなくなった。

「次はいつ教えてくださるんですか？」

エメラルドがローズマリーの気持ちも知らず笑顔で尋ねた。

「今回の任務でラビに無理をさせてしまったのも私の責任でしょうから、フロウさまにお願いして明日も休みを取って教えて差し上げますよ」

ローズマリーが、しかめっ面のまま顔を上げると、アイヴィーは慈愛に満ちた笑みをローズマリーに向けた。

「今日はムチで指導してすいませんでした」

「アイヴィーさん……」

ローズマリーはこのアイヴィーの笑みで全てを許してしまいそうになった。許容の言葉を口にしようとしたとき、アイヴィーは更に深い笑みを浮かべた。

「でも、ローズマリーさんをムチで打つのに、はまってしまったので、明日もビシバシムチでしごいて差し上げますね。では、明日は朝の八時に。今日はお疲れ様でした」

ローズマリーの顎がぐんと落ちた。アイヴィーはテレポーターションして帰っていった。エメラルドも「お疲れ様」と帰っていく。シーンと辺りが静まり返った。カラスがあほーと鳴いてどこかに帰っていく。

「あ——っっっ！」

ローズマリーの、たまった鬱憤は気がなくなっただけのシリウムの中に空しく響き渡ったのだった。

第四十五話 一夜明けて

ローズマリーはむしゃくしゃしながら自分の部屋にテレポーターションして帰ってきた。

「あーっっっ！ くそ、イラつく！」と思い切り部屋の中で絶叫する。すると、少し気分が楽になった。部屋の中に姿見の鏡があるのが目に留まった。ハッとして腕を捲り上げた。

「あー、赤くなってる！」

ムチで打たれたところが赤みを帯びている。服を脱いで下着姿になり、体を鏡に映した。

「あー、やっぱり、赤くなってる！ あとが残ったらどうしてくれるのよ！！」

怒りながら、薬を手にとった。薬を塗ろうとした時だった。ドアが開く音がして、反射的に顔を上げた。

「うわっ、えらいものを見てしまった」

それは、ラピだった。顔を手で押さえて「あちゃー」と言っている。それはそれでムカつくのだが。そこで、ドアを閉めればいいものを、じーっとローズマリーを手の隙間から凝視している。

「何見てんのよ！」

ローズマリーはとっさに薬の箱をラピに向かって投げつけた。

「あたっ！」

ラピが怯んだところを見計らって、服を着る。服のジッパーを上げ終ると、ラピの前に仁王立ちになった——勿論、下から見えないといけないのでジーンズ姿であるが。

「一体何の用よ！ こっちは、今むしゃくしゃしてるのよ！」

「いや、別に用はないんだけどさ、ローズマリーさんの実に男らしい雄叫びが聞こえたものでね」

「男らしいですって！？ ……そうよ！ ラピ、聞いてよ！ アイヴィーさんの教え方がね！」

ローズマリーは今日あったことを、早口でまくし立てた。散々ムチでしごかれて、また明日もムチでしごくという。ラピは「うんうん、そうか」と首肯しながら聞いているが、最後に「そうか、そういうプレイか、良いなあ」と夢見た視線で天井を見ていた。

「良くないわよ！ 明日も、アイヴィーさんに鞭打たれるのよ！」
ラピは、あははと笑った。

「でも、良かったじゃん」

「だから、何が良いのよ！ 全然良くないでしょ！」

「馬鹿だなー、ローズマリーさんは！ アイヴィーが教えてくれるって言うことは、アイヴィーは、ローズマリーさんに対する復讐をやめたのかもしれないだろ」

「そ、そうかな……でも、何でかしら？」

「アイヴィーのことを手で引っぱたいたからじゃないの？ 他にもアイヴィーに何か言った？」

「他には……ああ、そうそう。アイヴィーさんのことを吹っ切ったって言ったの。でも、本当に吹っ切れた感じよ。もう、完璧に恋心なんてどっかに行っちゃったから」

「ああ、それだよ、きつと。アイヴィーは、相手にしてもらえないからやけになってるんだよ」

「でも、そんなことされた方が、好きにならないわよ」

ローズマリーはじつとラピを見つめた。

「な、何だよ？」

「そうよ、明日、ムチでしばれないようにラピが呪文の身振り手振りを教えてよ！ 呪文は唱えなくていいから、ね？ お願いよ！」

ローズマリーはラピを拝み倒した。ラピは嘆息して笑った。

「しょうがないなあ。まあ、良いもん見せてもらったし、良いよ」
ラピの笑顔は神々しかった。うっかり見とれてしまいそうになり、我に返る。

「良いもんって何よ！ このスケベ！」

「あのさ、サウザンドに幻見せられたときに幻の中でローズマリー

さんの裸を見たんだけど」

「はあ！？ 何見てんのよ！」

「実物と幻、大分違うな。その、ボリウムが」

ラビは胸を両手で表現して、そして、ローズマリーを見てため息を付いた。ローズマリーはラビを追い掛け回して、ラビを、シバこうとした。だが、ラビに全て軽くあしらわれたただだった。

そして、ローズマリーは深夜までローズマリーの部屋で呪文のおさらいをしたのだった。

翌朝のことだ。その日は鳥のさえずりの声では、目が覚めなかった。目覚ましの音で目が覚めた。珍しいこともあるものだ。少々夜更かしすぎたのだろうか、ローズマリーは寝ぼけ眼で部屋を見渡した。目覚ましまでの距離がやけに遠いと思えば。ローズマリーは床で転がっていた。

「いたた……」

床で眠ったため、体の節々が悲鳴を上げている。ベッドから落ちたのだろうか。そう思い、立ち上がる。

「！？」

すると、とんでもない光景が目に見え込んだ。ラビがベッドの上を占領してすやすやと眠っていた。しかも、ローズマリーのクローゼットから拝借したらしいブラジャーとパンツをベッドに敷き詰めて、その上で安眠しているではないか。

「この変態が！」

ローズマリーはラビの耳を引っ張って起こそうと手を伸ばす。すると、すばやく、ラビの手がローズマリーの手を握った。パチリとラビの目が開く。

「ふああ、ローズマリーさん、おはよ！」

「おはよ、じゃない！」

ローズマリーはラピの手を振り切った。何で私が床に寝てるんだとか、パンツを敷き詰めるなという、文句があったが、ラピのローズマリーの手を握るという、すばやい動作にローズマリーは驚いて引っ込んでしまったのだ。もしかして、ラピはすごく出来る魔法使いなのではないだろうか。

「目覚ましを一応九時に合わせて置いたけど良かった？」

「！？」

ローズマリーは愕然として目覚ましを両手で握り締めた。両手が震える。待ち合わせは八時だ。

「全然良くないわよ！」

ローズマリーはラピを慌てて追い出して、着替えた。そして、コロシアムにテレポーションで直行したのだった。

第四十六話 アイヴィーの胸のうち

「すみません！ 遅れました！」

ローズマリーがすぐさまテレポーションする。コロシアムの中のだわめきがすぐにローズマリーの耳を満たした。今日は人が少し多いようだ。人の声と魔法の爆音などが煩く響いている。アイヴィーとエメラルドは、既に次の練習に入っていた。すぐに、アイヴィーとエメラルドがローズマリーに気付いて振り返る。アイヴィーはにつこりと嫌味つたらしく笑った。

「怖気づいて来ないのかと思いましたよ」

ローズマリームツと気色ばんだが、自分が悪いと分かっているの
で、怒気を打ち消して「すみません」と、頭を下げた。

「いいでしょう。今から言う呪文の身振り手振りを完璧に出来たら今日はムチで打たないであげますよ」

アイヴィーはムチの柄を自分の手に軽く打って弄んでいる。アイヴィーは厳しい目をローズマリーに向けた。

「では、翼斬風」

「ローズマリー・ウィザーが命じる！ 切り裂くは鋼の翼！ 翼斬風！」

身振り手振りを交えて、呪文を唱えた。何も起こる気配はない。

だが、アイヴィーは面白そうに目を丸くした。ローズマリーは得意げに顔を上に向けた。

「では、邪水波」

「ローズマリー・ウィザーが命じる！ 一繋ぎの呪となり津波を起こせ！ 邪水波！」

これも、完璧に身振り手振りを交えた。笑みが零れそうになるのを押さえるのに必死だ。失敗するはずがないではないか。昨日、ラピとあんなに特訓したのだから。

アイヴィーはにつこりと本当に嬉しそうに笑った。

「素晴らしい上達振りですね。よろしい。今日はムチで打たないであげましょう」

「やった！」

「今日は、肝心な要の部分をやります。呪文の唱え方です。これを失敗すると全て上手く行きません」

ローズマリーもエメラルドも立ったままアイヴィーの講義を聴いている。

「あー。これが普通の言い方です。ローズマリーさんやエメラルド君が今まで唱えていた言い方でしょう」

アイヴィーの声は普通の声だ。何も変わらない。

「これを、あー。と変える。よく澄んで聞こえませんか？」

なるほど、良く響いて聞こえる。

「どうやるんですか？」と、エメラルド。

「まず、風を感じてください。その気流の上に乗せるような気持ちで、あー。という。しかも、腹式呼吸で。どうですか、響きますよね？ やってみてください」

「あー」と、エメラルド。

「あー」と、ローズマリーも負けじと言う。

「違います、あー、です！」

そして、講義は進み、ローズマリーはちゃんと呪文を唱えれるところまで上達した。

日が大分傾いてきた。カラスが気だるげに鳴いている。

「聖なる火球よ邪を滅せよ！ 火炎球！」

ローズマリーと、エメラルドの唱えた呪文は、手のひらから熱い炎の玉となってコロシアムの壁に勢い良く打ち当たって消滅した。煙りが焦げたにおいをあげて立ち上っている。

「やったあ！」

「これで、皆に馬鹿にされずにすむな！」

「そうね！ 昨日、ラピと夜遅くまで特訓した甲斐があったわ！」

ローズマリーはしまったと口を押さえた。エメラルドがアイヴィーとローズマリーの二人を見て、意地悪く付け足した。

「へー、夜遅くまで！ まあ、良いんじゃないの？ ローズマリーとラビは既にキスまでした仲だし？」

「エメラルド！」

ローズマリーの背中が冷やりとしている。怖くて後ろを振り向けない。

「じゃあ、僕はこれで失礼します。アイヴィーさんありがとうございました！」

エメラルドはさつさとテレポーターションで帰ってしまった。

ローズマリーも無理やり笑みを浮かべて、覚悟を決めて振り向いた。

「じゃあ、私もこれで失礼しま——」

「待ってください！」

その瞬間、アイヴィーにローズマリーは掴まれた。だが、電気で手を弾き返される。

「……っ！」

ローズマリーの心臓がバクバクと鳴っている。震える口を開く。

「だって、だって、もう、私とアイヴィーさんは関係ないはずですよね！ アイヴィーさんにはジュリアさんという人が居るわけだし！

私が、何しようが貴方には関係ないことですよね！」

ローズマリーが言い切つて、顔を上げると、アイヴィーが悲しそうな顔でローズマリーを見ていた。

「……貴方に、復讐をするつもりだったんです」

「……！」

「ジュリアさんと見せしめに付き合つて、貴方を傷つけるつもりだった」

「でも、私は、貴方を吹っ切りました」

「そう、それが計算違いでした。貴方がいつまでも私のことを好きでいてくれると思っていたのに」

「……傷つけるだけの人をいつまでも好きでいるわけないじゃないですか」

アイヴィーが自嘲気味に笑った。

「それもそうですね……。でも、私は貴方を……。貴方がボロボロで任務から帰ってきたとき、純粹に無事で帰ってくれて嬉しかった」

あの時、アイヴィーがローズマリーに笑みを浮かべたのはそういう理由からか。ローズマリーは申し訳ないような気持ちになった。

「そして、貴方を失うのが急に怖くなったんです。だから、貴方をお教えしたわけですよ」

「アイヴィーさん……」

ローズマリーは少しだけアイヴィーを見直した。だが、不思議と気持ちは冷めている。

「明日からは私は通常の仕事に戻りますので。では、失礼します」

アイヴィーは笑顔の余韻を残し、テレポーションして帰っていった。

「私も帰ろう……」

ローズマリーがテレポーションして帰った後、コロシラムの中に立つ影があった。それは、ジュリアで、ローズマリーの帰った後をじっと睨んでいた。

第四十七話 エメラルドの企みごと

二週間が経過した。季節も少しずつ変わり、初秋に差し掛かった。蝉の鳴き声も少しずつ消え、あんなに寝苦しかった夜も涼しくなり毎日快眠である。

ローズマリーとエメラルドは二週間すべてを魔法の練習に費やした。

「エメラルド・グリーンが命じる！ 水の矢よ有を貫け！ 鋭水矢！」

エメラルドの無数の水の矢がローズマリーに降り注ぐ。ローズマリーは身振り手振りを交えて呪文を唱えた。

「ローズマリー・ウィザーが命じる！ 我が身を守りたまえ！ 特妨壁！」

ローズマリーの前に鏡のような光るバリアが出来て、矢を飲み込むように全て吸収してしまった。

「やった！ 成功よ！」

「やったな、ローズマリー！」

ローズマリーは飛び跳ねて喜んだ。エメラルドも親指を立てて笑みを浮かべている。拍手が聞こえてきて、振り返ると、ラピが拍手していた。

「ローズマリーさん、エメラルド、すごい上達ぶりじゃないか」

「ああ、ローズマリーは僕が攻撃するとすぐにテレポーテーションで逃げていたけど、ようやくちゃんと防御出来るようになったんだ」「そりゃすごい」

「もう体調は良くなったの？」と、ローズマリー。

ラピは二週間ずっと、体を休めていた。時々、ローズマリーの呪文の身振り手振りを教えてくれたりしていたが、他は専ら休憩していた。

「ああ、明日から、任務をうけようと思ってるんだ」

ローズマリーはラピが元気になったので嬉しくなった。

「じゃあ、明日は、また一緒に仕事しようよ」

ローズマリーがうきうきと声を弾ませると、ラピは嬉しそうに笑みを浮かべた。またいつもの毎日が始まると思っていたが――。

「ローズマリー！ 約束を忘れたのかい？」

エメラルドがいきなり話をさえぎった。ローズマリーは何のことか分からずに首をかしげる。

「約束？」と、ラピがエメラルドに尋ねた。

「ああ、明日は僕とローズマリーはデートの約束しているんだ」

「はあああああああ！？ どの誰がよ！？」

ローズマリーは思いきり、怒り半分で尋ね返していた。デートの約束など聞いたことがない。

だが、エメラルドは確信犯の笑みを浮かべる。

「したじゃないか。でないと、ラピにあの事を言うよ？」

そっとローズマリーに近寄って、耳元で囁いた。

ローズマリーは口をぱくつかせ、歯を噛みしめた。あの事とは人工呼吸のことだ。ラピに人工呼吸をしたことは知られたくない。ラピが怪訝そうな目をローズマリーに向けている。ローズマリーは笑顔を見せた。

「そうなのー！ 明日はこの性悪とデートなのー！」

ローズマリーは引くつく口元を笑みの形に歪ませ、目でエメラルドを目で射る。エメラルドは飄々として、にっこりと笑った。

「そういうわけだから、ラピは任務は一人でどうぞ」

（何を考えてるのよ？）

ローズマリーはエメラルドを睨む。

「ローズマリーさんと、エメラルドって付き合ってるの？」

「別に――！」

「まあ、そんなところだよ」

エメラルドはにやりと笑う。ローズマリーはエメラルドの足を踏みつけたくなった。

「ふーん、なんだか知らないけどおめでとう。ローズマリーさんのどこがいいんだか分からないけど？ まあ、良かったんじゃない」
「ラピ！ あのね！」

それだけは違うと言いたかった。だが、ラピは笑顔を浮かべて、ローズマリーの言葉を打ち消した。

「じゃあ、明日早いし、もう帰るよ。じゃあな」

ラピはさっさと帰ってしまった。そっけないことこの上ない。ローズマリーはエメラルドをぎろりと睨んだ。

「あんたが、私のことを好きだったなんて初耳だわ！ 一体何を考えているのよ！」

「知りたい？」

「ふざけてんの！？」

「明日、ラピに単独で任務を行ってもらう。それで、ラピが呪文を唱えるところを二人で盗み見るんだ。ラピの秘密を暴く絶好のチャンスだろ？」

「そんなこと、したくない！」

「するんだ。今から、君は受付に行つて、明日のラピの任務先を調べてくるんだ。良いね？」

「嫌よ！」

「あーっそう？ じゃあバラしても……」

「っ！ 分かったわよ！ やればいいんでしょ！」

ローズマリーは、やけくそで叫んで、テレポーションした。

神々の館に入ると、そこは閑散として、静まり返っていた。人気は見当たらず、朝の盛況な空気はどこにもない。受付まで歩いてくる。ドアを開けるが、誰もいない。ローズマリーが室内に足を踏み

入れると、木の床がぎいと鳴いた。ローズマリーは肝を冷やしたが、急いで、書類の棚まで来ると、ラピの名前を探した。

「あつた！」

背の高いところにラピの名前を見つけた。そのファイルに手を伸ばす。ガタンと音がして、ファイルの束がばさばさと落ちてきた。

「だれか、居るんですか？」

「！！！」

ローズマリーはアイヴィーの声に驚いて、机の陰に身を隠した。心臓がバクバクと鳴っている。大急ぎでラピのファイルを開く。

アイヴィーの足音がこちらに近づいてくる。アイヴィーの靴音が段々と早くなる。

「そこで、何をしてるんですか！」

アイヴィーが机の下を覗いた。だが、そこには、書類が山積しているだけで、誰の姿もなかった。

第四十八話 ラピの秘密

翌日のことだ。ローズマリーはベッドからどうしても起きる気になれず、布団の中で転転して煩悶していた。秋の初めの柔らかな太陽が窓から優しく照らし、ローズマリーの意識を外へと誘った。^{いざな}昼が来てもエメラルドが尋ねてくる気配はなかった。

こうしても不安なので、ローズマリーはエメラルドに会わないまま任務を請け負おうと考えた。早速忙しなく用意をして、そつと音を立てないようにドアを開けた。

だれも居ないようだと、ほっと胸を撫で下ろそうとしたまさにそのとき、突然現れた奇怪現象のように手がドアの間に割り込んだ。

「おはよう、ローズマリー」

エメラルドはドアをこじ開けて、ローズマリーがドアを閉じられないようにした。そして、確信犯の笑みを薄く浮かべてローズマリーの腕をそこから引きずり出した。

（テレポーテーションすればよかった！）

そう考えても全ては今更だ。エメラルドも考えているようで、逃げられないように油断したところを狙ったようだ。それほど、エメラルドのラピへの執着は強いようだ。

「ローズマリー、ちゃんと調べたよね？」

「調べたけど……」

ローズマリーは昨日のことを苦々しく思い出した。昨日は、アイヴィーに見つかりそうになり、這這の体で、テレポーテーションで帰ってきたというわけだ。生きた心地がしなかった。いつまでも心臓が煩く鳴っていた。

一応、言い訳程度にメモに記入していた。ローズマリーがメモを取り出してためらっていると、エメラルドがメモをひったくった。

「カウカウ森か」

「やっぱり、私降りるわ！ ラピのことを調べたければ、一人でど

うぞ！ 私がラピに人工呼吸したことを言いたければ言いなさいよ！」

「そうさせてもらうよ。でも、もう、僕とローズマリーは共犯だと言っことをお忘れなく」

エメラルドはテレポーションしてそこから消えた。最後に見たエメラルドのしつこい笑顔がローズマリーの脳からなかなか消えないでいる。それは、罪悪感そのものだった。共犯——ローズマリーは、今更ながら、とんでもない事をしてしまったのではないかと自分を苛んだ。

「どうしよう……」

ローズマリーは落ち着かなくて、追い詰められた犯罪者のように、ドアの前を行ったり来たりした。そして、決心して立ち止まる。

「やっぱり、ラピに魔法を使わないように言いに行こう！」

ラピが魔法を使わなければ、エメラルドも諦めるだろう。

ローズマリーはカウカウ森までテレポーションした。

森の中は立派な樹齡何百年かの木々が生い茂っており、日の光が入って来なくて不気味で薄暗い。鳥がゲーゲーと警戒音を鳴らしている。昨日は雨が降ったのだろうか。湿った土の匂いが辺りを占めている。どこかで、爆音が聞こえて鳥達が羽ばたいた。地面がぐらぐらと揺れて、ローズマリーは木に抱きついた。ラピがダークマインドと戦っているのだろうか。

「こうしちゃいられないわ！ 急がなくちゃ！」

ローズマリーは地面から突き出ている木の根っこに躓きそうになりながら森の中を急いだ。また爆音がけたたましく聞こえる。今度は木々がなぎ倒される音がしている。

「向こうだわ」

ローズマリーは音のするほうへ木々を伝いながら進んでいく。続けざまに爆音がする。今度は森の開けたところに出た。太陽の光が明々と差し込んでいる。空を見上げると、ラピが鳥のように軽々と宙に浮かんでいた。

「——が、命じる！ 聖なる鳶よ、その腕を伸ばし、邪を絡め取れ！ 呪縛樹！」

ラピの呪文を受けて、木々が次々とイソギンチャクのように伸びてダークマインドらしき少年を絡め取った。そして、地面に叩きつける。激しい音が辺りに響き渡った。

ラピが空中からゆっくりと降りてくる。ローズマリーはラピに駆け寄ろうとした。

「ら——むぐっ！？」

ラピの名前を呼ぼうとした途端、後ろから出てきた人さらいのような素早い手に口をふさがれてしまった。

（エメラルド！？）

「静かに、君も聞くといいよ」

エメラルドが、いかにも面白いといった表情で笑みを浮かべていた。ローズマリーはエメラルドの手を急いで口からどけて、欠乏した酸素を肺に入れて呼吸した。

「エメラルド、あんたね！」

小声で抗議しようとしたその時——。

「リトリア・ラブリーが命じる！ 腕輪よ呼応せよ！」

（え……？）

急いで、ラピの方を向く。ラピはダークマインドに右手を押し当てた。ラピの手のひらから白い光が明滅してダークマインドを消滅させた。

爽やかな風が吹き抜ける。また静けさが辺りを包んだ。

「リトリア・ラブリー？」

ローズマリーは、静寂が戻ったことに気付かずに、独り言のよう

に声を思わず漏らしていた。その声は辺りを侵食して響いた。

「!?!」

それは、ラピにも届いたらしい。ラピは弾かれたように振り向いた。ラピの瞳が動揺して揺れている。

「ローズマリーさんとエメラルド!? 全部、聞いて――」

ローズマリーの心臓の音がどくどくと鳴っている。ローズマリーが何も言えずに戸惑っていると、エメラルドが笑った。

「聞かせてもらいましたよ。ラブリー王子」

エメラルドが面白そうに笑うと、ラピはエメラルドを初めて敵と認識したように、顔をしかめた。

「ラブリー王子って」と、ローズマリーはラピを見つめた。ラピはこちらを睨んでいる。

「ローズマリーは聞いたことない? こりトリア国には変な名前の王子さまが居るって噂を」

「……あんたたち、デートじゃなかったのかよ」

ラピの声は低く警戒心に満ちていた。

「そうだよ? ラピの秘密を暴くためにデートしているんだよ」

「違うの! 私は、エメラルドを止めようと思って!」

エメラルドはハハッと一人清清しく笑い、ローズマリーに構わず続ける。

「ああ、でも、ラブリー王子さま、そんなことをお隠しになる必要はありませんでしたのに。ああ、これで、すっきりしましたよ。なぜ、あなたさまが、魔法をお使いにならないのかなどね」

ラピはきつく口を閉ざしている。ローズマリーも何も言えなかった。

「じゃあ、これで、僕は失礼します」

エメラルドは恭しく一礼してテレポーションしてさっさと帰っていった。

「ら、ラピ、あのね!」

ラピはハッと馬鹿馬鹿しいものを見たときのように笑い捨てた。

「ローズマリーさんもこそそとエメラルドと仲良く俺のこと探っていたの？」

とげとげしいラピの声にローズマリーは怯んだ。

「私は、脅されて——」

「脅されてだつて？ 言い訳は良いよ。なんで、ラピのままじゃ駄目なんだ？　なんで、秘密にしていちゃだめなんだ？　ローズマリーさんなら俺の気持ち分かってくれると思って密かに同志だと思っていたのに！」

「ラピ！　あのね、聞いて！」

「聞きたくない！　ローズマリーさんなんか大嫌いだし！」

ラピは声を張り上げて、そのままテレポーテーションして消えてしまった。

「ラピ……」

大嫌い。その言葉が頭痛になって響いた。

ローズマリーはショックでその場から根が生えたように動けなくなつた。

第四十九話 突然の告白

朝焼けが窓から入ってくるのをローズマリーは服を着替えながら確認した。目はすっかり覚めてしまった。いつものように服を着替え、冷蔵庫から冷たいミックスジュースを出して、グラスに注ぎ、それを飲み干した。

「よし！」

グラスをテーブルの上に置く。ローズマリーは玄関まで行くと、そっと、部屋のドアを閉めた。そして、ラピの居る部屋の前の壁にもたれて、じつと番犬よろしくラピを待った。ついこないだのエメラルドのようにだ。今なら、エメラルドがどうしてこのように待っていたのかという気持ちが良く分かる。

インターホンを押すことはしない。ラピがテレポーターションをして逃げてしまうかもしれないからだ。

ラピに謝るイメージは出来ている。繰り返し布団の中でシミュレーションしたのだから。

ラピに「昨日はゴメンね」と開口一番に言うのだ。そして、いつものように口喧嘩になれば、仲直り完了だ。それは、簡単なような気がして、ローズマリーは、もう仲直りした後のことを考えて、一人で、うきうきしていた。

それにしても、眠くて瞼が知らず落ちようとする。昨日はラピに大嫌いと言われたことがショックで殆ど眠れなかったのだ。

「ふああ……ラピはまだかな……」

ドアの横で体育座りをして待っていると、ドアの開錠の音がして、ラピの部屋のドアが開いた。ローズマリーは慌てて立ち上がってジーンズの砂埃を払った。

「ラピ！」

ラピはいつものようにドアに鍵を掛けると、ずっとローズマリーの横を通り過ぎた。ローズマリーに気付いてないはずはない。だが、

そ知らぬ顔で通り過ぎようとする。

「ラピ！ ちょっと、無視するつもり！？」

ローズマリーはいつものようにラピに駆け寄って、ラピの腕を取った。

「！？」

だが、ローズマリーはとっさに手を放してしまった。ラピに無言で親の仇のように睨まれたのだ。ラピは、そのままテレポーターションしてどこかに行ってしまった。廊下の窓が風でかたかたと鳴っているのが虚しく聞こえた。ローズマリーはショックで呆然とした。ラピはローズマリーが秘密をこそそと探っていたことに腹を立てているのか。それとも、秘密を暴かれたことに怒っているのか。だが、次第に腹が立ってくる。

「何よ、あんなの秘密のうちに入らないわよ！」

ローズマリーは思わず零れてきた涙をぬぐって、気強く前方を見つめた。そして、テレポーターションする。ラピの行き先は分かっている。きっといつものところだ。

そこは、いつものように、人ごみで混雑していた。美味しそうな食べ物の匂いが、ここ、守護連盟の食堂を満たしている。ローズマリーがそこに足を踏み入れると、小さな異変に気付いた。いつもの食堂とは違い、一部に人だかりが出来ていた。それは、朝食の列ではないようだ。

「これはこれは、ラブリー王子。王子ともあるうお方が、このような場所でお食事をお取りにならなくともよろしいのではないですか？」

エメラルドのいけ好かない声が食堂に大きく響き渡った。その様

子だと、ラピも居るようだ。

ローズマリーは居ても立っても居られなくなった。魔法使いたちが口々に「ラブリー王子ですって」と興味本位で騒ぎ立てているからだ。エメラルドが早速嬉しげに言いふらしたのだろう。ローズマリーはがらがらの列に並び、食堂で働いている中年の女性に声をかけた。

「おばちゃん、この、サンドウィッチ二つ急いで包んで欲しいの！」

「はい、どうぞ！」

すぐに、サンドウィッチはラップに包まれ、紙袋に入れてくれた。

「ありがと！」

ローズマリーはサンドウィッチを手にとると、人ごみを縫うように掻き分けた。エメラルドが人を引き連れて、気持ち良さそうに話している。

「そもそも、どうして、ラブリーなんて、へんてこな名前を付けられてしまわれたのですか？」

エメラルドがいけ好かない笑みを浮かべて慇懃無礼な質問をしているのが見えた。周りからくすくすという笑い声が聞こえる。ローズマリーはギリツと奥歯をかみ締めた。人ごみを抜けると、中はドーナツのように空間が開けており、中にラピとエメラルドを見つけた。

「エメラルド！ いい加減にしなさいよね！」

ローズマリーが叫ぶと、エメラルドが目を丸くした。ラピも驚いてこちらを振り向いた。人ごみがローズマリーに一齐に注目するのが分かった。ローズマリーはそれでも気にしない。

「エメラルド！ あんた、いちいちウルサイのよ！ ラピはラブリーなんて名前じゃないわよ！ ラピはラピでしょ！」

「ローズマリーさん……」

ラピはローズマリーに気付いて、ほっとしたような表情を浮かべている。それは、ちいさな子供が迷子になって母親を見つけたときのそれに似ていた。

野次馬はがっかりしたらしく、すぐに人だかりが流れて消えた。

「なーんだ、嘘か」

「エメラルドがラピを苛めただけじゃね？」

魔法使いたちは次々といなくなり、みんなメニューを注文し始めた。時間を無駄にしたと嘆いているものも居る。エメラルドは一人焦りはじめた。

「でも、僕は確かにラピがラブリー王子だと呪文を聞いて知ったんだ！」

エメラルドは一人でみんなの注目を集めようと必死だ。ローズマリーは許せなくなった。名前を馬鹿にされることが一番我慢ならない。エメラルドに指を突きつけて叫んだ。

「庶民のあんたはラピが王子だって知って僻んでるのよ！ だから、ラピの名前を馬鹿にするんだわ！」

「なんだと！？」

「エメラルド、あんた、人の秘密を探っていないで魔法の練習でもすることね！ あんたより、ラピの方が魔法使いとしてもよっぽど優れてるわよ！」

エメラルドはグツと言葉に詰まった。その様子だと、凶星だったらしい。

「それでは、皆さん、失礼しました！ ごゆっくり食事を楽しんでね！」

ローズマリーはラピの手を掴んでテレポーテーションした。質問攻めにされるのは目に見えていたからだ。

ローズマリーは自分の部屋の鍵を開けると、ラピを問答無用で部屋に押し入れた。そして、鍵をかけて、額に浮かんだ汗を手のひら

でめぐって、ラピを振り返った。

「ふーっ！ やれやれだわ。ラピ、あんたも災難ね！ あ、サンドウィッチ貰ってきたからラピも食べるでしょ？ 飲み物はジュースでいいわよね？」

ローズマリーが忙しく食器を出していると、ラピが背後で笑った気配がした。

「ローズマリーさん、闘牛みたい」

今日、初めてラピが言葉を口にした。

「何よ、闘牛ってせっかく庇ってあげたのに失礼しちゃう！」

ローズマリーは怒ったふりをした。だが、口もとはラピが話しかけてくれた嬉しさで、締めまりなく緩んでいる。

「別に俺は昔からああたったから、言われ慣れてるけど——」
「そう？」

「でも、ローズマリーさんが俺の為に啖呵を切ってくれて嬉しかった。ありがと、ローズマリーさん」

ラピがとても嬉しそうに微笑んだ。ローズマリーの目に涙がこみ上げて鼻がツンと痛くなる。こんなに感動したことは久しぶりだ。魔法が出来た時よりも嬉しい。

「何よ……私の名前は散々馬鹿にしたくせに……」

「だって、ローズマリーさん怒ると面白いから」

「もう、ラピが二度と口を利いてくれないのかと思っ……！」

ローズマリーの感情の箍たがが外れた。ローズマリーはわあっと声を上げて泣いた。

「ど、どうしたの？ ローズマリーさん？」

ラピはローズマリーがいきなり泣いたので驚いているようだ。

「ラピに——嫌われたかと——思ったの！ 仲直り出来て——良かった——！」

ラピがいつもの調子で面白そうに笑う。

「ローズマリーさんってそんなに俺のことが好きだったの？」

「好きよ！」

ラピは驚いて目を丸くした。

「ローズマリーさ——」

「だって、私とラピ、友達でしょ！」

ローズマリーがそういうと、ラピは脱力したように笑った。

「ローズマリーさん、男女の間に友情が成立すると思ってるの？」

「えっ……？」

「まあいいけど。それで、ローズマリーさんは俺のこと聞かないの？」

「別に話したくなきゃ話さないでいいわよ。そもそも、ラピは男なのに、その……ラブリーなんて名前を付けるのおかしいって分かってるから」

ローズマリーが『ラブリー』の名を持ち出したことで、ラピの顔が傷に触れたときのように強張った。そして、ラピは古傷を癒すように嘆息する。

「良いよ、ローズマリーさんになら話しても」

そして、ラピはゆっくりと話し始めた。

第五十話 ラビの生い立ち

ローズマリーはサンドウィッチを手取る。このような時出なければ、チキンのサンドウィッチの美味しさに舌鼓を打っていたことだろう。ラビもサンドウィッチを食べながら話し始めた。

「俺の居場所ももう、向こうにバれてしまったことだし、時間がない。それに、ローズマリーさんはもう俺のくだらない人生に巻き込まれているから、どちみち話さなきゃならないってことは前から分かっていたし……」

「……どういうこと？」

「ローズマリーさんが俺の持っていたチュリチュカの腕輪に持ち主だと認められてしまったからだよ」

「ますます分らないんだけど」

「まあ、順を追って話すから」

「うん……」

「俺は、王子と言っても、正式な王子じゃないかもしれない」

「えっ、違うの？」

ラビは曖昧に笑う。

「リトリアの国王と女王は仲が良かった。でも、俺の母が国王に気に入られて、国王の子供を身ごもってしまった。つまり、俺の母は国王の妾だよ。国王の裏切りに怒ったのは、女王だった。姓名判断師に俺の名前を勝手に付けさせたんだ。勿論、女王は俺が男だっけ知ってた。憎しみを込めて『ラブリー』って変な名前を付けたんだ」

「そんな、酷い……」

ローズマリーは思わず目元を強張らせた。サンドウィッチの味がしなくなった。

「それで、怒ったのが、俺の母だよ。物心つくごろから、俺に徹底的に魔法を教え込んだんだ。剣などの武器も完璧に出来るように。何でだと思っ？」

「どうしてかしら？」

「俺を使つて女王の息子を殺すためだよ」

「えっ!？」

「女王の子供は息子が一人居る。でも、俺は兄さんが好きだった。兄さんは俺を庇ってくれたし、俺の名前を決してからかおうとしなかった。ジェイニーは俺のお付きだったけど、ジェイニーも俺に優しかったし、姉のようだった。二人は俺をラピって呼んでくれた。俺はこれでもそれなりに幸せだったんだ」

ラピの笑みにローズマリーは幾分か救われた気がした。

「でも、俺に転機が訪れた。十五歳のときだよ。隠居していた前国王つまり、俺の祖父が崩御されたので、国王が後継者を決めることになったんだ。祖父のされていた代々伝わるマルディクシオン・ブレスレット、ベベルディ口の腕輪に合ったものが次の国王になることになったんだ」

「ラピも呼ばれたの？」

「ああ、ラズ兄さんと一緒にな。だけど、ラズ兄さんの腕にはベベルディ口の腕輪は合わなかった。俺も無理だと思っていたけど――何が間違つたのか、俺の腕に合ってしまった。それから地獄だった。ラズ兄さんから暗殺者を差し向けられるし、口も利いてもらえない。それどころか、毎日、死と向かい合っていた。だけど、ある日、女王が崩御された。そして、国王もご病気になられた。それから、俺の母が王位に座ったんだ」

「もしかして、ラピのお母さんが――」

「そうかもしれないと思ったけど、証拠がない。もし、仮に俺の母が、女王と国王を手にかけたとして、俺に何が出来る？」

「ご、ごめん！」

「いいよ、別にローズマリーさんが謝らなくても。でも、俺は限界に来ていた。ある日、母がチュリチュカの腕輪を見せて、こう言ったんだ。『この腕輪に合う女性を探しましょう』と」

ローズマリーは右腕をラピに見せた。

「合っちゃったんだけど」

「どういう意味分かる？」

「そこはかとなく、嫌な予感がする……」

ラピは疲れたように笑った。

「チュリチュカの腕輪は俺の父方の祖母がしていたものなんだ」

「つまり……チュリチュカの腕輪は」

「俺のベベルディロの腕輪と一番相性の良い腕輪だよ。だから、この腕輪に合ったものが俺の結婚相手ってことさ」

ローズマリーは固まってしまった。脳みそが完全に思考停止している。

「おい、ローズマリーさん？」

我に返って、ローズマリーは頭を抱えた。

「ちよつと待ってよ。じゃあ、腕輪のせいでラピと私は結婚させられるってこと？　腕輪の相性がいいから？　本人たちの相性は最悪なのには？」

「……それで、俺は城から逃げた。そんで、守護連盟にかくまって貰っていたってわけだよ。だから、フロウさまもアイヴィーもそのことを知っている」

「ふ、ふーん……」

改まって、ローズマリーはラピを見る。このお気楽そうに見えるラピに波乱万丈な人生があったなんて考えられない。しかも、自分はやっかり巻き込まれており、婚約者になってしまったとは。ジェイニーがあれば、まじまじとチュリチュカの腕輪を見ていた意味を今理解した。

「なっ？　腕輪のこと恐ろしかっただろ？」

「う、うん……」

「以前はさ、ローズマリーさんみたいな短気で怒りっぽい女なんて本当に嫌だったんだけど」

「何ですって！？」

「……でも、今は、チュリチュカの腕輪に合ったのがローズマリー

さんで良かったって思うよ」

ラピはまっすぐにローズマリーを見てはにかんだように笑った。だが、その言葉にもローズマリーはムツと顔をしかめる。

「何よ！ 巻き込まれたのが私でいい気味とでも思っているの！？」それを聞いたラピは脱力したように額を押さえた。ため息まで付いている。

「ちっがうよ……ローズマリーさん、意味取り違えて怒るの止めてくれない？ 大体、ローズマリーさんに最初に会った時だってそうだっただろ」

ローズマリーは顔をしかめた。

「あれは、ラピが悪いんじゃない」

ラピは空笑いする。

「あのね……。せつかく人が助ける気になっていたのに、横から茶々出すだろ。助ける気も失せるだろ？」

「そうかしら？ 本気で助ける気あったの？」

「ローズマリーさんが逃げてくれたら、俺も魔法が使えたんだけどねー」

つまり、呪文を唱えるには名前を言わなければならないからか。あれは、そういう意味だったのか。短気なのもそうだが、すぐに喧嘩を売るのもローズマリーの悪い癖だ。ローズマリーはごまかし笑いを浮かべた。

「で、でも、こうして、私とラピは友達になれたじゃない！ 私が友達で良かったでしょ？」

ラピは大きなため息を付いた。ローズマリーは顔をしかめる。

「何よ、私が友達じゃ不満なの？」

「正直、不満だけど、ローズマリーさんと知り合えて良かったよ」嬉しいのか悪いのか分からなくて、ローズマリーは首をかしげる。「どういう意味？」

ラピがハッと笑い捨てた。

「分からないなんて、ローズマリーさん、頭悪いんじゃない？」

ローズマリーはラピに食って掛かろうとした。だが、ローズマリーが短気を爆発させる前に、インターホンが鳴った。

「――誰かしら？」

ここで、言い返せないのは不完全燃焼だが――。

ローズマリーは、名残惜しそうに立ち上がって、玄関まで歩いた。玄関のドアを開けると、ジェイニーが居てローズマリーはびっくりした。

ジェイニーはにっこりと笑って「こんにちは！」と、微笑んだのだった。

第五十一話 ジェイニーの来訪

「ジェイニーさんどうしたんですか？」

ローズマリーはいきなり現れたジェイニーに面食らって鳩のように瞬きした。ジェイニーは微笑みながら、ローズマリーの部屋を探る風に覗いた。

「ちょっとラピに用事があったね。ラピの部屋に居なかったからこっちかと思って」

「どうした？ ジェイニー」

ラピがのっそりと顔を出した。ジェイニーは世間話をするように、何気ない調子で話す。

「例の追っていた人物が見つかったのでラピに来て貰いたくて」

「えっ……？」

ラピの瞳が揺らいだ。それは、ラピの心情を物語っているようで、明らかに動揺しているのが見て取れた。

「もしかして、その追っている人ってラピの名前に関係のある人……？」

ジェイニーは驚いて顔から、さっと笑みを消した。

「ええ……その様子だと全部ラピは話したのかしら？」

「ああ、全部話した。名前のことも、俺が何者かなのかも、腕輪のことも……守護連盟中に広がってしまった」

「まだ知られたわけじゃ……」

「時間の問題だよ」

ラピが絶望したように話すと、ジェイニーは態度を改めて、その場に跪いた。

「そうでございますか。それでは、殿下、ローズマリーさまも同行願います」

ローズマリーはジェイニーの変わり身の早さに思わず笑ってしまった。

「ローズマリーさまってなんですか？」

ローズマリーは、お腹をくすぐられたときのように笑った。さまを付けられると、こそばゆい。ジェイニーも思わず笑みを漏らした。「それは、チュリチュカの腕輪に合ったお方ですから」

それを聞いた途端、ローズマリーは笑みが引きつるのが分かった。ラピの方を振り向くと、ラピは全然笑っていないかった。ローズマリーは何かが変わってしまったことをやっと感じ取った。

徐にジェイニーが立ち上がった。

「それでは、テレポーテーション失礼致します」

ジェイニーがローズマリーとラピの手を取った。瞬間的に景色が変わり、気がつく大きな古びた屋敷の中に立っていた。ジェイニーが手を放した。

「ここは……？」

ローズマリーは家の中を見渡した。石造りの屋敷のようで、どこか、もの寂しい感じがして、それが更に、家の中の室温を下げているようだった。掃除は行き届いていないようで、天井に蜘蛛の巣が見えた。

突然、ボンボンという音がいきなり鳴ったので、ローズマリーはドキドキしながら振り返った。丁度、年期の入った掛け時計が七時を示していた。ローズマリーは音の正体分かり、ほっとして胸を撫で下ろした。おどろおどろしい感じのする屋敷で、もし自分がここに一人取り残されたとしたら、すぐにこの不気味さで逃げ出すだろうと、ローズマリーは脳の片隅でそんなことを考えていた。「こちらです」

ジェイニーが先導に立ち、ラピとローズマリーをある一室に誘導した。曇った金のドアノブをジェイニーが回して開け、ラピとローズマリーを部屋に導き入れた。ぎいと、お化け屋敷のような音が不気味に響いた。そこには、明らかに城の騎士と思われる二人組みが立っており、真ん中の椅子に座っている、しなびた老いた男に、むき身の剣をかざし睨んでいた。老人の座る椅子は、ゆったりして座

り心地が良さそうな作りなのに、老人は居心地が悪そうに震えている。ローズマリーはそれを目にして少し、老人が哀れに思えてぎゅっと眉を寄せた。

「彼がそうでございます」

ジェイニーがそういうと、老人がラピに気付き、神を見たときのように目を輝かせ手を組み合わせ拝んだ。老人の口からは「おおお」と言葉にならない声が漏れている。

ラピは近づいて、騎士に下がるように指示した。騎士は一礼してその場から下がった。

「こんにちは、お爺さん。私が貴方に名前を付けられたラブリーです」

ラピが憎憎しげでもなく、笑みすら浮かべて老人に語りかけた。恨みを持つても良いと思うのだが、それをしないのはラピの優しさからであろう。すると、老人はしわしわの顔をくしゃくしゃにして涙を浮かべた。

「ああ、王子さま、申し訳ない事を致しました！ 女王さまの命令とはいえ、貴方さまに相応しくない名前を付けてしまいました！ それから、私は毎日貴方さまのことが気に病んで辛い気持ちでした

……お許してください。王子さま」

「気に病まないでください。私は、それなりに幸せでしたし。その気持ちだけで十分です」

ラピの表情からは嫌味など皆無だった。老人は安堵したように息を吐いた。

「これからは、貴方さまのお名前はラピでございます。姓名判断師ラウラの名を持って貴方さまのお名前を改名させていただきます」

老人がラピの手に触れると、優しい微かな光がラピを包んだ。光が消えると、ラピは、にこりと微笑んだ。

「リトリア・ラピが命じる！ 光よこの手に瞬け！」

ラピの手のひらには、まばゆい光の玉が出来た。ラピはその呪文を唱え終わると、手から光を消し、胸のつかえが取れたように息を

吐いた。そして、老人に微笑みかけた。

「ありがとう。お礼として、ラウラの身の安全の保証をしよう。お前たち、ラウラに光のよくあたる明るい屋敷を手配しろ」

「はっ！」

騎士たちはテレポーションしてどこかに消えた。老人はほっとしたようで、やっと椅子の背もたれに寄りかかり、すうつと目を閉じた。

「ラピ、良かったね！　これで、本当にラピになったね！」

ローズマリーがラピに駆け寄ると、ラピは殊更嬉しそうに目を細めた。

「ああ、ありがとう、ローズマリーさん」

ジェイニーがローズマリーの横に立った。ローズマリーはそれに気付いたが、どうして、彼女がローズマリーの横に立ったのかを気にすることはなかった。次の場面までは――。

「改名おめでとうございます。殿下。つきましては、リトリア城に帰っていただきたくお願い申し上げます」

ラピの顔色が陰しくなった。

「悪いけど、帰らないよ。母上にはうんざりなんだ」

「そうですか。では、強硬手段をとらせて頂きます」

次の瞬間、ローズマリーはジェイニーに羽交い絞めされて、剣を喉元に突きつけられていた。あっという間の出来事だった。

第五十二話 オーレリアの出迎え

「ジェイニーさん!？」

ジェイニーに羽交い絞めにされて、ローズマリーは反動的に一瞬息を詰まらせた。

「ローズマリーさまはお黙りください! 殿下はどうされます?」

このままローズマリーさまの喉をナイフで掻っ切っても宜しいですか?」

ジェイニーがナイフを、ちらつかせているが、不思議と恐怖は感じない。それは、ジェイニーの腕から生き物の証拠である暖かい体温が伝わってくるからか。それとも、ジェイニーがそんなことをするはずがないと思っているからか。

ラピはジェイニーを見て、文句を言いたそうに口をもたつかせていたが、はあっと本当に疲れたようにため息を付いた。

「分かったよ! 帰るって言っても本当に少しだから! ローズマリーさんを少し、母上にお見せしたらすぐに守護連盟に帰るから、それでも良いか?」

「十分でございます」

ジェイニーは満足そうに、につこりと笑ってローズマリーの首からナイフをどけた。そして、腰にナイフをしまうと、ローズマリーとラピの間に立ち、二人の両手を握った。

「それでは、テレポーターション失礼致します」

古びた屋敷のありさまが掻き消えて、次の瞬間には、大きな門の前に移動していた。それは、白い石造りの彫刻の美しい門だった。青空の下それはとても風景に映えていた。

門の前には武装した門番が二人居る。ジェイニーが手を上げてサツと指示すると、門番が扉をゆっくりと開けた。途端に、ファンフアーレが高らかに鳴る。奥に騎士達がずらりと並び、ラピに敬礼している。このもてなしを見てみると、ラピが帰ってくることは予定

通りといったところか。トランペットのマーチが軽快に演奏されている。どこまでも続きそうな赤い絨毯の先に宮殿が層気楼のように見えた。距離はそこからかなり遠いところにあるようだ。ローズマリーは思わず息を飲んだ。ラビは笑みを引きつらせていたが、それでも、前へと歩き出す。ローズマリーはあまりのことに立ちつくしていたが、ジェイニーに肩を押されて前へと歩み始めた。

「私、こんなところに来ていいのかしら……」

ローズマリーは申し訳なく思いながら、ジェイニーに話しかけた。ジェイニーは「勿論でございます」と言い、にっこりと歓迎するようにならうに笑った。

騎士達の並ぶ中央まで来たときだった。突然、ラビの数歩前に誰かがテレポーテーションしてきた。ぶつりと演奏が途切れた。

パツと花が舞ったのかと思った。それは、女の人でその人の身に着けている桃色のドレスが踊るように揺れたからだだった。しかも、その女の、柔らかで思わず吸い込みたくなるような花の匂いの香水が、彼女から風に乗ってこちらに届いた。それが、彼女の魅力を更に増しているようだった。彼女はドレスの花の中に身を沈めるようにして跪いた。

「ラビさま、お久しぶりでございます」

ラビは無言で進み出て、女の手を取った。そして、そつと手の甲に口付けた。そのことに、ローズマリーはいたく感心してしまった。ラビが本物の王子だということにやっと気付いたような新鮮な感じがある。

「オーレリア、久しぶりだね」

ラビは笑顔でそう言った。だが、ローズマリーの耳にはちっともラビは嬉しそうには聞こえなかった。ローズマリーをからかっているときの方がラビは、よっぽど楽しそうな気がする。それは、ローズマリーの邪推なのだろうか。

オーレリアは、やっと伏せていた長い、まつげを上げてラビを見て、とても嬉しそうに、そして、はにかんだように笑みを浮かべた。

化粧をしているが、とても美しい。ローズマリーはオーレリアが何者なのか気になった。

「ラピさまに、また、お会いできて嬉しゅうございます。噂によると、ラピさまは本当にラピさまにおなりになられたとか」

改名のことを言っているのだろうか、ローズマリーは思った。

ラピはようやく嬉しそうに笑った。

「そのとおりだよ。やっと、ラピになれたよ」

「おめでとうございます、ラピさま！」

ラピを応援してくれている人は沢山いるのではないか。ローズマリーは嬉しくなって頬を緩ませた。

ローズマリーがにこにこしながら喜んでいると、オーレリアの視線とローズマリーの視線がぶつかった。オーレリアに睨まれたような気がしたのは気のせいだろうか。すぐに、オーレリアはローズマリーに愛想の良い笑みを投げかけた。

「こちらが、ローズマリーさん？」

「初めまして、オーレリアさん、ローズマリー・ウィザーです」

少々気後れしながらローズマリーはお辞儀をした。オーレリアはとても嬉しそうに笑顔を装った。

「ローズマリーさん、お会いしたかったわ。後で、お話ししましょうね」

ローズマリーは「はい」と笑顔で返事したものの、オーレリアを好きになれないような奇妙な気分になった。何故好きになれないのかは分からない。まだ見ぬ悪い予感を秘めているからかもしれない。「ジェイニー、まだ、宮殿まで先があるけど、ずっと歩くつもりなの？」

ラピが話をさえぎった。ジェイニーは、ほっとしたように笑みを零し、ラピとローズマリーの手を取った。

「それでは、テレポーターション失礼致します」

「オーレリアさん、また後で」

ローズマリーは右手を振った。ジェイニーが、テレポーターショ

ンして、ローズマリーは、ラピとジェイニーと一緒にその場から消えた。

ラピとローズマリーの居なくなつた前庭からは騎士達の緊張が解けたような安堵したざわめきが聞こえる。オーレリアは顔から笑みを消し、ローズマリーの消えた後をじつと睨んでいた。すぐに、オーレリアのお付きの人が二人、テレポーターションしてやってきた。「オーレリアさま、ローズマリーさまはどうでした？」
「本当にチュリチュカの腕輪をしていたわ……見間違ひなんかじゃなかった……」

オーレリアは悔しそうに下唇を噛んだ。

「でも、良いわ。私が、チュリチュカの腕輪にローズマリーさんが相応しいか確かめてあげる」

憎悪に満ちたオーレリアの笑みは小悪魔のように艶めいていた。

第五十三話 ラピの拒絶

テレポーションした先は、煌びやかで眩暈のしそうな部屋だった。部屋は天井が高く、天井には天使の絵が描かれており、柱は植物のつるを模した彫刻がなされ、そして、壁などの縁には金で色づけられていた。ところどころに散りばめられた宝石がキラキラと大きな窓から入ってきた光を浴びて、落ち着きなく光っている。ローズマリーはそれを見た途端、緊張の度合いが一気に濃くなり、軽い眩暈と動悸がして、ジェイニーが握っていた手を思わず握り返してしまった。ジェイニーがくすりと、優しく微笑む。途端にローズマリーはジェイニーの手を放した。迷子の子供が大人にすぎること似ているようで、どこか気恥ずかしかったからだ。すっかりしなければと、ローズマリーが背筋を伸ばして前を見た。すると、部屋の奥から誰かがこちらにゆっくりと歩いてくるのが分かった。

それは、赤茶と黒の入り混じった品のある大人のドレスを着ている、中年の女性であった。まだ暑いにもかかわらず、長袖のドレスを着ていた。頭には銀色のティアラが光っている。彼女はラピと同じ金色の髪の手を持っており、綺麗に後ろでまとめられていた。「母上、ご機嫌麗しゆうございます」

ラピは進み出て跪いた。そして、女王が差し出した右手の甲に軽いキスを落とし挨拶した。その挨拶を目の当たりにしたローズマリーは、この方がラピの母なのかという感動と瑣末の緊張を覚えた。「久しいのう。すると、そなたがローズマリーか？」

ローズマリーは緊張して心臓ごと全身が跳ね上がった。慌ててスカートをつまんでお辞儀する。

「お、お初にお目にかかりますっ……とと」

よろけそうになり、身を起こすと、女王は厳しい目でローズマリーを見ていた。ローズマリーは慌てて、「申し訳ありません」と頭を下げた。すると、女王は諦めたように嘆息した。

「ジェイニー、確かにローズマリーの手にはチュリチュカの腕輪がはまっているのだな？」

「はい。嵌っております。ローズマリーさま、お見せして」

ローズマリーは緊張していたが頭を垂れて、すっと、右手を差し出した。女王が近寄り、ローズマリーの手に触れる。

「！？」

ローズマリーは、とっさに手を引つ込めそうになった。それほど驚いてしまったのだ。なぜなら、女王の手は死人のように冷えていたからだ。ローズマリーの心臓の音は自分で聞き取れるほど鳴り響いていた。

「なるほど、確かにチュリチュカの腕輪だな」

女王は薄く笑みを浮かべ、ローズマリーの手を放した。ローズマリーは気付かれないように安堵の息を吐き出した。

「田舎娘ということは関係ない。これから教育すれば良い」

「母上、そのことです！」

「ラピ、そなたは一週間後の戴冠式に出席して王位を継ぐのです」

「母上、それは兄上がすることであって——」

「ベベルディロの腕輪に認められたのはラピ、そなたです。そして、その後、ローズマリーと婚儀を執り行うのです」

「母上！」

「お黙り！ 私に逆らうことは許しません！ 分かったのなら、お下がり！」

女王がライオンのように吠えた。ジェイニーが慌ててラピとローズマリーの手を取った。そして、あっという間に別室にテレポーターションさせられたのだった。

上を見上げると、シャンデリアが宝石のようにキラキラ光っている。ローズマリーはそれを見ながら、はあっと、大きく息を吐き出

した。この部屋は、先ほどの部屋とあまり変わらないが、それでもローズマリーの緊張は少し解けた。人があまり居ないからかもしれない。侍女が二人ほど居るだけだ。

「ラピのお母さんってすごく怖いのね！」

「ああ、びっくりした？」

「うん」

ローズマリーは、自分の母とは全然違うことに驚いた。ローズマリーの母からは春の日差しのような暖かさを感じるが、ラピの母には、冬の厳しさのような冷たさしか感じない。

「ジェイニー、母上には挨拶したからもう良いだろ？　ローズマリーさんを放してくれ」

だが、ジェイニーはローズマリーをラピに届かないように後ろに下げた。

「駄目でございます。殿下には今日の晩餐会に出席して頂きます」

「ジェイニー、約束が違う！」

辺りの空気が張り詰めた。ローズマリーは気まずそうにジェイニーを見上げた。ジェイニーがラピを見つめる視線は、もはや、ラピがいうように姉などではない。女王の一人の家来の視線だ。女王の手先でしかない。ローズマリーはそう思ったのだが――。

「……殿下は、ローズマリーさまと、ご結婚なさるのはお嫌でございますか？　このまま、ご即位し、ローズマリーさまとご結婚なさった方が丸く収まるのでは？」

ジェイニーはふつと以前のような暖かな表情に戻った。希薄だと感じていたが、ジェイニーは誰よりもラピを思っていた。ラピもそれを感じ取ったようだ。ラピの目のこわばりが少し取れたような気がした。

「それは……」

ラピがローズマリーを見つめる。いつものお気楽なラピの顔ではない。真剣で威厳のあるその視線は王子の風格が良く出ていた。ローズマリーは見つめられて、うつかり、うろたえてしまった。ラピ

と結婚させられるのだろうか。チュリチュカの腕輪がローズマリーの心の中で喜んでいる。でも、流されてはいけない。ローズマリーはそう強く思った。だが、ローズマリーの心臓はそれに反して、ドキドキと軽くステップしている。

「ラピ、あのね」

ローズマリーが何かを言いかけたとき、ラピが頭を振った。

「やっぱり駄目だ。ローズマリーさんとは結婚する気にはなれない」
ローズマリーの台詞は喉に引っかかって出てこなくなった。自分は、何を言おうとしたというのか。台詞の代わりに目から涙が出そうになって、喉の奥がツンと痛くなった。それが、何故なのかはまだローズマリーには分からなかった。

第五十四話 オーレリアの企み

ローズマリーは、金で縁取りされた姿見の前で、人形のように固まっていた。ローズマリーはキラキラした水色のドレスを侍女達にあつという間に着せられてしまったのであつた。

ドレスの中のコルセットが苦しくてならない。鏡に映るローズマリーの顔は、覇気がなく曇っていた。どうして元気がないのかローズマリーは自分でも不思議なくらいであつた。それほど、ラビに酷いことを言われたわけでもない。ただ、ローズマリーと結婚するのが嫌だと言われただけなのに。

「何よ、当然のことじゃない!」

ローズマリーは「フン」と鼻で笑つて見せた。そうすると、少しばかり元氣を取り戻したような氣がした。ローズマリーでなくとも腕輪の相性が良いからということで結婚させられるのは嫌なはずだ。ラビとて当然の感情だといえる。ラビとなら結婚しても良いと思つていたとでもいうのか。ローズマリーはそこまで考えて、また「フン」と強気に鼻を鳴らした。

「そんなわけあるはずないわよ!」

そして、ローズマリーは考える事をやめた。どうして、自分がラビのことで、くよくよとしなければならぬのか。考えるのも、ごめんである。

ドアが開き、エプロンドレスを着た侍女二人がローズマリーの居る部屋に入つて一礼した。ローズマリーのお辞儀より、数倍美しい品のあるお辞儀だ。ローズマリーはそれも面白くない。

「ローズマリーさま、晩餐会の準備が整いましたので、ご案内致します」

ローズマリーはドレスのスカートを両手でつまんで、無言で侍女たちに付いていく。侍女たちは、二、三部屋横切り、階段を下りる。晩餐会の部屋はやけに遠いのだとローズマリーがため息を零しかけ

たときだ。

「あれ？」

ローズマリーは、王宮の外に出てしまったのである。だが、侍女たちは足早に歩いていく。晩餐会が外で開かれるとは珍しいのではなからうか。ローズマリーは、つまずきそうになりながら侍女たちの後を追った。侍女がスパイのようにこそそこそと辺りを見回している。そして「失礼します」と言い、ローズマリーの手に触れた。彼女たちの腕にレベル・ブレスレットが嵌っているのが見えたと思えば、次の瞬間ローズマリーはテレポーテーションさせられていた。

「ここは……？」

そこは、守護連盟のコロシアムのような競技場だった。ドレスの装いのローズマリーにはやけに不釣り合いである。

「ようこそ！　ローズマリーさま！」

鈴の音のような可愛らしい声が辺りに響き渡った。

「オーレリア！？」

それは、確かにオーレリアの声だとローズマリーは思った。オーレリアがゆっくりと歩いてくる。ローズマリーはオーレリアの姿に目を見張った。

「ど、どうされたんですか、その格好……」

「あら？　私にとっても良く似合うでしょう？」

「ええ、まあ……」

オーレリアは可愛らしく笑って見せた。ローズマリーはオーレリアの格好をまじまじと足の先から頭の先まで見た。その格好は確かに貴族の装いであったが、男のような格好なのである。騎士のように防具を身につけ、短いズボンにピンクのタイツを穿いている。長い皮のブーツを履き、とても、動きやすそうだ。そして、オーレリアの腕にはレベル・ブレスレットが鈍く光っていた。それにしても、ローズマリーには、オーレリアの意図が全然見えてこなかった。

「お越しくださったのには、ローズマリーさまを試させていたただこうと思ひまして」

オーレリアはローズマリーから離れるように向こうへ歩いていく。
「試すつて……？」

「それは、チュリチュカの腕輪に相応しいか、ラピさまの婚約相手に相応しいかですわ！」

そして、オーレリアは身振り手振りを交える。

「オーレリア・ゴールドアイが命じる！　かの人の動きを封じよ！
呪縛風！」

「きゃああ！」

ローズマリーは風に身を包まれる。風がローズマリーの肌をなぶると、ローズマリーの皮膚はピリピリとした鈍い痛みに襲われた。

「な、何するのよ！」

ローズマリーは不意打ちに顔を真っ赤にさせて怒った。ローズマリーもお返しにと呪文を唱えようとした。

「ローズマリー・ウィザーが命じる！」

だが、呪文を詠唱しようとする、ローズマリーの体に電撃が走った。

「きゃあああああ！」

ローズマリーは、ほとばしる電気に体を引きつらせた。体を貫きそうな静電気の何十倍もの痛みが走る。ローズマリーはなす術もなく地面にひれ伏した。オーレリアが高い声で、さも可笑しそうに笑った。

「その呪文もご存じないのですわね！　その呪文は全ての呪文を封じる呪文ですわ。勿論、呪文を唱えなくてもかまわないテレポーションションも出来ませんから、諦めることね！」

ローズマリーは、それでもテレポーションションしようと試みた。だが、代わりに電撃が走った。ローズマリーは今度こそ、ぐったりとして動かなくなった。

「オーレリア・ゴールドアイが命じる！　二の武器よ我が手に！」
オーレリアは呪文で現れた長い剣を手にして、一振りした。

「こんな女がラピさまの運命の人だなんて笑っちゃうわ。私の方が

貴方の何百倍も特訓してラピさまに相応しいように頑張ったのに、
何で、こんな女の腕にチュリチュカの腕輪が合ったりしたのかしら
！」

オーレリアは吐き捨てるように一人言ちた。その声からは可愛らしさのかけらも無くなっていた。あるのは、憎しみと嫉妬か。オーレリアは動けなくなったローズマリーの体を転がして、仰向けにさせた。そして、ローズマリーの右手を九十度上げて地面につけた。
「何を、するつもりなの……？」

ローズマリーは意識が朦朧とするのを感じながら口を利いた。

「腕輪を返してもらうのよ。それは、もともと私のものだよ」

「えっ……？」

「分からない？ 腕輪が外れないなら、私が剣で腕を切り落として腕輪を返してもらって言うてるの！」

「……！」

オーレリアは剣を振り上げた。ローズマリーはやつと意味を理解した。肌が泡立つような恐怖を感じてぎゅっと目を閉じた。剣が太陽の光でキラリと煌くのが、瞼の裏に赤く焼きついた。

第五十五話 逃げられない運命（R - 15）

ザクツと剣が鋭く地面に刺さる音がした。激しい心臓の音がローズマリーの胸を叩く。一時の間なのにそれは長い間だ。だが、痛みも何も感じないのはどうしてだろうか。

ローズマリーは浮遊を感じて目を開けた。すると、間近にラピが居た。爽やかな香水の匂いがした。どうやら、ローズマリーを抱えてラピが横に飛んだようだ。ローズマリーのピンチのせいかな、サウザンドと戦ったときのように、ラピの瞳はキラキラと宝石のように光っている。

「ラピ……！」

ローズマリーは、ほつと息を吐き出した。ラピにゆっくりと、地面に降ろされたが、ラピはローズマリーを放すまいとしっかりと抱きしめている。ラピはオーレリアを睨んだ。

「オーレリア！ 一体どういうことだ！」

「ラピさま！？ どうしてここに？」

オーレリアは激しくうろたえている。

「チュリチュカの腕輪とベベルディ口の腕輪は対の腕輪だ。ローズマリーさんがピンチになれば、俺は自ずと彼女の元に召喚される」

「そんな……」

オーレリアが持っていた剣に、ラピの目が留まった。

「まさか、ローズマリーさんの腕輪が嵌った手を切り落とそうとしたのか！？」

ラピに怒鳴られてオーレリアは打たれたように身を強張らせたが、負けじとラピに向かって「そうですわ！」と開き直った。

「だって、ラピさまだってこんな女と結婚するのはお嫌でしょう！？ 私のほうがよっぽどラピさまに相應しいじゃありませんか！」

「……俺は、ローズマリーさんを愛している！」

ローズマリーはラピの告白に驚いた。オーレリアはショックだった。

たらしく息を詰めた。そして、泣くのを我慢するように震えている。
「本当ですか？ 嘘ですわよね？ でしたら、証拠をお見せください！」

ラピは一瞬ためらったが、静かに嘆息した。そして、ローズマリーの方を向き直る。

「ら、ラピ……？」

ラピが真剣な目でローズマリーを見つめる。ローズマリーはラピの宝石のような青い瞳に吸い込まれそうになった。ラピの目に懇願の色が覗いたと思った次の瞬間――。

「！？」

ローズマリーはラピの手に引き寄せられて、口付けられていた。

「……っ！？」

ローズマリーは動転してしまい、目を白黒させた。心臓の音がまた激しさを増す。ラピからどうにか離れようとして、ローズマリーはラピの腕の中で溺れるようにもがいた。だが、ラピの力は強くてびくともしない。それどころか、ラピのキスはどんどん深くなっていく。

だが、動揺したのはローズマリーだけではない。オーレリアも激しく動揺して、

「もう、良いですわ！ 分かりました！」

涙声で怒鳴ると、その場から逃げるようにテレポーションして消え去った。

ラピはようやくローズマリーから離れた。ローズマリーは息を切らして、その場に膝を付いた。ラピが笑った気配がした。

「大丈夫？ ローズマリーさん」

「ラピ、あんたね……」

ローズマリーは打たれたときのように頭がくらくらしていた。もしかすると、ラピはもの凄くキスが上手いのではないだろうか。ローズマリーは恨みがましそうにラピを睨んだ。飄々としているラピが憎らしい。ラピがローズマリーを支えるようにして立たせた。

「ごめんね、ローズマリーさん、守護連盟に帰ろうか」

ラピが優しくローズマリーの手を取る。ラピの目が光ったと思いきや、体が伸び縮みするような感覚がした。ローズマリーが気づいた時には魔法使いの寮のラピの部屋の中にへたり込んでいた。

「はぁ、戻ってこれた」

ローズマリーはドレスの姿のまま、その場にやつと一人で立ち上がった。よく見ると、ラピも王子らしい格好をしていた。ふと、ラピと目が合って、ローズマリーは思わず目をそらした。

「私、自分の部屋に帰るね！」

そういうと、ラピが傷ついたような顔になった。不思議なもので、ラピが傷つくと、ローズマリーも傷ついたような気分になった。これも腕輪のせいなのだろうか。ローズマリーは、慌てて、ラピの方を振り向く。

「でも、私はラピのこと嫌いじゃないからね」

「ローズマリーさん」

ラピの表情が花に水をやった時のようにパツと生き返った。なんとなく、気恥ずかしいような気分になった。

「じゃ、じゃあね」

ローズマリーがドレスを引きずって行こうとすると、ラピがまたローズマリーの手を握った。

「待って、ローズマリーさん！ そのドレスは一人で着替えられないだろ？」

「……いやらしい」

「ちっがうよ。そのドレスはボタンとなくて、縫い付けてあるだろ？ だから、一人じゃ脱げないと思うって言うてるの」

そういえば、ローズマリーは、着替えるとき縫い付けていたことを思い出した。ローズマリーがラピに目をやると、ラピはにこにこしていた。ローズマリーがじと目で睨むと、ラピはコホンと咳払いした。そして、ラピは、ローズマリーから視線を外して、独り言のように言う。

「ローズマリーさんって、女の友達っていないんじゃないかなあ？ 一体誰に脱がしてもらうんだろうなあ？」

「分かったわよ！ ラピにお願いするわよ！ でも、変なことしないでよ！」

「了解！」

ラピがにこしながらハサミを持って来た。ローズマリーの後ろみごろを閉じるように縫い付けていた糸を器用に切っていく。ハサミの小気味よい音が響く。すると、ドレスがするりと脱げそうになり、ローズマリーは慌てて、身を屈めた。

「あ、ありがと！」

「待って、コルセットも後ろで綴じるタイプみたい」

「えええ！？」

確かに、侍女に着せられたとき、コルセットを後ろできつく紐で綴じられた。

「じゃあ……お願い」

ラピは器用にするするとコルセットの紐を解いた。きつく締められていたので、ローズマリーの口からほっと安堵の息が出た。ずり落ちそうになったのを慌てて、手で押さえる。

「ありがと、じゃあね……」

ローズマリーは脱げそうになったドレスを引きずっていこうとした。

「！？」

だが、ラピに腕を引っ張られ、引き寄せられると、また抱きしめられた。ローズマリーは今度こそ完璧に動転してしまった。

「ら、ラピ！ ちょっと、冗談きついわよ！」

「俺、本当にローズマリーさんのことが好きなんだ！」

ラピがローズマリーを抱きしめる手に力を込めた。ローズマリーは揺さぶられたような強い衝撃を覚えた。心臓が破裂しそうに鳴る。

「ラピ……！」

「チュリチュカの腕輪がローズマリーさんの腕に合ったのも、べべ

ルディロの腕輪が俺の腕に合ったのもきつと運命だよ」

「運命って、ラピらしくないわよ！」

「ローズマリーさんのせいだよ。だから、俺はローズマリーさんを俺のくだらない運命から逃がしてあげない」

「……」

ローズマリーはラピに足をすくわれて、押し倒されてしまった。

「ローズマリー」

初めてラピがローズマリーを呼び捨てにした。ローズマリーは囚われた蝶の気分が分かる気がした。軽い眩暈がローズマリーを襲う。
「ねえ、諦めて」

ラピの声がローズマリーの耳元で甘く溶ける。そして、ローズマリーとラピは、静かな夜の中に落ちていった。

第五十六話 新たなる来訪者

瞼の中にカーテンの隙間から漏れていた光が割り込んできた。浅くなつた眠りの中、ローズマリーは体に任せるまま寝返りを打った。いつもとは異なるベッドの感触と、隣に誰か居るような気配が違和感を生んでいた。だが、その違和感はまるで肌に馴染むかのようで嫌ではなかった。次に、柔らかなものが頬に降ってきて、チュと音を立てた。

「ローズマリーさん、着替えを隣から持ってきて来たから」

「んー……」

ラピの声になんとなく返事をする。向こうで着替えているような衣擦れの音が聞こえてきた。そのせいで、ローズマリーは急に昨日あつたことを段々と思い出した。隣を見れば、ラピは既にズボンを穿いており、上を着ている最中だった。慌てて、布団を被って寝たふりをする。

初めて部屋を紹介された時に、喧嘩になったことを思い出した。

あのかきは、襲われるので隣が嫌と言ったローズマリーに対し、ラピは腕輪が守ってくれるので安心しろと言った。あは、ラピの口からの出任せということが昨日ようやく分かった。

「ローズマリーさん？ まだ、寝てるの？ 体は大丈夫？」

ラピがベッドの横にやって来て優しく尋ねてくる。まったくいつものラピらしくない。ローズマリーがどんな顔をして良いのか分からずに布団をひたすら被っていると、ドンドンとドアを叩く音がした。

「誰だろう？」

緊張したラピの声。ラピがベッドから離れてドアの方に歩いていった。そのため、ローズマリーはほっと胸を撫で下ろした。

「ラピ！ 俺と勝負しろ！」

それは、エメラルドの声だった。

「勝負って？」

ラピの声は面倒くさそうに聞こえる。

「魔法使いとしてどちらが上か勝負しろ！ どちらが強いか思い知らせてやる！」

「分かった、分かったから！」

ラピが部屋から慌てて出て行った。ローズマリーを起こさないように気を配ったのだろう。ドアに鍵がかかる音がする。ローズマリーはようやくベッドから勢い良く起き上がった。

「シャワーよ！ シャワーしょ！」

ローズマリーはラピの部屋のバスルームに消えた。そして、綺麗に洗うと、体を拭いて服を着た。そして、逃げるように自分の部屋に帰っていった。自分の部屋で送風型の乾燥機で髪を乾かす。

その間、ラピのことをずっとぼんやりしながら考えていた。思い返すのはラピの髪の毛の流れる音と、息遣いと、包み込むような優しい笑み。いつの間にかそれが、ローズマリーの心に消えないように刻まれていた。

我に返ると、インターホンの音が鳴っていたことに気づいた。

「は、はい！」

ラピだろうか。ローズマリーがドアを開けると、知らない男が立っていた。

「ローズマリーさんだね？」

それは、ラピと同じ青い目をした男の人だった。そして、彼は、ラピより大人びて見えた。髪の色は茶色で、それを後ろで束ねていた。ローズマリーは、いぶかしげに眉を潜めた。

「はい、私がローズマリーです。貴方は……？」

すると、後ろから白い手袋をはいた手が伸びてきて、ローズマリーの口もとにハンカチを押さえつけられた。抵抗しようとしたため、ガチャンとドアに体がぶつかる。

「！？」

ローズマリーはそれでも激しく抵抗しようとした。相手の足を踏

んだ。腕を引つかいた。だが、その手は大人が子供にそうするよう
にびくともしない。それどころか、意識が朦朧としてくる。

（眠り薬……！？）

気づいた時にはもう遅い。筋肉が馬鹿になったように力が入らな
くなる。瞼が次第に落ちてくる。最後に見たのは青い目の男がニヤ
リと何か企んでいる風に笑うさまだった。

そして、ローズマリーは深い眠りの中に落とされた。

コロシウムの中は女の黄色い歓声が飛び交っていた。それもその
はず、ラピが呪文を使いこなして、エメラルドを倒したからだ。ラ
ピが呪文を使ったことで、守護連盟中にラピがリトリアの王子だと
いうことも伝わってしまった。

「次こそは、負けないからな！」

「ああ」

エメラルドは差し出したラピの手を握って立ち上がった。エメラ
ルドは悔しそうにしたものの、吹っ切れたような笑みを見せた。

「本気でラピにぶつかって、君の強さを知ったよ。名前を馬鹿にし
て悪かった」

エメラルドはラピが王子だと分かってても敬語も何も使わなかった。
だが、エメラルドは一人の人間としてラピを認めたということが伝
わってくる。ラピも嬉しそうに微笑んだ。

一人の人物が拍手をしながら近づいてきた。その男は沢山の騎士
を連れている。途端に、歓声がどよめきに変わった。

「流石、ラピだな」

それは、ローズマリーをさらった男だった。だが、ラピはそのこ
とをまだ知らない。

「ラズ兄上！？ どうしてここに？」

エメラルドが驚いたような顔をしている。ラズは勝ち誇った顔をして笑った。

「それは、ラピが一番知っていることではないかな？ 一緒に来てもらおう」

「嫌だと言ったら？」

ラピとラズの間には緊張が走った。だが、ラズは意に介せず、続ける。

「お前の一番大切なものがどうなってもいいのなら」
「まさか……！？」

ラピの目が動揺したように揺れる。

「そのまさかだ。ローズマリーは預かっている」
「ラピ！」

エメラルドが声をかけたが、ラピはエメラルドを手で制した。

「分かった、一緒に行こう」

「良い、心がけた」

エメラルドが呆然と見守る中、ラピとラズはどこかに消えた。ラズが連れてきていた騎士達も、いつの間にか居なくなっていた。ロシアムのどよめきだけが未だ人事のように続いていた。

第五十七話 思いがけない加勢

秋の夕暮れの冷たくなった風がローズマリーの顔に吹き付けた。寒々しい風はローズマリーの眠気を覚ますのに十分だった。ローズマリーは、煩わしく顔をしかめて、そして、やっと目を開けた。

「私……！？」

ローズマリーが辺りを見回すと、騎士達が辺りを警備していた。自分はどうかやら木の幹にロープでしっかりと胴体をくりつけられているようだ。そして、ここが木を伐採して開かれた森の中らしいということだけが分かった。

ローズマリーは縄抜けが出来ないものと試みたが、ロープがぎりぎりと音を立てるだけで何も変化はない。ローズマリーが逃げ出さないように見張っている騎士と目が合った。だが、その騎士は馬鹿にしたように薄く笑っただけだ。

「何よ！ あんた私に言いたいことでもあるの！」

ローズマリーが怒鳴ると、騎士はすっと目をそらした。どこまでも、馬鹿にしている。

その時だった。風がひゅうと吹いたような音がして、誰かがテレポーテーションしてきた。

「ローズマリーさん！」

それは、ラピだった。あのラピに似た男も一緒であった。その男は騎士と一緒にあってラピを拘束していた。

「ラピ！」

「兄上、ローズマリーさんを放してくれ！」

ラピの台詞にローズマリーは驚いた。

「兄上ってあんた、ラピのお兄さんなの？」

「ええ。私はラズ・リトリア。将来のリトリア国の王です」

「えっ！？ ということ？ リトリアはラピが……」

「私は国王になることには興味がありません！ だから兄上が国王

におなりください！」

「勿論そうするつもりだ。だが、周りは私が国王とは認めていない」
「どうして？ ラピもそう言っているんだし、国王になりたければ、なればいいじゃない！」

「駄目なですよ。ラピにベベルディ口の腕輪が合っている限りは世間が認めない」

「……ラピにどうするつもり！？」

「腕輪が取れるときは、死ぬときだ。だが、可愛い弟を殺すつもりはない。腕輪のはまっている腕を切れば、済むことだ」

ローズマリーは真っ青になった。

「や、止めて！」

「兄上がそうしたければ、すればいい。だが、ローズマリーさんは助けてくれ！」

「ラピ……！」

ローズマリーはラピの台詞に感動して目頭が熱くなった。ローズマリーとてラピが傷つけられるのは嫌だ。

「分かっている。ローズマリーは、ラピから腕輪を奪った後、私と婚約するのだからな」

薄く笑うラス。ローズマリーは、ラスを睨んだ。

「なんですって！ 嫌よ！ 私が好きなのはラピだけなの！ あんたとなんか、結婚なんてしないわ！」

「ローズマリーさん……！」

「腕を切るっていうんなら、私の腕も切れればいいでしょ！」

「そうか、ならば、望みどおり、二人とも手首を切り落としてやる！ おい、ローズマリーの縄を切って、取り押さえる！」

あっという間に、縄が解かれ、ローズマリーは騎士達に取り押さえられた。

「止める！ ローズマリーさんは無事に放せ！」

「安心しろ！ どちらも、仲良く切り落としてやる！」

ローズマリーもラピも騎士達にあっという間に押さえつけられて

しまった。ラズが剣を抜く。ギリリと日の光を受けて剣が光った。
ローズマリーとラピはぎゅっと目を閉じた。

「うわっ、何だ!？」

ラズが声を上げたので、ローズマリーもラピも目を開けた。

ローズマリーとラピの腕輪が激しく光っている。

「……!」

突然、突風が吹いて、ラズと騎士達を吹き飛ばした。

「ローズマリーさん!」

ラピがローズマリーを守るように抱きしめる。

「一体、何が……」

風が段々と止むと、二人の前に思いがけない人物が立っていることが分かった。

「は、母上!？」と、ラピが最初に言葉を発した。ローズマリーもラピの見ている方向を見る。

それは、ラピの母の女王だった。相変わらず袖の長いドレスを着ている。彼女のドレスのスカートが風にはためいた。

ラピはとても意外だったらしく、目を瞬いて、呆然と女王を見ている。ローズマリーも何が起きているのか、まったく分からない。

ラズが立ち上がり、ポケットの中から、レベルブレスレットを出して手につけた。ラズが身振り手振りを交えて呪文を唱えようとした。だが、女王が獣のように吠えた。それが衝撃波となり、ラズを再び、吹き飛ばした。

「おのれ、父の妾の分際で!」

「おだまり! リトリアの王になるのは私の息子だ! そして、各国に戦争を仕掛け、世界を私のものにするのだ!」

「母上何を仰っているのですか!？」

ラピは驚愕して、女王に駆け寄ろうとした。だが、ラズが先に呪文を唱えた。風の刃の呪文だ。女王はそれを真正面に受けたが、彼女はびくともしない。だが、女王のドレスの長い袖がめくれ上がった。

「!？」

ラピとローズマリーは驚いた。女王の両腕には腕輪が無数に嵌っていたからだ。レベルブレスレットではない。マルディクション・ブレスレットだ。

「どうして!？ ラピのお母さん、魔法が使えるの!？」

「いや、使えないはずだ! あんなにマルディクション・ブレスレットをしているだなんて、まるで——」

ラピの言葉が続かない。ローズマリーは息を飲んだ。ラピの言うおうとしていることはローズマリーも分かったのだ。

——まるで、ダークマインドの化身のような——

ローズマリーとラピは不安に思い、目を見合わせた。

第五十八話 腕輪の異変

「母上、お止めください！ そんなダークマインドの化身のような！」

ラピが悲痛に叫ぶと、それを傍で聞いていたラズが笑い声を上げた。

「ははは、そうか！ ようやく分かったぞ！ この女、最初からダークマインドに心を蝕まれていたのだ！」

ローズマリーは焦燥した。ラピの台詞のせいで、ラズにラピの母を討つ動機を与えてしまったのではないかと。

「そんなことは——！」

ラピもそう思ったらしい。慌てて、言いつくろうとしたが、けたたましい笑い声がそれを打ち消した。女王である。

「ようやく、気付いたか！」

女王の声の調子がおかしい。まるで、別人のような——。

「私はダークマインドの化身。この女の憎しみは美味であったぞ。じわりじわりと、この女の意識を蝕んで体に乗っ取った」

「そんな……！」

ローズマリーは愕然とした。ラピの母を攻撃するようなことはできない。ラピとて同じはずだ。

「この女は権力者だ。国の王だ。だから、私はこの女の体を使い、各国に戦争を仕掛けるのだ！」

「そんなことをしたら、リトリアが負けてしまう！」と、ラピが叫んだ。リトリアは小さな国だ。今まで、平和に周りの国と均衡を保ってきたと言うのに、戦争など仕掛ければ、周りの国にすぐにつぶされてしまう。だが、女王は笑う。

「そんなことは関係ない。戦争をすれば憎しみ悲しみが生まれる。私はそれを食べてまた大きくなる。そして、人の心を蝕み、最終的には世界を真つ黒な闇で埋め尽くすのだ！」

女王は世界に君臨するように両手を天に掲げた。雷が一筋光った。
「させるか！ ラズ・リトリアが命じる！ かの人の動きを封じよ！
呪縛風！」

ラズが身振り手振りを交えて呪文を唱えた。

「この呪文は……！」

ローズマリーはこの呪文を知っていた。オーレリアがローズマリ
ーの呪文を封じるために使ったあの呪文だ。

女王が呪文を使おうとした。だが、呪文の効果である電撃で体の
自由を封じられてしまう。

「これで、お前も終わりだ！」

ラズが呪文を唱えようとした。だが、それより先に、ダークマイ
ンドの体が赤い光に包まれた。ラズの唱えた風の矢の呪文を跳ね返
した。

「母上も兄上もお止めください！」

「ラピ！ 駄目よ、それ以上前に出たら、巻き込まれちゃう！」

二人を止めようと前に出ようとするラピの腕をローズマリーは必
死で掴んで引き止めた。

そのとき、吠えるような笑い声が辺りに響き渡った。

「まったく、腕輪と言うものは忌々しいものだ！ もっとも、魔力
を腕輪に封じたのも私だが！ そんなものは、こうしてくれる！」

女王が手を横に振る。すると、まず、ラズのレベル・ブレスレッ
トが力を失い、赤くさびた鉄の輪になった。

「な、なんだ、これは……！」

ラズは激しく動揺している。魔法を使おうとしたようだが、まっ
たく動作しないらしい。ラズは女王を見ていたが、後ずさりして、
騎士と一緒にその場から逃げ出した。

そして、ローズマリーとラピにも異変が襲った。

「マルデイクション・ブレスレットが……！」

マルデイクション・ブレスレットは激しく明滅して、ローズマリ
ーとラピの腕から無数の蛍が飛び立つように消えてしまった。無数

の流れ星のような腕輪の魔力の光が女王に集まる。最初から、腕輪の呪縛などなかったかのように体がすつと落ち着く。

女王はすうつと魔力を吸い込んで風船のように膨れている。

「母上！」

「行かないで！ 危ないわよ！」

ラピは叫んで駆け寄ろうとしたが、ローズマリーが必死で止めた。

「どうしよう！ 腕輪がないと私たち何も出来ないわよ！」

「方法はある！」

ラピはそう言って、懷から水晶のようなものを取り出した。

「これは？」

「リトリア城に代々伝わる神秘の御魂^{みたま}。父が、倒れる前に俺に託したものだ！ これで、浄化するんだ！ ローズマリーさんも手伝ってくれ！」

「うん、分かった！」

ラピが水晶を手のひらに乗せる。その水晶の上にローズマリーが手を置いた。

「ラピ・リトリアが命じる！」

「ローズマリー・ウィザーが命じる！」

『神秘の御魂^{みたま}よ、呼応せよ！』

ラピとローズマリーの声が辺りに振動するように響き渡った。水晶のような神秘の御魂がまばゆく光る。そして、辺りに真つ白な光が迸る。辺りを真つ白に染め上げて――。

女王を支配していたダークマインドの化身がおどろおどろしい悲鳴をあげた。そして、集まっていた魔力が女王を中心にまた流れ星のような光になり、辺りに散らばった。

ラピとローズマリーは女王が倒れていることに気付いた。

「母上！」

「女王様！」

ラピとローズマリーが駆け寄り、ラピが女王の体を起こした。ローズマリーが女王の体に触れる。すると、驚いて、ローズマリーは

手を放した。女王の体は酷く冷たいのである。女王の手を取って脈を計るが鼓動はなかった。息もしていない。

「——死んでる……」

「ははうえ……母上——つつつ！」

ラピの慟哭が辺りに響き渡った。

空を見上げるとねずみ色の雲が空を覆っていた。ダークマインドの雲ではない。普通の——。はらりと、雪が降ってきた。

第五十九話 呪縛から解き放つ

その後、女王の国葬がリトリア城で、しめやかに行われた。ラピが、国王の座をラズに譲る代わりに、女王を無罪とし、葬儀を国で行うように取引したのだ。ローズマリーも国葬に出席しようと思った。だが、ラピが言ったことは。

「ローズマリーさんはもうマルディクションブレスレットの呪縛から解放されたんだ。もう、俺とは関係がない」

これには、ローズマリーは本気で激怒した。

「何よ！ その言い方！」

ローズマリーがラピに詰め寄ると、ラピが両手でローズマリーの肩を押さえた。これ以上近づくなと言っているような拒絶。だが、ラピの手が震えている。それでも、ラピはローズマリーへと笑顔を浮かべて顔を上げた。

「俺、ローズマリーさんが大嫌いなんだ。だから、もうローズマリーさんを俺から解放してあげる。さようなら」

そうして、ラピはローズマリーをテレポーションさせた。辺りの景色が変わり、あつという間に、守護連盟のローズマリーの部屋になった。魔法は腕輪に封じ込められた魔力が世界に飛び散ったために、腕輪がなくても、また魔法が使えるようになったらしい。

ローズマリーは愕然とした。ラピに言われたことがまだ、信じられないでいる。

「俺、ローズマリーさんが大嫌いなんだ」ラピは確かにそう言った。ローズマリーはその場に崩れ落ちた。涙が後から後から湧いてくる。「ラピの馬鹿！」

思い出すのは、ラピと喧嘩ばかりしていたころのこと。だが、楽しかった。ラピが隣に居てくれて楽しかった。それなのに、ラピはローズマリーを振った。ずっと、傍にいてくれると、あの夜に思ったのに。

どれくらいそうして泣いていただろうか。インターホンが突然鳴った。ローズマリーの心臓が飛び上がった。もしかして、ラピが謝りにきたのだろうか。ローズマリーは涙をぬぐって、立ち上がった。玄関まで走って行って、鍵を開ける。

「ラピ！」

だが、そこに居たのは、アイヴィーだった。ローズマリーが、ラピの名前を呼んだせいか、アイヴィーの顔が曇った。だが、それは一瞬のことで、またアイヴィーの顔に嬉しそうな笑みが灯る。

「アイヴィーさん、どうなさったんですか？」

「ローズマリーさん、聞いてください。私は、ジュリアさんと別れました」

「えっ？ ど、どうしてですか？」

ローズマリーは一体何事かと、目を瞬いた。面食らっていると、ローズマリーの手をアイヴィーが握り締めた。

「アイヴィーさー………？」

ローズマリーは驚いた。アイヴィーはローズマリーの手を握り締めても、一向に電気に痺れた様子もない。ただ、アイヴィーは嬉しそうに笑みを浮かべている。

「私のマルディクシオン・ブレスレットが手から消えたんです！だから、私は、ローズマリーさんに触れることが出来る！」

ローズマリーは、ハツとしてアイヴィーの顔を見つめた。

「私は、ローズマリーさんのことがずっと大好きでした」

アイヴィーはそう言いながら、ローズマリーを包み込むように抱きしめた。だが、ローズマリーはそれを振りほどいた。

「ローズマリーさん？」

「ごめんなさい」

ローズマリーは泣いていた。本当なら、ラピに告白してもらいたかったことだ。アイヴィーの優しさがラピとの思い出を消すように割り込んでくる。

「ごめんなさい」

ローズマリーはその場に蹲ってしまった。

第六十話（最終話） 春の訪れ

アイヴィーは神々の館の受付で、椅子に座って、ぼんやりと空を見ていた。まだ、朝は早いので、空には朝焼けが眺められる。魔法使いたちはまだ仕事を貰いに来てはいない。

「……ヴィー、アイヴィー！」

アイヴィーは呼ばれていることに、ようやく気付いて振り向いた。
「はい！ フロウさま、どうかなさいましたか？」

「先ほどから、呼んでいるのに、上の空ではないか」

「もうしわけありません。少し、傷心で」

「ローズマリーに振られてしまったのか？」

「ええ。しかも、ローズマリーさんは、守護連盟を辞めて実家に戻られましたし、ラピに文句を言おうにもラピはリトリア城ですし？」
フロウはフツツと笑みを浮かべた。

「そうか、そうか、だからアイヴィーは最近腐っていたのか」

「魔法使いたちに八つ当たりでもしないとやってられませんかよ」

お陰で、魔法使いたちには煙たがられるようになってしまった。

それでも、猫かぶりをしているよりは楽だ。これもローズマリーの影響かもしれない。

「それでは、ローズマリーに会いに行つてはどうだ？」

フロウがいたずらっぽく笑った。アイヴィーは嘆息して笑った。

「そうですねえ」

そして、アイヴィーは徐に立ち上がった。

「ローズマリー、今日はじゃがいもの収穫だからね」

「うん、分かってる！」

ローズマリーは農作業の服を着て、長靴を履いて畑に出る。やはり、実家は心地よいと思う。家を空けている間に、姉はいつの間にか出来た恋人の家に嫁いでしまったようだ。両親も村人もローズマリーの帰省を喜んでくれた。姉が居ない分、ローズマリーを大事にしてくれている。

ローズマリーは毎日農作業に精を出して、今は魔法とはまったく関係のない生活をしている。守護連盟の思い出話を語ることもなくなつた。

「今日は、天気がいいわね」

空は雲ひとつなく真つ青だ。もうすぐ冬だと言つのに、太陽の日差しが春めいている。

ローズマリーが鍬でじゃがいもを掘っていると、笑い声が聞こえた。だが、そこにはだれも居ない。

「空耳かしら……ラピが居るわけないもんね……」

ラピの声だと思ったのだ。ローズマリーは悲しくなつて、その場に蹲つた。

「どうしたの？　ローズマリーさん」

すると、本当にラピの心配そうな声が聞こえた。ローズマリーが辺りを見回していると、空からラピが降りてきた。

「ラピ……」

「久しぶり、ローズマリーさん、元気にしてた？」

ラピが畑の上に降りて、土に足を取られてよろめいた。ローズマリーがラピをとっさに支えた。

「元気なわけないでしょ……。せつかく、あんたのこと忘れそうだったのに……」

ローズマリーは俯いた。また涙が出そうになる。ラピが笑った気配がした。

「ローズマリーさんのこと振ってゴメンな。ローズマリーさんって、馬鹿だよな。せつかく、俺から自由になつて、アイヴィーのマルデ

イクション・ブレスレットが腕から取れたのに……。ローズマリーさん、アイヴィーのこと振ったんだって？」

「なんで、そのこと……」ローズマリーが顔を上げると、ラピが微笑んでいた。

「昨日、アイヴィーがリトリア城に来て、俺にもの凄く文句を言われたよ」

「フン！ ラピが私のこと振るからよ！ 文句言われて当然じゃない」

「それでね、ローズマリーさんに言いたいことがあって」

また、ラピは自分を振るつもりなのだろうかと、ローズマリーは身構えた。

「何よ、まだ文句あるの？ 文句言いたいなら、アイヴィーさんに言いなさいよ」

「ちっがうよ。俺、位を国に返して、平民になることにしたんだ」

「えー、もつたいない！」

ラピくらいの地位があれば、何でも手に入りそうなもののに。

「だから、俺、ラピ・ウィザーになりたいんだけど」

ローズマリーはラピを見て「は？」と尋ね返していた。ラピの目は真剣だけれど――。

「……そんなの、私の家の養子にならないと無理じゃない」

「だから、ローズマリーさんと結婚してこの家の養子に入りたいって言ってるの！」

ラピは一気に言って満足そうに笑った。ラピは、どうだ、と言わんばかりにふんぞり返った。ローズマリーは複雑な感情が沸いてきて、その場でぎこちなく固まった。

「へ、へー、ウィザーって変な苗字だけいいの？ っていうか、私、このまま一生、ローズマリー・ウィザーのままなの？」

ずっと、ローズマリーが嫌だった苗字だ。ラピに散々馬鹿にされたけど。ラピはローズマリーの手を愛しげに握った。

「俺、ローズマリー・ウィザーって人も、名前も、ずっと前から大

好きだけど……俺と一緒に苗字じゃ嫌？」

はつきりと好きだと言われて、ローズマリーの心は恋心で満たされた。

「ううん！ 私も、ラピと一緒に苗字なら好きになれる気がする……！　っていうか、私、ラピが大好きなの！」

ローズマリーが微笑むと、ラピが嬉しそうに笑った。そして、ラピはプツと可笑しそうに噴出した。

「ローズマリーさん、鼻に泥が付いてるよ」

「えっ、どこ？」

ラピがローズマリーの顔に両手を添えた。そして、一気に引き寄せて、ローズマリーに口付けた。

「ブラボー！」

隠れていた、村人たちや家族が物陰から出てきて、拍手した。村人のはやし立てるような口笛が景気良く響き渡る。そんな、村人たちや家族などお構いなしに、ラピとローズマリーはずっとキスしていた。もうすぐ、冬の季節を迎えるが、このウィザー家だけは当分春のようだ。鳥たちが祝福するように空の彼方へ飛び立って行った。

< 完 >

第六十話（最終話） 春の訪れ（後書き）

やっと、完結しました^^ここまでお読みくださりありがとうございます^^
いました^^

よろしければ、感想など恵んでくださると嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3948p/>

まるでいくしょん ぶれすれっと

2011年6月20日08時25分発行